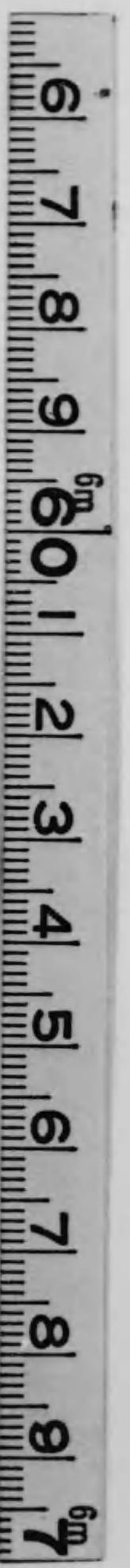


376
76



國民の書局

○ 大
○ 國民の書局
○



始



376
76

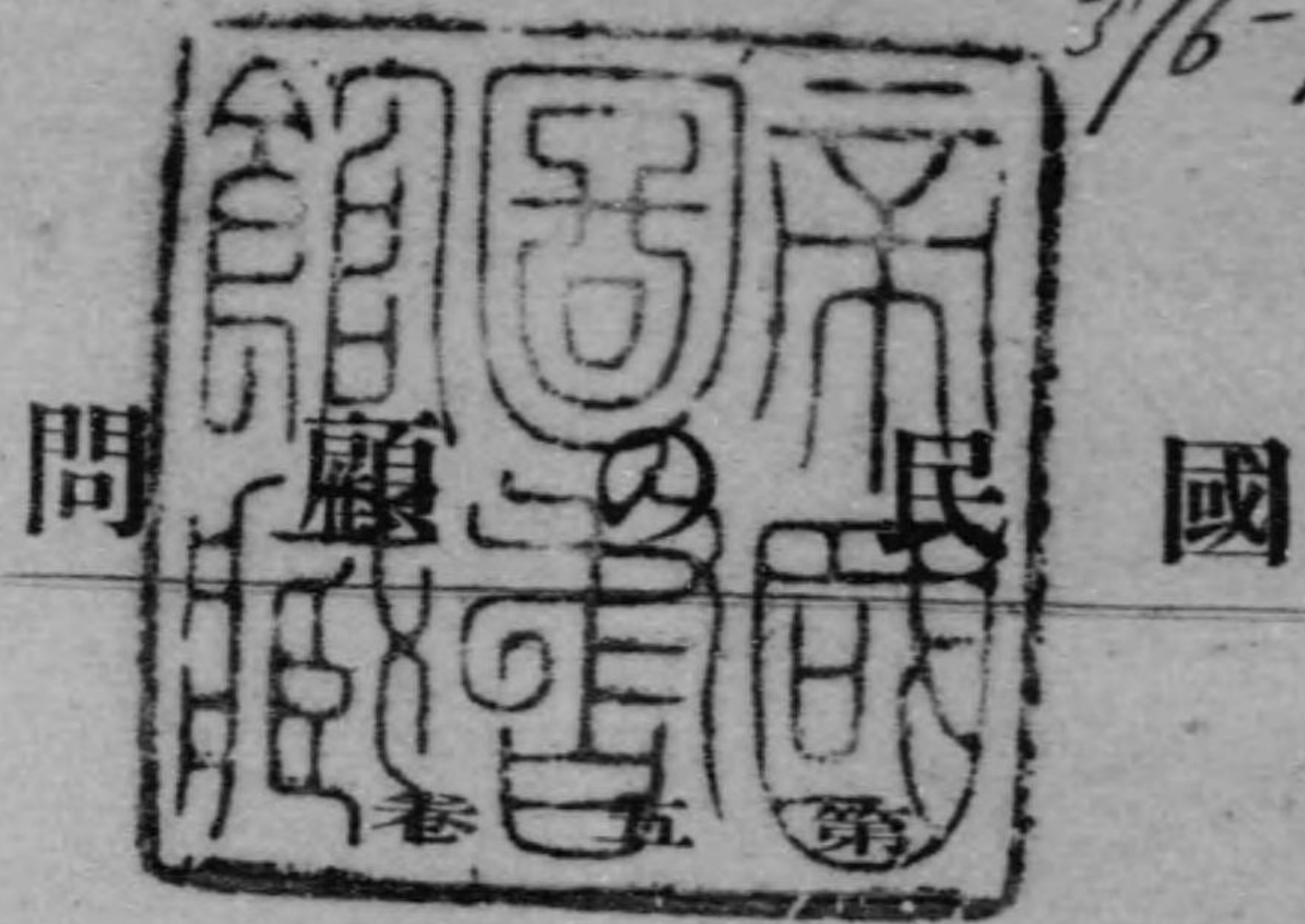


國民の顧問

第五卷

- | | |
|---------|-----|
| □ 文 | □ 文 |
| □ 藝 | □ 藝 |
| □ 蜜蜂の飼養 | |

376-76



蜜蜂の飼養

文藝

大正
7.7.8
内交

編局纂編會協民國本日



國民の顧問

第五卷 目次

第壹編 文藝

第一章 文章

第一節 多讀と多作

多讀……………二 多作……………二

第二節 作文の順序

題……………三 思考……………三
配列……………三 結合……………三
推敲……………三

第三節 文章の要素

明晰……………四 雄健……………四
趣味……………四

第四節 文章の修辭

目次

明喩法……………五
寓言法……………六
對照法……………六
疑問法……………七
嗟嘆法……………八
漸層法……………八
反覆法……………九
隱喩法……………五
擬人法……………六
誇張法……………七
引用法……………七
寫聲法……………八
反語法……………八
省略法……………九

第五節 文章の種類

一、書簡文……………一〇
實用と慶弔……………一〇
組織……………一三
認め方……………一四
二、書簡文例……………一四
夫に送りし文……………一六
新築落成祝賀……………一六
三、記事文……………二〇
野路の夕ぐれ……………二〇
海上の極樂園……………二三
五、紀行文……………二四
一、書體……………一〇
用語……………一〇
署名と宛名……………一三
はかきの認め方……………一四
在京の妹へ……………一五
舊師に上る文……………一六
妹に諭す書……………一七
四、記事文例……………二〇
巴里の秋……………二二
ナイアガラの瀑布……………二三
六、紀行文例……………二五

箱根路……………二五
 銚子町のほとり……………二七
 八、抒情文例……………二九
 明月の夜……………三〇
 九、隨筆文……………三一
 人の容貌……………三二
 四季……………三三
 十一、慶弔文……………三五
 弔文……………三五
 勅語下賜紀念祭祝辭……………三六
 奥田義人市葬弔詞……………三七
 祭の詞……………三七
 帝國大學卒業式答辭……………三九
 論文……………四〇
 十四、論說文例……………四二
 作文論……………四三
 理想に生活する人……………四四
 十六、日記文例……………五〇
 鎮夏日記……………五二
 『禪と英雄』の序……………五三
 浪打峠を越ゆる記……………五九
 七、巧情文……………六〇
 寫眞……………六〇
 良夜……………六一
 十、隨筆文例……………六一
 花と月……………六二
 鬼怒と小貝……………六三
 慶文……………六四
 十二、慶弔文例……………六五
 内國勲業博覽會祝辭……………六六
 戦死者を弔ふ文……………六七
 勝安芳君を弔ふ……………六八
 十三、論說文……………六九
 說明文……………七〇
 頼山陽論……………七一
 國語國文の變遷……………七二
 十五、日記文……………七三
 湯河原日記……………七四
 十七、序、跋、銘、贊、題……………七五
 『朝野の五代問』の序……………七六
 『奇人正人』の跋……………七九
 『世界圖屏風』の跋……………八〇
 足木翁の墓碑銘……………八一
 韓文公像の贊……………八二
 寒江獨釣圖に題す……………八三
 朱文公像の贊……………八四
 自ら小照に題す……………八五
 第二章 和歌……………八六
 第一節 和歌の沿革……………八六
 上古時代……………八六
 奈良朝時代……………八七
 平安朝時代……………八八
 鎌倉時代……………八九
 室町時代……………九〇
 江戸時代……………九一
 明治以後……………九二
 第二節 和歌の種類……………九三
 短歌……………九三
 長歌……………九四
 旋頭歌……………九五
 今樣……………九六
 第三節 新體詩……………九七
 なつかしき山……………九八
 孝女白菊の歌……………九九
 第四節 和歌の作法……………一〇〇

詞句の活用……………一〇一
 字餘……………一〇二
 枕詞……………一〇三
 題詠……………一〇四
 縁語……………一〇五
 修句……………一〇六
 序歌……………一〇七
 第五節 和歌の書式……………一〇八
 懷紙……………一〇八
 季同……………一〇九
 季無……………一一〇
 墨繼……………一一一
 一首懷紙……………一一二
 三首懷紙……………一一三
 認め方……………一一四
 色紙の認め方……………一一五
 扇面……………一一六
 端作……………一一七
 季書……………一一八
 名乗……………一二〇
 關字……………一二一
 二首懷紙……………一二二
 短冊……………一二三
 色紙……………一二四
 詠草……………一二五
 第六節 和歌の古今例……………一二六
 第三章 俳句……………一二七
 第一節 俳句の沿革……………一二八
 起原……………一二八
 漢の時代……………一二九
 唐の時代……………一三〇
 俳句の起原……………一三一
 流派の變遷……………一三二
 月並……………一三三
 俳句と發句……………一三四
 明治時代……………一三五
 第二節 季……………一三六
 雜……………一三五
 季重なり……………一三六
 季寄……………一三七
 第三節 俳句の作法……………一三八
 字餘……………一三八
 作句の種類……………一三九
 趣向……………一四〇
 題詠……………一四一
 切字……………一四二
 平叙と倒叙……………一四三
 動と不動……………一四四
 運座……………一四五
 第四章 漢詩……………一四六
 第一節 漢詩の沿革……………一四七
 春秋戰國時代……………一四八
 六朝文學……………一四九
 宋の時代……………一五〇

金元の時代	二二三	明の時代	二二三
清の時代	二二三	日本の漢詩	二二三
第二節 漢詩の種類	二二四	單起雙收體	二二三
四言古詩	二二四	五言律詩	二二三
七言古詩	二二四	漢詩の用語	二二四
五言律詩	二二五	八句全對聯	二二三
五言排律	二二六	五言排律	二二四
五言絶句	二二六	實接と虚接	二二六
第三節 漢詩の作法	二二六	第貳編 蜜蜂の飼養	二二七
平仄の式	二二六	第一節 蜜蜂の種類	二二七
下平聲	二二七	日本種	二二七
去聲	二二七	サイブリアン種	二二八
平仄の符號	二二九	コーカシアン種	二二九
下三連	二二九	第二節 養蜂場	二三〇
起承轉合	二二〇	養蜂場の位置	二三〇
七言絶句	二二三	養蜂舎	二二三
拗體	二二三	第三節 養蜂の利益	二三一
對聯	二二三	蜂蜜	二三一
		養蜂の利益	二三一
		第四節 蜂群の組織	二三五
		蜂王	二三六
		蜂王の交尾	二三七

蜂王の産卵	二二七	蜂王の老衰及壽命	二二八
二、働蜂	二三六	働蜂の繁殖と産卵	二三六
働蜂の職務	二三九	働蜂の壽命	二三九
三、雄蜂	二四〇	雄蜂の職務	二四〇
雄蜂の壽命	二四〇	四、蜂兒	二四〇
雌卵と雄卵	二四〇	蜂兒の變態	二四一
蜂兒の食物	二四一	第五節 分封と巢脾	二四二
第五節 分封と巢脾	二四二	分封の原因	二四二
分封の原因	二四二	分封の時期	二四二
自動分封	二四三	強制分封	二四三
分封の合同	二四四	人工分封	二四四
分封の豫防	二四七	分封後	二四八
巢脾	二四九	蠟	二四九
樹脂	二五〇	巢房	二五〇
第六節 蜜蜂の食物	二五〇	第八節 管理と取扱	二五九
花蜜	二五〇	巢箱の位置	二五九
水	二五一	管理法	二五九
		夏の管理	二六〇
		冬の管理	二六二
		蜂王と蜂群	二六三
		蜜	二六三
		取扱の時刻	二六三
		蜂に整れた場合	二六四
		第九節 蜜蜂の飼養	二六四
		巢箱	二五二
		分離器	二五二
		製蠟器	二五四
		覆面帽	二五五
		蜂箒	二五五
		掏ひ板	二五六
		蜂王籠	二五六
		餌養器	二五七
		巢礎	二五七
		繼箱	二五三
		蜜刀	二五四
		蒸煙器	二五五
		捕蜂器	二五五
		分封屋根	二五五
		隔玉板	二五六
		雄蜂驅殺器	二五六
		巢框入	二五七
		轉地飼養	二五九
		春の管理	二六〇
		秋の管理	二六一
		取扱上の心得	二六二
		蜂卵と蜂兒	二六三
		蜜蜂の恐れるもの	二六三
		巢箱の移轉	二六三
		蜜蜂の馴致	二六四

國民の顧問

目次

食餌の調製……………	二六五	給與の方法……………	二六五
飼養の時期……………	二六六		
第十節 蜜蜂の越冬……………	二六六		
舍外の越冬……………	二七〇	舍内の越冬……………	二七〇
凍死の救助……………	二六六		
第十一節 採蜜と製蠟……………	二六八		
採蜜の時期……………	二六八	繼箱と採蜜の關係……………	二六八
分離器……………	二六九	巢蜜……………	二七〇
製蠟……………	二七〇		
第十二節 外敵と疾病……………	二七二		
巢虫……………	二七三	黄蜂……………	二七三
蜂虱……………	二七三	蟻……………	二七三
蜘蛛……………	二七三	小鳥類……………	二七三
油虫……………	二七四	其他……………	二七四
下痢……………	二七四	腐敗病……………	二七四
黒死病……………	二七五	軟化病……………	二七五
痲痺病……………	二七五		
		第十三節 種蜂……………	二七六
		種蜂の購入……………	二七六
		蜂群到着の注意……………	二七七
		第十四節 養蜂と植物……………	二七六
		土地と養蜂數……………	二七六
		有要植物と開花期……………	二七九
		花の良否……………	二七六

第五卷目次終

國民の顧問 第五卷

第壹編 文藝

第一章 文章

國民の顧問

文章は其人の思想や感情を文字の上に表はすべきもので、人が言語の必要ある如く、文章も亦吾人が社會に生活する以上缺くべからざるものである。吾人は言語によつて或る程度まで自分の思想や感情を他人に知解せしむる事が出来るが、遠く隔たつて居る者とか、若しくは後世の者に之を傳へるにはどうしても文章の力によらねばならぬ。故に如何なる者

文藝 第五卷

でも之を心得て居らぬと、人として生存して行く上に非常な不便と不利益を見るものである。殊に社會が進歩するに従つて益々之が必要を感じて來る。しかし世には此文章なるものを頗る至難の業の如く思つて居る者も尠くないが、それ程六ヶ敷いものではない。勿論大文章家になるとか、一大名文を作るとかするには容易の事ではないが、自分の思想や感情の用を辨するの文章を作るには必ずしも至難ではない。只文章を書くには修熟を要するものであるから、よく研鑽工夫を凝らさねばならぬ事を豫め覺悟するを要する。人の言語に巧拙ある如く文章にも亦巧拙があるもので、之は其修熟の多少に因るものである。それから又言語に高尚と野卑とある如く文章にもそ

れがある。自己の思想や感情を表はすに頗る巧妙であつても、それが野卑である場合には他人に不快の感を與へるものであるから此點に十分注意せねばならぬ。言語や文章の高尙である事は、やがて其人の心事が高尙である事を示すもので、之には先づ平素自己の精神を修養して高潔ならしむる様努めねばならぬ。之を要するに文章は其人の人格を表はすもので、よい文章を作らんとするには感情の陶冶と思想の涵養とを第一とし、次に之れが發表の方法を修練する事に心掛けねばならぬ。

第一節 多讀と多作

文章を作るに最初の準備ともいふべきものは「多く讀む事」と「多く作る事」とである。

多讀 といふのは必ずしも其分量を多く讀むといふ事ではなく、よく其讀むべき文を撰んで熟讀玩味し、其文の體と組織と思想等に通ずる事である。

和文には和文として自ら流麗溫和の妙味があり、漢文には簡潔典雅の長があり、歐文には緻密正確、俗語俚諺には滑稽曲折の妙があるから、是等の特長をよく玩味して好句或は好熟語に逢つたら部門を分ちて之を筆記し置き、文章を作る際に應用する様に心掛けるがよい。只徒らに多讀して之を味へる事をせねば効がない。次は讀書によつて思想の涵養に努める事で、先輩は如何なる思想や感情を文章の上に表はして置いたか、現在の自分の思想や感情と先輩のそれとは如何なる差異があるか等をよく比較考量する事も大切である。

多作 といふ事も只徒らに歐文を多く作るといふ意味ではなく、よく心して作り、成る可く自分の思想や感情をよく表はす様に心掛けて度を重ねれば一度は一度より發達し、修練するに従つて自ら呼吸を覺えるものである。しかし初めから餘り長文を作るよりは二行でも三行でもよいからよく練つた文を

を凝らし、次に配列を考へ、次に結合し、最後に推敲をせねばならぬ。

題 を定めるには其文がよく其題に統一する様にし、區域を成る可く狭くして、意味をよく徹底し得る様にせねばならぬ。區域を廣くすると往々にして意味が漠然となり、要領を得ない文章となる場合が多い。

思考 をするには其事物の性質、原因、結果等の如何を詳細に觀察し、又先輩や古人の文章をよく讀んで見て自分の思想を練るのである。

配列 は即ち仕組ともいふべきもので、思考によつて練つた思想や事物を如何に仕組んで書くべきかを吟味し、整頓する事で、最初に書くべき事、中段に書くべき事、結尾に書くべき事等を案配するのである。

結合 材料を仕組むべき案が出来たら次は之を結合せねばならぬ。そして一つの文章とするのである。

作る様にするのがよい。そして筆を執る前に其書かんとする文章に關し、古人や先輩が如何に書いたかを研究し、十分に自己の腹案を立て、後筆を執つて書くべきである。それには最初は平明を主とする文を作る事を練習し、次は生氣に富んだ文章を作る事を練り、其次は流麗の文を草し、更に品格のある文を草する様に漸次修練せねばならぬ。初めから品格のある文を作るなどは却つて發達を妨げるものである。斯くの如くして讀んでは作り、作つては更に讀みして居れば遂には文藻自在に湧出し、一言、一句の間にも一種獨得の妙味を表すに至るものである。

第二節 作文の順序

既に文章家となつた者は兎も角、未だ文章の練習中に屬する者か、又は之れから文章の作り方を習はうとする者は、大體之を作る順序を考へなければならぬ。それには題を定める事を第一とし、次に思考

るが、此場合には段落を明かにし、照應、抑揚、波瀾、起伏、頓挫等の妙ある様にし、修辭上の注意をも爲して草するのである。

推敲 といふのは文章を書き終へてから之を添削したり、章句を練つたり、改修を加へたり、瑕瑾をなくしたりする事で、幾度となく改竄せねばならぬ。此推敲は文章に最も大切なもので、之をよく注意して爲せば自然の文章の善悪も悟つて一回毎に發達するものである。

第三節 文章の要素

文章には各々要素がある。人の理性に訴ふべき文章は明晰なるを要し、感情に訴へる場合には雄健でなければならぬ。又嗜好に訴へるには趣味を有して居らねばならぬ。そして此三つの要素がよく調和して始めて圓滿な文章となるのである。

明晰 は即ち人が文章を読んで理解し易い様に

するもので、之には文章の意味を明白にし、左の事項に注意せねばならぬ。

- 一、語句の配置や順序を正しくする事
- 一、文章を簡易にして分り易くする事
- 一、意義の漠然とした曖昧の語を用ゐない事
- 一、語句を餘り省略したり冗漫にしたりせぬ事
- 一、字義を誤つたり、語法を誤つたりせぬ事
- 一、外國語、俚諺、新語、廢語等の使用に注意し、出來得る限り之を使用せぬ事

雄健 は即ち文章を読む者に感情を起させる様にする爲であるから文章に勢力がなければならぬ。それには

- 一、簡潔な語句を用ゐる事
- 一、明白な語句を用ゐる事
- 一、抽象的の文辭を避けて具體的にする事
- 一、感情に訴へる様な適當の修飾語を用ゐる事等に注意するを要する。

趣味 は文章を他人の嗜好に訴へる様にするのであるから、それには

- 一、句節に變化をあらしめる事
 - 一、文辭及び語路を快活にする事
 - 一、雅致流麗の語句を配置する事
- 等に注意し、讀み終るまで讀者に飽かせぬ様にせねばならぬ。

第四節 文章の修辭

修辭 は文章の修飾で、文章を作らんとする者は此大體を知つて居る必要がある。

明喩法 は或る事物を他の事物に比較するもので、之を適宜に用ゐると文章に興味あるのみならず、意義を明瞭ならしむるものである。例へば

人生は朝露の如し。
富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如し。
の如きものであるが、明喩を用ゐる場合には左の諸

項に注意せぬと却つて趣味を損し、滑稽となるものである。

- 一、比喩の餘りに類似したるものを用ゐる事
 - 一、甚だ突飛な比喩は用ゐぬ事
 - 一、古來云ひ古したる比喩は用ゐぬ事
- 隱喩法** といふのは隱に或る事物と比較する事で、之を用ゐると其勢力を加へ、感動を深からしむるものである。例へば

嵐ふく御室の山のもみち葉は龍田の川の錦なりけり。
君子の徳は風なり、小人の徳は草なり、草互に風を加ふれば必ず偃す。
山の井の水にうつれる月影はぬれて疊らぬ櫻なりけり。
右の如く一見して比較した痕のない様にし、又明喩の如く餘り類似して居る比喩はよくない。それから人の知らない事に比するのを避けねばならぬ。

寓言法 といふのは興味の深い、解り易い話説の力を借りて解し難い事物や興味の少い事柄を會得せしむるもので、彼の舌切雀、かちく山、桃太郎等のお伽噺は即ち寓言法を用ゐたものである。

擬人法 は生命のない事物に人間の性格や動作を有するが如く見做す事で、例へば小兒が木片や石塊等で何所かを打つた時には、之を吐るが如きは木石を生命のあるものゝ如く取扱ふからである。そして木石に意思があるものと見做すからである。又野蠻人が雷電を神としたり、高山深淵を神靈とするが如きも一種の擬人法である。是等の擬人法を文の上には表はす場合には例へば

尾花の人を招くもをかし。
家路まで送らん月の影ながら、わかれて歸る心地こそすれ。
深草の野べの櫻も心あらば今年ばかりは墨染に咲け。

の如きもので、之を用ゐると意義の明晰を増し、感動の力を大にし、音節の流麗を助け、無形の事物を眼前に躍動せしめるものである。故に擬人は詩の生命なり、擬人なければ詩は枯死すとさへ言つた者がある。即ち死物を生命あるものとして血あり、涙あり、恨事あり、悲哀あらしめるからである。しかし之を用ゐるに注意すべきは餘り頻繁に用ゐたり、必要なき場合に強ひて用ゐたり、餘り長大に亘つたりする事を避けねばならぬ。

對照法 は相反する事物を配列して修飾を爲すものである。即ち黒の中に白を點すれば白はますます白く、白の中に黒を點すれば黒は益々黒く見ると同じ理で、之を文の上に應用したのものである。例へば
年々歳々花相同じ、歳々年年人同じからず。
富は精神と財布とを空虚にし、貧は二つながら之を満す。

鶏口となるも牛後となる勿れ。
の如きは最もよい例である。之を用ゐると意義を明瞭にし、言語を節約し、文體に活氣を添へるものであるが、之も餘り多く用ゐると讀者が理解し難く、處飾に陥り易いものであるから注意せねばならぬ。
誇張法 は事物の印象をして一層感深く明かならしめる爲に誇大にする事で、文の勢力を加ふる一方法である。例へば

山はさけ、海はあせなん世なりとも君に二心われ
あらめやも。
力は山を抜き、氣は世を蓋ふ。
等の如きものである。しかし必要のない所に餘り之を用ゐると文章が徒らに放浪に流れて無意義となる恐れがあるから未熟な内は成る可く之を用ゐる事を慎しまねばならぬ。次に之を用ゐる注意としては、第一に誇張の事實は實際に有りうべからざる如きものであるが、しかし背理、撞着の性あるものではない

けない。第二に誇張は自然的でなければならぬ。殊更に作つたり求めたりしてはならぬ。第三に誇張は科學的精緻を要する文には用ゐてはならぬ。第四に眞正の誇張は正理と生新とを備ふるを要し、粗雑なる誇張は讀むものをして信する事なからしむものであるから、之を用ゐる場合には慎重の心を以てし、讀者をして首肯せしめ、感ぜしむるを得るものでなければならぬ。

疑問法 は實際に疑問のあるのではないが、語氣を強める爲に、わざと問を發する語句とするのである。例へば
さばかりの事知らぬ人何所にかある。
素平の民にあらすや。
虫聲戀々、時々白銀の半の墜つるは誰が水を汲み去りしか。
引用法 は適切なる故事や古言を文中に引用する事である。これには古名家の名語妙句や文章大家

の語句を引用すべきもので、著名でないもの、語句を妄りに引用するのは却つて作者の陋劣なるを示すものであるから注意せねばならぬ。

嗟嘆法 は自然に發する感激の情で、感情に訴ふべき文章や詩歌等には之を用ゐる場合が少くない

例へば

嗚呼天道是非か。

あら恨めしの世や。

の如きものであるが、之も餘り度々使用すると、却つて感動を與へないものとなるから、斯る嗟嘆の語句を使用するのは、眞に感情が其所に流露した時に用ふべきである。

寫實法 は事物を形容するに用ふるものである

が、之は目のあたり其事物を見る様な語句を用ふるのがよい。例へば

さんぶと水に飛び込む。

ばさ〜と芭蕉の葉が風に揺られて居る。

ある事を知らしむるのであるが、之を暗々裡に云つて婉曲に述べ、背理なものも表面は正確なる如くあらしむる所に於て作者の技倆が顯はれ、讀者に痛快を感じしむるのである。例へば

昔世には賢哲と雖も或は囚となり、或は受刃の事もありて珍しからずと雖も、今日の如き聖代に生れて……。

反覆法 は同一の字や句や語を重複させて文勢を強くする事である。そして語路の調和をよくするのである。例へば

學、退之（韓愈）の如く、辭、退之の如く、言論を好む事退之の如く、慷慨自ら正直を謂ふ事退之の如し。

省略法 は語句を簡單にする爲に、語句を略する事で、之は多く和歌俳句の如き限られた字數の場合に殊に必要な法で、暗々の裡に讀者自ら想像し得る様にし、其間に一種の妙味を存せしむる事で

細雨煙の如し。
滔々と流る。

の如きである。

漸層法 といふのは文の勢力と明晰とを増進せ

んが爲に語句を向上的段階に配置し、一歩々々高く、一段毎に強く、以て最後に最大の感動を與へる様に

するものである。例へば

秋は夕ぐれ、夕に花やかにさして山のはいと近く

なりたると、鳥のねどころへゆくとて三つ四つ二

つなんどとびゆくさへ哀れなる。まして雁の多く

連ねたるが、いと小さく見ゆるいとをかし。日入

りはて、風の音虫の聲などはたいふべきにもあら

ずめてたし。（枕草紙）

の如きは最もよく漸層法を用ゐた例である。

反語法 は文章の意義を全く反對した意義を抱

かしむる事で、思想の背理にして其誤りの明白な事を只表白するのみならず、讀者をして直に其誤りで

ある。例へば

誠に望ましき事にこそ。

黒みけり沖のしぐれの行き所。

夏の夜や蚊をきすにして五百兩。

千曲川、柳がすみて春淺く、水流れたり、たゞひとり、岩を繞りてこの岸に愁をつなぐ。

第五節 文章の種類

文章は人智の發達するに従ひ、自ら形體の變化を來すものであるが、之を大別すれば散文、韻文の二種となり、散文には書翰文、記事文、紀行文、抒情文、隨筆文、慶弔文、論説文等の別がある。尙又は等の文体には文語体及び口語体の二種があつて、文語体は今日最も多く用ゐらるゝ文体で、又普通文体といひ、口語体は口語で談話するが如き文体で、言文一致体ともいつて居る。現時の小説の如きは殆んど此口語体である。

一、書翰文

書翰文は即ち手紙に用ゐる文章で、最も多く一般の人に使はれて居るものである。

文體 書翰文の文體は江戸時代の遺物たる候文體及び近時に至りて現はれた口語文體等があるが、今尙一般に多く用ゐられつゝあるのは、候文體である。此内何れを用ふべきかは今日學者間に兎角の議論があつて勿論一定し難いが、要は最もよく用を辨じ、意思及び感情を表はし得るものであれば何れを用ゐても差支ない。候文體を用ゐるのが得意の者はよろしく之を用ゐ、口語文を用ゐねば思ふ様に自分の意思感情を先方に通じ難い者は宜しく之を用ふべきである。

實用と慶弔 書翰文には實用を旨とする場合と交際上慶弔の意を表はすべき儀式的の場合とある。實用的の書翰文は第一に其意義の明晰なるを要し、

第二に簡潔と趣味とを以てせねばならぬ。そして怡かも其人に接して相語るが如き思ひあらしめる事が大切であるが、それだからといつて徒らに續々長文を巨り、讀む者をして多大の時間を費さしめたり、讀むに堪へない様な書き振りではいけない。眞情を吐露するに要領を得たものであらねばならぬ。次に儀式的の書翰文は盛禮虚飾を戒しめ、其場合に相應じた誠心を以て、相當に修飾ある慶弔の辭を用ゐなければならぬ。

用語 書翰文に用ゐる用語は往々にして誤つて使はれる事があるから、最も多く用ゐられる語に就いて知つて置く必要がある。

【消息】はたよりといふ意で、即ち音信の事である。
【機嫌】は元様子の意に用ゐるが、今は人の氣分のよし悪しを問ふ時に用ゐられる。

【折角】はわざ／＼力を用ゐる意に用ゐる。
【沙汰】は元人の評の事に云つたが、今は音信に用ゐる。

も良い事に轉用されて居る。
【尤も】は但しの意となる場合と、至當の意になる場合とある。

【據なく】は已むを得ざる意に用ゐられる。
【候へば】は俗に「であつたれば」の意である。
【候はゞ】は俗に「であるならば」の意である。

【御座】はおはすの意でありの敬語である。
【何卒】はどうぞの意で、數多の中から其ひとつに決定してよといふ様な意を含んで、或る事を爲さしめんとする時に用ゐる語で尊長などに對しては用ゐてはならぬ。

【罷在】は辭、參、往、去など様々の意にいふのであるが、書翰文には兼ねて強意、且つ敬語として用ゐられて居る。

【兼】は一つある上に又一つを有するをいひ表はす文字である。

【候條】は其事といふ意である。

【都合】はすべあはせる。手筈を調ふるといふ様な意味に用ゐられる。

【挨拶】は會釋する事に用ゐる、又反禮返答などの意に用ゐられる。

【處】は即ち何々に候處といふ様な場合に用ゐられるもので、しかるにといふ意味である。

【間】は何々候間といふ様な場合に用ゐられ、からといふ意味である。

【儀】は事といふ意味で、例へば小生儀といへば小生事といふのと同じである。

【旁】はながらの意に近く、兼ねる義である。
【一切】は一向、一概の意であるが、轉じて決しての意に用ゐられる。
【斷り】は道理を述べて謝斷する意である。
【結構】は善美を極めた褒詞であるが、今は何事に

【偏に】は一重にとか、ひたすらとかといふのと同じ意味である。

【砌】は際といふ事で、其時といふ意である。

【留守】は昔車駕の京に在らざる間、別に留守と稱する役を置かれたが、それから轉じて人の家に居らぬ事の意に用ゐる。

【恙】は憂といふ事で、恙なくと云へば憂がないといふ意味になる。

【口實】は俗に「かこつけごと」といふ意である。

【かしく】はあなかしこの略の轉じたもので、あなは呼（あゝ）の意である。かしこは畏の意で、恐敬の意を表はすものである。

【さて】は然して、そこでといふ意である。

【何れ】は俗にどれといふに同じで、いづれもといふとどれもといふ意となる。又口語にていづれは其前の意を受けていづれにもせよの意をいふのである。

【支度】は食事を調ふるをいつたものであるが、今は用意の義に用ゐられて居る。

【相】は相成、相較べなどの相は別に意義のある譯ではなく、たゞ意を強うする爲めの冠辭として用ゐられて居る。

【仕り】はつかひたてまつりの略で、俗にします、しましての意で、貴者に對する敬語である。

【油断】は俗にうっかりといふ意である。

【呉々】は心の思ひにくるゝ様にいふ語である。

【是非】は元可否といふ意に用ゐるが、今は止むを得ずの意に用ゐる、又必ずといふ意に用ゐられる。

組織 書翰文を正式に書くには幹部、屬部の二部に分ち、幹部は前文、本文、末文の三部に分ち、屬部は日付、署名、宛名、脇付の四部に分ちべきものである。之に又副文を加ふる事もある。それから略式のものになると、幹部の内前文を省略する

か又は末文を略する事がある。

起筆（拜啓、拜復の類）
時候
先方の安否
自己の動靜
本文（要件を書く）
自愛（御自愛の程祈り上げ候の類）
結尾（拜具、敬具の類）
末文

幹部
前文
日付（自己の氏名の上に認む）
署名（正式には姓名を書し、略式には名か又は號等）
宛名（正式には先方の姓名、場合によつては姓のみ）
脇付（閣下、侍史、楯下等の類）

屬部
副部（追伸、二伸の類）

右の如くするが正式の書翰文であるが、是等は時と場合により、適宜に取捨せねばならぬ。只徒らに舊式の方法にのみ拘泥して大切な要件を洩らす様な事があつては書翰文の目的に反するものであるから十分注意せねばならぬ。

署名と宛名 署名は日付の下に認めるのであるが、正式には氏名共に書し、略式には名又は號のみと記す事がある、自己の名を省略して先方は氏名共に書したり、又は自己の氏名共に書し、先方の名のみ記すが如きは失禮になるものであるから、自分より目下の者でない限りはそんな書方をしてはならぬ。先方の氏名は高く上げて書く程尊敬した事になるものである。それから署名、宛名共に連名な場合には左の如く書くものである。

月	日	陸軍少將
		陸軍中將
		陸軍大將
		陸軍大將殿
		陸軍中將殿
		陸軍少將殿

即ち當方の署名は地位の低い者程始めにして高い者

を後にし、先方は地位の高い者を始めにして低いものを後にするのである。

認め方 書翰文を認めるには字體を美しく、位置配合等に注意して読み易い様にする事を忘れてはならぬ。字體は行書又は草書がよいが、先方が読み得ない様に走り書きをする事はよろしくない。文中に貴下、閣下等の文字がある場合には新たに墨を繼いで大きく書し、小生、私等の自己の代名詞は稍小さく書くべきものである。又宛名の尊稱は成る可く行の頭に書き、行の終にならぬ様にすることがよい。次に人の氏名は二行に亘る事を避け、文中に詩歌、其他特に注意を要する辭がある場合には別行にして本文より一二字下けて書すべきである。それから漢語の熟字は假名で書く事を避け、濁音は必ず濁點を附すべきである。さうしないと意味の通じない場合があるからである。

はがきの認め方

はがきは簡單なる要件の場合に用ゐる者で、高貴の人や、己の師長等に對しては用ふべきものでない。之を認めるに就いて注意すべきは第一に勉めて簡潔明瞭を主とすべき事で、前文や追て書を要しない。そして成る可く冗語を省き平易でなければならぬ。第二は必ず月日を記入する事、第三は餘り走り書せず、成る可く行書體にする事、第四は脇付を用ゐない事、第五は繪はがきに書く場合で、之は實用以外に用ゐるものであるから、文章は其繪に因んだ事か又は文章に因んだ繪はがきを用ゐるのがよい。そして文章も趣味を第一として書くのがよい。

二、書翰文例

新年祝賀

小中村 義象

東天紅と告ぐる鶏の聲に目ざめて、初日を拜するうれしさ、御同感の事と存じ候。盥漱了りて先づ、皇

手紙で父上も母上も大喜びでした。藤枝がくくと日に幾度噂が出るか知れませんが。旅の空なる修業の身、何か不自由な事でもあつたら、私にお知らせなさい。母上と相談して善い様に取りなして上げますから、決して餘計な遠慮をするには及びません。父上も母上も、お年柄文に何かにつけて其方を御案じ遊ばすから、折々は學校の情況や、御身の安否を知らせるがよいです。來月の試験が済んだら、お歸りの事、皆が待つて居るから必ず歸つて御出でなさい。

國木田 獨歩

拜啓昨日午後九時半無事着神仕候。神戸大體の形勢は只今の處面白からず候。之に就き今夜これより進藤君、牧二君と三人合議致す積りに御座候。昨日は汽車の内にて非常なる憂鬱に沈み、我知らず涙がこぼれて閉口仕候へども、酒をがぶのみして神戸まで寢てしまひ候間、大いにくつろぎ申候。何れにしても一日も早く歸京仕る可く候。家よりよき所は御座なく候。

城を拜し、それより父母を祝ひ、我身をいふ、實に人生の幸福は此朝に集まるが如き心地仕候。屠蘇難煮の定式を了へ、身のほどくに着裝ひて、馬に車を馳せ行く大路の有様も、一年の中いかで他日に見る事を得候はむ。空の色の變りたるにもあらず、春の立ちたるにも候はねども、何となく鳥の聲も風のそよぎも、昨日の名残をとめてざる様なるに、兒女は早う風、鞠、羽子など弄び歩くなど、今より世は賑やかなるべく存ぜられ候。殊に御家には去年押詰りての御縁組といひ、又承る處によれば、御父上様七十の御高齡を受けさせられ候趣、誠にめでたき事の一時に集り候へば、祝ふ門には福來ると申す諺にももれさせ給はず、本年はいかばかり目出度き御事のみ多くあらせられ候はんと、我々までも樂み居候。まづは君が家の萬歳を祈り、併せて其幸福にあやかり申さんとて、早々ながら一筆聞え上げ候。

在京の妹へ

小森 松風

浦の山には初雪が降つて、めつきり寒くなりましたが、折角の御勉強、何より結構であります。先日

夫に送りし文

木村重成の妻

一樹の蔭、一河の流、これ他生の縁と承り候にこそ。そもおとせの頃よりして、借老の枕をなして只影の形に添ふが如く思ひ参らせ思はれ参らせ候。此頃承り候へば此世限りの御催しの由、蔭ながら嬉しく思ひ参らせ候。唐の項王とやらんは世に猛き武士なれど、虞氏の爲に名残を惜しみ、木曾義仲は松殿の局に別れを歎かれしとや、されば世に望み窮りたる妾が身にては、せめて御身御存世の中に最後を致し、死出の旅とやらにて待上げ奉り候。必ずく秀頼公多年海山の厚恩御忘却なき様頼み上げ参らせ候。あらく目出たくかしこ。

舊師に上る文

小中村義象

一書謹呈仕候。時下いよく御清康の御事と恭賀仕候。借小生事、聊か思立ち候事ありて一昨年より日本巡廻を初め、只今は當地に参り居り候。此地は御地と異りて氣候不順、風俗輕薄、甚だ面白からず候へども、之も何かの爲と存じ、一週日ばかり滞在仕候。

新築落成祝賀

某氏

候。是につけても思出候事は、豫て先生より御教示を仰ぎし時の事に候。人は風雨寒暑に恐るゝ様にては用に立たず、千辛萬苦を積まざる人は、志慮弱なりと仰せられし事、今更の様に思ひ出され、御高恩の忝きを仰ぎ居り候。明日よりは此地より北部へかけて巡廻の筈に候へば天氣は益々甚だしかるべく、物は愈々不自由になり申す可く候。小生が斯る辛苦を重ねて、此に至りし事は、全く先生の御教訓に基きし事にて、今六ヶ月にて殆んど全國巡廻了り候事と存じ、其上には聊か御土産もあるべく、又御高恩に報ずる萬一の材料を天下に頒つ事も出来申すべきかと樂しみ居り申し候。精神一到何事不成と申す事、うかく讀過し候へしに今に至り思ひ當る事多く御座候。先は御無音御詫旁御高恩を思ひあまり、一書拜呈仕候。

一輪拜呈仕候。借て多年御心入れの御普請愈々御落成にて昨日御移轉も済ませられ候由大慶の至りに存じ奉り候。御圖面にて概略承り候ても御勝手の程大方

推察いたされ候猶親しく御様子拜見仕度近日参上いたし候てと樂しみ居り候何れ拜顔の上萬々先づは御祝詞まで申上候。草々敬具。

妹に諭す書

吉田松蔭

此間は御文下され、観音様の御洗米、三日の精進にいただき候様との御事、御深切の御志、感入り申候。精進潔齋などは随分心のかたまり候ものにてよろしき事と存候に付、拙者も二月廿五日より三月晦日まで少々志の候へば、酒肴共一向食べ申さず候。其間一度靈神様御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にも之れなく、御深切の事に候へば相果し度存候へども、當所にてはあたりまへの精進の外に又精進と申候ては連中又は番人共何故と怪しみ尋ね候に付きそれをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日より幸ひ精進日なれば、その日一日に頂き申候。そもく観音信仰せよとの事は定めて禍を除け候爲なるべく、之には大いに論のある事に候へば委細申し進すべく候。拙者未だ観音經は讀み申さず候へども、法華經第二

十五の卷普門品と申す篇に觀音力と申す事高大に述べて之れあり候。大意は觀音を念じ候へば、繩目にかかり候へば忽ち錠鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんぢに折るゝなど申して有之候。之は拙者江戸の人屋にて此經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終此の趣に候。それ故凡人は之れよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。さりながら佛の教は奇妙なる仕掛にて大乘小乗と二つに分ちて小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乗にて申候へば觀音は右の經文の通のものと心得、ひたもの信仰せしむる事に御座候。之は大いに信を起さる爲に候。信を起すと是一心にありがたい事ぢやとのみ思込み、餘念他慮なき事にて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候ても、ちつとも頓著なく繩目も人屋も首の座も平氣になられ候故世の中に如何に難題苦難の來たるともそれに退轉して、不忠、不孝、無禮、無道等仕る氣遣はなし、されど初めより凡夫に一心不亂の、不退轉のと申し聞

かしても少しも耳に入らぬもの故、假に觀音様を拵えて人の信を起こさせ候教に御座候。之を方便とも申候。

さて又大乘と申す方にては出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候ても立身出世など申す事には御座なく候。其の初は釋迦が天竺王の若殿に候處、若き時より感の強き人にて老人を見ては吾身も往く先は老人にならんかと悲しみ、死人を見ては吾身も往く先は死なんかと悲しみ、虫けらの死にたる、草木のかれたるまでに悲しみを發し、生老病死が此世の習なれば、是非に此世を出ねばすますと志を立て、年二十五の時位を棄て、山に入り、右の生老病死を免る、修行をしに參られ候。さ候うて三十出山とて僅か五年の間に生老病死を免る、事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出て来て、それより世の人を教化せられたり。之が即ち出世法なり。故に出世せねば濟世の出來ぬと申すも此事なり。濟世といふのは即ち、此世の人を濟度する事に御座候。さて其死なすと申すは、近く申さば釋迦や孔子と申す御方々は今日まで生きて居らる

故人が尊みもすればありがたがりもし、恐れもするなり。果して死なぬにはあらずや。死なぬ人なれば繩目も人屋も首の座も觀音の經の通には候はずや。楠正成とか大石良雄とか申す人は刃に身を失はれ候へども、今以て生きて居られ候。即ち刀のちんぢに折れたる證據に候。

さてまた禍福は繩の如しといふ事を御悟りなるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など人屋にて死ぬる事に候へば禍の様なものに候へども、又一方には學問も出來、己れの爲、人の爲、後の世へも残り、且つ死なぬ人々の仲間入りも出來候へば、福此上なき事に候。人屋を出て候へば、又如何なる禍の來んや知れ申さず候。勿論其禍の中には又福も交り候へども所詮一生の間難儀だにせば、先には福ある可く候。何の効驗もなき事に、觀音に頼みて福を求むる様の事は必ず必ず無益に存じ候。

尤も右の通に申候へば、身勝手なる申分、不孝なる申分と御存じあるべきが、此所に又論有之候、易の道は満盈と申す事を大いに嫌ふものに候。御互に七

人兄弟のうち、拙者は罪人、芳は夭折、敏は啞子、否様のあしざまなるものなれど、あと四人は何れも可なりに世を渡られ、特に兄様、そもじ、小田村は兩人づゝも子供があれば不足は申されず、世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ。これ程にも參らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にては、高須などにも兄弟の内には悪き人も随分これあり候。されば父母兄弟の代りに拙者、芳、敏の三人が禍を受くるこそと御思ひ候は、父母様の御心も濟まる譯には候はずや。

且つ、杉は随分多福の家なれば、拙者の身の上よりは却つて杉が氣遣ひになるものに候。拙者の身の上は前に申す通り、詰が牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は随分あれど、杉は今にては御父子とも御役にて何の不足もなき中なれば、子供等が何時も此様なる者と思ひて昔山宅にて父様の晝夜御苦勞なされる事を話して聞かせても、眞とは思はぬ程なれば、此先五十年、七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ。氣遣ひなるものにては候はずや。去年も端午に客の多きを、人はめでたしと

嬉しき顔をすれど、拙者は何分先の先が氣遣ひにてたまらぬ故、始終稽古場にかがみて人の知らぬ處にてはひとり落涙したる程の事なりき。もしや、萬一、小太郎が父祖に似ぬ様なる事あらば杉の家も危し危し。父母様の御苦勞を知つて居る者兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にてさへ山宅の事はよく覺えて居るまじ。まして久坂などは猶以ての事。されば拙者の氣遣ひに觀音様を念するよりは甥姪の間へ「樂は苦の種、福は禍の本」と申す事をとくと申し聞かする方が肝要に候。

尙又一つ、拙者不孝ながら孝に當る事之れあり候。兄弟の内一人にても否様の悪き人あれば、あとの兄弟も自然に心が和ぎて孝行する様になり、兄弟も睦ましくなるものに候。之れより拙者は兄弟の代りに此世の禍を受け合ふ故、兄弟中は拙者の代りに父母へ孝行してくる、がよし。さすればつまる所、兄弟中皆よくなつて果ては父母様の御仕合せ、又子供が見習ひ候へば、子孫の爲之れ程めでたき事はなきに候はずや。よくよく御勸辨候うて小田村、久坂なんどへも此文御見せ、佛法信仰はよき事なれど、

佛法に迷はぬ様に、心學本なりとをりく御見候へかし。心學本にのどけさよ、ねがひなき身の神まうで神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。

三、記事文

記事文は或る事柄を記述したる文章で、之を草せんに成る可く平易の文字を選び、而して批評又は自己の意見を挟むを避けるがよい。此文の特色は事柄をありのままに他に傳ふる様にするので、各種の文章中最も容易に見えて而かも草し難きもので、而かも此文章に熟達する時は實際上に効用頗る多いものである。論説文の如きと異つて初から一々結構を施す事なくとも、自己の経験と事柄の觀察とを其まゝに寫せばよいのであるが、其材料及び對境の事物現象に應じて其文字を異にせねばならぬ。例へば優美なるものを記述するには筆路自ら優麗なるべ

く、雄壯なる現象に對しては語句自ら雄壯なるが如きである。餘り虚飾に陥るのはよくない。

四、記事文例

野路の夕ぐれ

森 鷗 外

身は前へ前へと進み行く。左右の並木は飛ぶが如く、前に見ゆるはなれ家は、忽ち側に來り、忽ち後に残り。稻田の邊に來れば秘密らしきそよぎ聞ゆ。しなやかなる幹に着ける鋭き葉は、夕風に吹かれて相摩軋し、えもいはれぬさゝやきすなり。その間には幾千の昆蟲、稻の若葉にとまり、または、しめりたる土の上を飛びかひて鳴けり。車のロジを過ぐる頃涼しく露けき夕は、空より地上に降りぬ。夕景色は家をも野をも掩ひぬ。數々の田舎の寺より、アエアリヤの鐘の聲す。草葉における夜の露は幾千の寶石かと思ふがふばかりに輝きて、大空に満ちたる星のふるひながら、透き通りたる光を反射す。此時、野の花と新に刈りし草とは、香を放つて満天地の氣象

は一種の暢美なる感情を起したり。嗚呼、この感情を知る事、最も深き者は誰ぞ、道の傍なる木立より、うれしく優しき聲に祝賀の歌をうたふ鶯をおきて誰かある。此歌を聞かむと願ふ者は暖き春の夜に、ロンバルダイなる野邊に來よ。野は細流に縦横に截られ、街は水にはさまれ、此上を掩ひてそよぐ木の枝はかのためでたき歌者の最も愛づる住居なり。

巴里の秋

池邊義象

稻葉のそよぐをこそ見ざれ、並木の下葉色づきて燧爐の畑敷そふは秋といふもの、來れるなりけり。こゝは御國と異りて暑さみじかく、寒さ長ければ秋とはいへ、吹く風いと寒く、きのふけふは外套を被らざれば街のあるきもまゝならず。夏の初の頃よりあるは海邊に、あるは山奥に、かくれ住みし人々も此月に入りてはかつつ、歸りければそゝろ歩きする人の數もまして特に繁華を添ふる心地す。六月の頃より業を休みたりし各學校も、此月よりは又始りにたれば、名に負ふ羅甸街は俄に人の數をまし、ソルボンの塔上、育英の光を放てるも頼もし、笠帽子の

幅廣く、象鼻形のステッキを打ち振り、必ずしも破れたるにはあらねども、敢て美ならざる服装に烟草の煙を吐きちらしつゝ、潤歩するは、このわたりの學生にして、對の帽子、對の服、順々として秩序的に徐歩するは各専門學校及び宗教學校の生徒なり。水兵形といふ帽子をや、仰むげさまに打ちかぶり、その服も胸廣くあけたる、同じき装して寒けなる空に白脛あらはしつゝ、小カバン、小脇にかい込み、店を覗き、馬を指さし、或は笑ひて群集し、或は腕を組みて共に競争を試みるなど、他愛なく百街を漫歩するは中小學の生徒なり。敢て華麗を競ふにはあらねど、花帽子いと優に、後毛ゆらくと振り歩くは女學校生徒にして、かの綠紫赤色等の肩章を揮の如くとり装ひたるは我こそはと誇らしげなるも憎からず。或は瑞西を見たりとてそが山水の美を我が物顔に語らふ紳士、おのが顔見候へ、かく鳶色を帯びたるは海水浴の賜なりとて、大洋のけしきのたゞならざるをさゝやく淑女、これ等をや巴里人の得意といふべからむ。(下略)

海上の極樂園

池邊義象

わが乗れる船は六層より成れり。第一層は甲板にして、此中に書籍室及び喫煙室あり。第二層、第三層は客室なり。食堂は第三層の中にあり。湯殿、化粧室之に添ふ。それより以下は下等船室及び荷物庫なり。第一層の上に更に船橋を設く。ここは機關手の外は上る事を許さず。書籍室は船の前方にあり。凡そ二十疊を敷くべし。目錄を備へて自在に閱覽する便を與ふ。椅子、テーブルは行儀よくならべありて、自由之を使用する事を得るのみならず、インキ、ペン、用紙、状態をさへ備へあり。その他新聞雜誌も備へありて居ながら歐米各國の近状も知らるゝなど、一度此所に入り、讀書に心をこむる時は我ながら洋上の旅客たるを忘らるゝなり。喫煙室は船の後方にあり。之も凡そ十四五疊を敷くべし。いづこにも山水等の額を掲けたり。椅子、テーブルは例によりてならべられたれば、以てランプをなすべく、以て將茶をさすべく、以て酒を飲むべく、以て煙草をくゆらすべし。客室は廣きは十疊より八疊ばかり、

狭きは六疊ばかり。二人若くは三人を容るべし。寢臺は壁に倚りて附けられ、底を鐵網にて張り、下に藁蒲團を敷き、更に毛布敷枚を重ねて之を蓋ふ。鏡臺、手洗鉢、二人を容るゝ所には必ず二臺を備へ、三人を容るゝ所には必ず三臺を備ふ。又テーブルあり、腰掛あり、箆筒あり、朝起き出で、手洗ひ、口嗽ぎ、鏡に向ひて容貌を整へ、外に出づるほどに支那人のボーイ必ず來りてその跡を掃除し、夜具の如きは昨夜のと改めおかれて、その清潔なるいふばかりなし。食堂は廣さ百疊をも敷くべし。食卓、椅子、正しく並びたり。食事毎に支那人のボーイ客に活版に摺りたる献立書を渡す。その種類凡そ三十品内外なり。客は好みに依りてそれら申し付けるに、忽ちその品を運び來るなどその迅速なる、おどろくに堪へたり。船体や、動搖するも、ボーイは巧に歩き、スロープ、ボミネー等を持ち運ぶにすこしも過つことなし。此室の奥には美麗なるピアノを備へて、乗客をして之を彈じて其旅愁を慰めしむ。湯殿は化粧室と相隣れり、湯桶は大理石にて船形なり。水或は湯と記しある栓を引けばわが思ふまゝの加減にた

ナイアガラの瀑布

小幡篤次郎

ふふることを得べし。浴しれば底の方より流れ去る様にせり。化粧室もこゝに並びて大理石の間に水壘を數多入れこみたり。例の向より出でたる小さき栓をひねれば、水は迸り出で、見るまに壘に滿つ。また洋銀にて製せる筒の如きもの壘の上毎に必ずさし出でたり。之は石鹼を粉にしたるものにて、拇指にて其小さく出でたる所を押せば、さら／＼と出づるを手に受け、やがて水に和して洗ふ様にせり。船中寒き時は暖爐を用ゐて冬あるを忘れしむべく、暑ければ小幕様のものゝ網附きたるを天井より下げ、それを動して夏あるを忘れしむ。嗚呼文明航海の業もこゝに至りて極れるか。余は之を船といはむよりは寧ろ海上の極樂園といはむとす。歐米人の旅行を以て快樂の一に數ふるも宜ならずや。

ナイアガラ瀑布は世界中の最も大なる瀑布にして、雄偉壯快、遙に人の意表に出で、白虹飛龍の比喩も其眞景の萬分の一を形容する事能はざるなり。故に歐亞の文士、詩人續々杖を此所に曳けども、皆筆を

抛ち、稿を烈き、未だ嘗て人口に膾炙すべき佳句妙文を寫し出したるものなしとぞ。此瀑布は合衆國と北米英領との疆界の一分をなせる五大湖中の四と、セントクレア湖との水の流れ來て、注下するものにして、其五湖の面積を合計すれば概算八萬五千九百六十方英里の廣さに達す。日本本島の面積より小なること僅に一萬四千餘方英里なるのみ。そのシューペリオル湖は面積二萬八千六百方英里にして、世界中淡水湖の最も大なるものなり。五十の川流之に注ぎ、位置最も西にありて、瀑布を距る事極めて遠し。次は、ミンガン湖、無數の小河を容れ、面積二萬千方英里、我北海道より大なる事一千方英里なり。次はヒューロン湖、面積一萬九千方英里、我九州より大なる事三千方英里、湖中の島嶼、其數實に三萬二千あり。次はセントクレア湖なり。こは上の三湖に較ぶれば極めて小に面積僅に三百六十方英里に過ぎざれど、面白き島嶼多く、名ある河川の之に注ぐもの數を知らず。此水下りてイリー湖となる。面積一萬二千方英里にして我四國より大なる事二千方英里なり。デトロイト河之に注ぐ。此湖の東端ナイア

ガラ邑の近傍に至りてグラランド、アイランドと稱する一島にさへぎられ、わかれて兩派となる。瀑布に近づくと前は河幅せまく、地勢かたむきて流も急なるが、忽ち地勢の甚だしき高低にあひて直下するもの、之れ此瀑布なり。瀑布より下十四英里にして五大湖の一なるオンタリオ湖に入り、終に出で、セントローレンスとなり太平洋に注ぐ。さて瀑布の左にあるものは彎曲して其狀馬蹄に似たれば馬蹄瀑の名あり。右にあるものはアメリカン瀑といふ。蓋し其合衆國の境内にあるが爲ならん。左瀑は幅六百碼にして、高さ百五十呎、右瀑は幅二百碼にして高さ百六十四呎なり。算家の言によれば兩瀑注下の水量一分時間に一億噸の多きに至るとかや。故に其響き萬雷の吼ゆるが如く、大地も之が爲に震動し、近傍數百歩の地にある家屋にては盤水常に波紋を生ずといふ。余が此地に遊びしは六月の下旬なりき。氷柱の相集りて玉山銀臺を造るが如き絶景を見る能はざりしかど、晝は飛沫の中に虹霓の七彩を現はすを見、夜は圓月の朦朧として瀑上にのほるを見たり。殊に余が宿りし絶景館は馬蹄瀑の近傍にして兩瀑の全景を專にせ

り。一たび樓上の硝窓をひらけば、飛沫忽ち衣を濡し、涼氣膚を侵して更に時季の夏なるを覺えざるなり。樓を下れば兩岸絶景の地に邑民或は飛橋を架し、或は螺階を設けて人々の眺望に備へたり。余も亦この螺階を下りて断岸の底に至り、仰ぎて大瀑の注下するを見しに、足ふるひ、魂驚きて感ずる所あれども、口之をいふ事能はざりき。ともかく此瀑布の雄偉壯快なる狀は余の如き拙筆のよくしるし得べき所にあらず。かの漢土にて詩仙といはれし李太白をして此世に生れしめて此瀑布をのぞましめば「疑是銀河落九天」の句は盧山に發せずして必ずやこゝに發せしならむ。

五、紀行文

紀行文は即ち旅行記で、其書き方には種々ある。紀貫之が書いた土佐日記の如く一日二日三日と順を追つて書いたものもあれば、橋、南溪が東遊記や西遊記の如く事柄を主として日次を伴としたものもある。紀行文は主として旅行中の趣味ある事柄と自己

の感想とを併記し、以て讀者をして坐るに旅中の人たるの思あらしむるものであるから、此文に熟せんには單に作文の力を要するのみならず、自己の趣味の養成を圖らねばならぬ。若し必要ある場合には文中に俗語を引用したり方言を挿んだりするのもよいが、餘り突飛になつてはならぬ。又材料を撰ぶにも有りふれた尋常一様の事はうるさへから成る可く省略するがよい。

六、紀行文例

箱根路

香川 景樹

廿八日、昨夜よりふる雨、更にやむべうも見えざれば、晝過ぐるまでいさよひぬ。さて晴れぬれば箱根の湯本までと思ひ立つ。やがて山口にかゝれり。象鼻庵の傍らなる巖の上に、楓二本立てりたるが、濡れながら夕日に照りてさながら花染の衣に似たり。今そめてしほり上げつる紅の

文 藝 第五卷

千しほの衣をたれかほしたる

風祭の里をすぐ。

風まつり祈るかひある年にあひて

たり穂こきおろし歌ふ聲する

右の方にいと長く打ちなだりたる松山はそのかみ、小田原陣の時、豊太閤の居城にして、石垣山といふ思ひ出づる事多きわたりなり、考一

武士のときはと見む松が枝に

たえ／＼残る夕日かけかな

湯本なる福住が家にやどる。出湯をば家の中にかこみ入れて湯桁ゆたかにたへたる、いと清くすきとほりて心の垢も洗ひ落しつべし。

うべも實に神のわかせし湯なりけり

千歳になれどぬるみだにせず

親民が歸り來らむまでは、こゝにありて湯浴なんとす。(中略)

二日、此家に朝夕來ならせるさすり法師、短冊一片取出て、此夕べ、南表に宿りける旅人の已にたびたるなりとて見するを見れば、鹿といふ題にて「鳴く鹿の心の程は知らねども、我身をつめば哀れなりけ

り」と書付けたり。時にふれて哀れならずしもあらねば、己れさへ身をつみて、

秋にしてなきやむ鹿の妻戀は

數にもあらぬ思ひなりけり

(下略)

浪打峠を越ゆる記

西村茂樹

十月五日、曇る。朝八時の頃、一戸驛を發す。驛を出づれば、右の方に川あり。水聲瀟々として人心を淨からしむ。これ即ち馬淵川なり。土人はマベチといふ。蝦夷の方言に川をベチといへば、此川の名も本は蝦夷人の名づけしものなるべし。川を渡りて行けば、連山道を遮り、屏風を立てたるが如し。浪打峠の必ずこの連山のうちにある事を知りぬ。程なく登坂となり、蛇行して行くに、路險しからず。風景も又凡なり。登るに随つて坂路や、急なれば峻嶺といふには至らず。之を東海道に求むれば佐夜の中山と相伯仲すべし。登路の將に盡きんとする所に老松の秀で立てるもの、二三本あり。昨日小鳥谷のくだり坂より見えしは此松なり。全く山頂を極むれば景

色忽ち一變し、二戸郡の山々は皆彼に隠れ、九戸郡の山々、目前に現れたり。折爪、近きにあれども、雲に隠れて見えす。此所の路の左右に断崖あり。左の方の崖の崩れたる所を見れば、海沙の聚りたるものあり。浪打峠の名はこれより出でしものにて、後人また此山を以て末の松山なりとせしも、此海沙の痕あるによりこの事なり。蓋し前世界の時は、此邊は全く海中にありしに、洪水の推盪により海底變じて山嶺となりしものなるべし。これより東方の海邊までは直徑十二三里もありて、其間に幾多の山嶺の時立するを見れば、此地の變遷の甚だしき事を知るべし。但し此の山を以て末の松山なりとせしは何人の云ひ出したるか、甚だ無稽の事といふべし。かの後拾遺集に

契りきな。かたみに袖をしほりつ、

すゑの松山波こさじとは

といひしもこれ、末の松山は決して浪の越ゆる事なきを證せる歌なるに、今此の山は浪の越えたる迹あるによりて末の松山なりといふは古歌の義を解せざる人の言ひ初めたる事なり。古歌といふものは摺紳

りしなるべし。十時頃此驛にて午飯を喫し、車を雇ひて金田一の方へ赴きぬ。

銚子町のほとり

田山花袋

木下が昔河港として榮えたのは、ここから陸路江戸に行く路が近かつたため、銚子江戸間を往來する旅客は、ぐるりと利根川を舟で大廻りをする、此處から八幡、市川の方面へと出て行つた。しかしこの木下の船着も今は衰へた。昔の面影すらも見る事が出来なかつた。

布佐、布川の二つの川添ひの町を聯絡した天地の渡、それから稍下つて川を二條にわけた布釜島、小御門神社、香取神宮、佐原河岸の大華表、こゝあたりに來ると、川は益水郷の美を發揮して、夜の平野の色彩を一層濃かにした。割葦が鳴き、櫓聲がひびき、河に臨んだ丘陵の深樹に帆影が重なり合つて眺められた。

息栖の祠の華表のある、河岸あたりに來ると、川は益大きく、まことに溶々とした趣を見せてゐる。そこに一面入江の持つた水國の氣分が到る處に漲つて

家などの足迹未だ京師の外に出でざる人の想像を以てよみたるもの多ければもとより架空の談なるべきを、それを憑據として此地は古歌の何の地、此山は古歌の何の山なりといひ争ふは極めて無見識の事といふべし。此峠の降路は登路よりも、やゝ峻なり。山を降れば福岡の驛なり。峠は上下合せて一里餘なるべし。福岡の驛は九戸政實の城址にて、天正年間政實此地に據りて南部氏に叛きし所なり。地勢少しく高くして馬淵川を以て天然の塹とす。此驛と一戸驛とは同類の化石を賣る家多し。末の松山の産なりと稱すれども其實は馬淵川の川床より出づるものにて、殊に湯田村の邊に多しといふ。余初め化石は此儘の姿にて川中にあるものと思ひしに、土人のいふ所にてはさにあらず川床の泥沙の中を探る時は卵形の石あり、化石は必ず其石中に藏匿す。化石を探るに熟せる者は其石の形を見て化石の有無を知り、ありと認めたるものを携へ歸り、鎚を以て打ち砕き、之を取出すなりとぞ。今此川に貝類は一切なき由なれば、此化石は浪打峠の上に泥沙の痕を留めし頃、川底に埋れ、川水に礦氣あるに由りて化して石とな

る。こゝらで見た水邊の住民の生活、船頭の生活は、他では見ることの出来ないやうな複雑したカラを持つてゐる。淺處を求めて水泳してゐる子供、岸近く網を下したり釣竿を垂れたりしてゐる舟、船頭の鼻は鐵色の肌も露はに夫を扶けて、頻りに上つて行く大きな船の竿を押した。河岸の並んだ家々は、水脈を立て、流れた水に深くその影を蘸してゐた。汽車で行くと、松の多い松岸停車場で始めてこの川の水光に逢ふのであつた。其處は松が美しい。對岸は常陸の砂濱で、その向ふには鹿島灘の怒濤の音を聞くことが出来るやうにすら思はれる處である。誰にも既に大河の河口の近づきつゝあるのが感じられた。對岸に一線白く見えるのは、波崎といふ漁村の貝殻の屋根だ。

半は商業都會、半は漁師町のやうな氣分に漲つてゐる銚子の町は、大きな醬油屋の店や、郵便電信局や、生魚を藁や繩で下けて歩いてゐる人達や混雑した町の通りや、さういふ間を弓のやうに曲つて通つて、そして飯沼の賑かな觀音堂へと達して行つた。大河の河口にある町では、私は此處が一番好きだ。

新潟も好いが、やゝ大きすぎ開けすぎてゐる。徳島は混雑しすぎてゐる。酒田、石の巻は衰へすぎてゐる。従つて此處の持つたやうな活躍した空氣の中に残つてゐる素朴の氣分と言つたやうな複雑味を持つてゐない。此處では私はまだ江戸時代の空氣を嗅ぐことが出来た。江戸商人の純な商賣の氣分を味ふことが出来た。そしてまた一方純粹な漁師町の生活を見る事が出来た。

それに、この町は關東でも屈指なすぐれた海岸をその背後に持つてゐるのであつた。そこにある遊覽軌道は、わけなく旅客をそこに伴れて行つて呉れるが、岬頭の燈臺、松林を越して轟きわたつて来る波の音、岩の多い沙濱、海中に遠く浮んでゐる海獺島、ことに西明にある海水浴場は、東京附近で、最も人を惹くに足りる涼しさと面白さを持つてゐて、その松原の上數町のところにある愛宕山の祠のある頂上は、この大河の河口と燈臺と三面をめぐる海とをさながらパノラマのやうにして見せた。

七、抒情文

抒情は即ち情を抒ぶる文で、此種の文章の短少なものは小品文といつて居る。吾人が日常物にふれ事に當つて笑ひ、怒り、泣き、喜び等の心的状態を捉へ來つて文をするものであるが、人の情緒は幽微幻妙なもので、更に其形態を現はさぬものであるから、之を文に表はすにはなかく、困難である。此文を草するに當つて注意すべきは、誇大な字句や、粗雑の文字を使はぬ事である。そして文章を成る可くなだらかに綴り、難澁の箇所があつてはならぬ。又野卑な俗語を用ゐたり、風格を傷つけたりはならぬ。

八、抒情文例

寫眞 徳富蘆花

文藝 第五卷

昨日、月曜の暇に、書齋の整理をすると、古い寫眞を見出した。最早二十年近くもなつて、加之昔の幼稚な寫眞術で撮つたのだから、一體に茶色にほけて、人の顔は幽靈の様に見える。何でも四五人もあらう。立つたり、踞んだり、腕まくりして肩を怒らしたり、洒然として冷笑したり、様々の態をして居る。見るから堪へ難いなつかしさ、水の如く身にしみた。右の端に雲つく大男の間から「僕も一口加へて呉れ給へ」といひ貌に、ちよこりと小さな顔を出して居るのは確に僕だ。きつと口を結んで頬の何所やらに笑みを浮べて居る。あゝ之が二十年前の僕か、あゝ菊池君、君も年が寄つたな、西山塾で一番子供といはれて、小さいものゝ、警諭には直ぐ引出されて一反でも二つも出来るユキタケの短かな着物を着て、此でも中西西山先生の門人だと、威張つて居たのは、思へば昨日の様だが、最早二十年の昔になつたか、流るゝものは水、逝くものは月日、今此寫眞を見ると吾子でもあるかの様になつかしくて堪らぬ。見て居る内に、今九歳になる長子が入つて來て「お父さん何を見てお出なさるの？」と云ひくすり寄つた。

「昔のお父さんや、お父さんの朋友を見て居たのさ」
「さう、どれがお父さんなの？ 之れが！ 之れがお父さんの？ こんなに少さかつたの？」と云ひく
寫眞と僕の顔を見比べて居たが、吻と笑出して無理に寫眞を持つて書齋より出るより早く「お静ちゃん（之は僕の長女で今年五歳になる）御覽な、可愛いお父さんの寫眞」と呼んで居た。

明月の夜

綱島 梁川

今宵は月いと明かければ、病の床を椽側に移させつ。久しく背きたりし天上の友と、心行くばかり物語りせんとてなり。夏は半ば過ぎて遠近の蟲の聲々、秋の心は早吾が月前の庭へ通へり。庭の繁葉を見越して彼方にや、低う芋島の露のきらめき、それを隔てゝ一むら竹あり。樹立あり。草葺屋根あり、瓦屋根あり、參差として皆夢の裡なる月下の景に入る。見よ今し千々の木草、皆一つ光に濡れて酔ひてあるかなきかの様に漂ひぬ。仰けば明光空と一つの心に融けあひて、おのづから吐く縹湖の薄絹に、大地の卑く穢きをも包む姿の、あはれ秋の月の已一人を高う澄

み上りたるとは異なりて、其氣高さ優しさ。けにや蟻のとわたりとも限なく照らしぬべくて、尙深き心の痛手に泣く此世の罪の子等をも庇ふ慈心の今宵の月こそは、我銷魂の戀にもあるかな。やがて月と人と形釋け、心凝りて、見渡すばかり渺々と、唯一味慈光の潮、渦なして打廣がりぬ。我天眼の華開けて靈しき翼もてる天の使や、世々の貴き聖たちの讚美の歌聲の、大空の光つ波と搖ぎ漂ひて、仄に打聞かる、心地して一念いつしか冥想の境に入りぬ。
(下略)

夏 夜

徳宿 蘆花

良夜とは今宵ならん。今宵は陰曆の七月十五夜となり。月清く風涼し。夜業の筆を擱き枝折戸開けて十五六歩邸内を行けば、栗の大木、眞黒に茂れる邊に出でぬ。其陰に潜める井戸あり。涼氣水の如く闇中に浮動す。蟲聲々々、時々白銀の雫の墜つるは誰が水を汲み去りにしか。更に行きて畑の中に佇む。月は今かなたの大竹籬を離れて、清光浴々、上天下地を浸して身は水中に立つ思あり。星の光何ぞ薄き。

九、隨筆文

隨筆は又漫筆、漫録などと稱し、只自己の心に浮んだ感想や、思想を筆にまかせて書いたもので、論文でもなければ、記事文でもなく、抒情文でもないが、是等に幾分似通つた趣きを有する一種の文章である。古い隨筆文として有名なものでは兼好法師の徒然草、清少納言の枕草等が最も上乘なものである。現今でも隨筆文は少くない。此隨筆文は人に讀ましむを目的として作つたものでなく、只我卓拔なる思想や感想を何等他に憚る所なく、思ふが儘に書いたものである。故に隨筆文は別に作文上の法則などは無い。若し論文の如く何事かを讀者に強ふるが如き働きがあつてはならぬ。そして曲雅なる筆致を以て草すべきものである。

一〇、隨筆文例

氷川の森も淡くして畑と見ゆ。靜に立ちてあれば、吾が側なる桑の葉、玉蜀黍の葉は月光を浴びて青く輝き、棕櫚はさや／＼と微風に囁く。蟲の音滋き草を踏めば月影爪先に散り行く。露のこぼるゝなり。簾のあたりには頻に鳥の聲す。月の明きに彼等も眠らぬなるべし。開けたる所は月光水の如く流れ、樹下は月光青き雨の如くに漏りぬ。歩を返して木陰を過ぐるに、燈火の影木の間を漏れて人の夜涼に語るあり。枝折戸閉ちて椽に踞するほどに、十時も過ぎて往來全く絶え、月は頭上に上りぬ。一庭の月影夢よりも美なり。月は一庭の樹を照し、樹は一庭の影を落し、影と光と黒白斑々として一庭に滿つ。椽に大なる楓の如き影あり。金剛簾の落せるなり。月のその滑かなる葉の面に落ちて葉はさながら碧玉の屑と照れるが、其上に又黒き斑點ありてちら／＼躍り。李樹の影の映れるなり。月より流るゝ風、梢をわたる毎に一庭の月光と樹影と相抱いて跳り、白ゆらぎ、黒さゝめきてその中を歩する身は、之れ無熱地の藻の間に遊ぶ魚にあらざるかを疑ふ。

人の容貌

高山林次郎

人の容貌を吟味して其性格を想ひ合はせんはいといと興味ある業也。予は此目的にて現代の人に就いていさゝか考へ試みし事あれど流石に憚りある事とて言ふべき機なくて過ぎぬ。西洋人の中に好ましきはゲーテ、ヘーゲル、シヨベンハウエルなどの顔ばせ也。顰みの影だになきゲーテが圓滿なる面に現はれたる平和は、即ち是れ人生の最も大いなる苦痛に打ち勝てる表章なるを想へば言ひ知らず貴し。ヘーゲルの面ばかり威重と自信と平和との表はれたるはあらじ。シヨ氏の顔には慈悲深く刻まれたれど一分嘲世の氣ありて其人格の超絶を示現せる所、たとしへなく美はし。吾等人に對する時、何とはなく例へば重き石もて頭上を壓されたらん如く、面を擧げ兼ねるまでにけおさるゝ事あり。奇矯物に滯らざるハイネの如きすら始めてゲーテに會へる時、其威容に打たれて言ふべき事も言ひ得ずして空しくワイマールの麥酒を稱ふるまでの無念を忍びたりき。今の我邦にて斯る人に邂逅ふこと頗る稀れなるべし。路行

く人には是はと心附かるゝ、顔容の人は甚だ少く、多くは物欲しげなる賤しき面構へなり。予の見る所にては婦人は知らず、男子の美は今日の日本に於ていたく荒れすさびたり。

花と月

兼好法師

花はさかりに、月はくまなきをのみ、見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢散り萎れたる庭などこそ、見所おほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかりけるに、はやく、散り過ぎにければ」とも、「障る事ありて、まからで」なども書けるは、「花を見て」と、いへるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、ことにかたくなゝる人ぞ、「この枝かの枝、散りにけり。今は、見所なし」などはいふめる。よろづの事は、始終こそをかしけれ。望月のくまなきを、千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間、影うちしぐれたる、むらの火も、しろきはひがちになりぬるは悪し。

鬼怒と小貝

田山花袋

筑波の西麓を駛つてゐる軌道は、つい昨年あたりから出来たものだが、この沿線には二三面白いところがあつた。例の平親王將門の僞府の址のある守谷、鬼怒川の昔の河港である水海道古驛、それからすつと北して、南朝の悲劇の址を示した大寶城址と大寶沼、概して此間は鬼怒と小貝との二川の灌域で、朝に夕に筑波の翠色と相對することが出来た。

長塚節氏の「土」はこの附近を題材にしたものだが、いかにも鬼怒川畔のカラアがよく出てゐて、其處に住む農民の生活を思はしめるに十分だ。それにこの筑波の周圍は、上古から歴史にも見えてゐるところで、萬葉あたりにもそれを詠んだ歌が非常に多い。例のかがひの庭や、日本武尊の「新治、筑波」を想像して見るのも興味がある。昔の常陸の國府は、その東側の石岡附近にあつたが、概してこの四周は昔から早く開けたところだ。標高は低いが、平野の間に特立した筑波の秀姿は、連山重疊した山嶺など

同題の異圖

雪がくれのほど、又なくあはれなり。椎葉、白樫などのぬれたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身にしみて心あらむ友もがなと、都こひしう覺ゆれすべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

四季

清少納言

春は曙。やうく白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫立ちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月の頃は更なり。間もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日華やかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとて、三つ四つ二つなど飛び行くさへ哀れなり。まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるいとをかし。日入り果て、風の音、虫のねなどあはれなり。冬はつとめて雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白き、又さらでもいと寒き、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきなくし。晝になりてぬるくゆるびもて行けば、すびつ火をけ

よりも早くから旅客の興味を惹いたものと見える。實際關東平野では、筑波は特記すべき山である。その罕髪は到る處から見えた。都會の煤煙の中からも見えれば、帆影の重なり合つた川からも見えた。田舎の垣の外れ、塵埃の白く踊る街道、川添ひの旅舎の窓、或は連山の平野に盡きたその先に、さながら孤島か何かのやうに美しく浮んで見渡されたりした。

晴れた日に山頂から眺めた東京市の煤煙は、平野の外れの何處の山頂から見えたものよりも、もつとはつきりと指さされた。それに其處からは富士が實によく見えた。宗長は「富士は筑波の山の上から眺めたのが一番好い」と言つてゐるが、實際そうした昔の人達の觀察も面白いと思つた。

淺草業平を起點とした東武線の汽車で行くと、粕壁あたりが最も近く、山の巖に夕日の當るものはつきりと見えて、そこから眞直に下りて行つて見たくなる。この間直徑七八里、小利根を渡り、大利根を渡り、岩井を経て、その西麓の一瞬、下妻の方へと出て行かれたが、ある歴史家の説に従つて、岩井に

平親王の址を探るのも、興味が饒かつた。大賣の古城址と結城との間を歩くと、北畠親房と結城との關係などが思はれた。それにこの附近では、旨い梨が夏は澤山に出来た。これから北して、水戸線に行つて、關東平野の中で最も酌婦や小料理の多い笠間、眞壁の方へ行つて見るのも好い。

鬼怒と小貝、この二つの川の相違も特記すべきものだ。同じ地域を流れてゐながら、この二川は全く趣を異にしてゐた。鬼怒の何處までも石川であるのに反して、小貝はいくら溯つて行つても、どんよりと靜に深く湛へて、そして緩く流れてゐる。岸に咲いた合歡の花などを靜かに水に映してゐる。それは眞岡、もつと先きの下野の鹽谷郡から出て来て、最初から平野に生れ平野に生長し、そして矢張平野の大動脈を成してゐる。利根川に落ちてゐるが、日本でも澤山ない、めづらしい平野の川である。そしてそれが最後まで上流の烈しさと若さとも失はない。鬼怒の激流と相並行して長く流れてゐるのは面白いではないか。

慶弔文には實際上種々のものがある。慶祝の文の内にも祝賀の式場に於て朗讀すべきものと日用書簡文で祝意を表するものとある。

慶文 は事を祝賀するのであるから、誠意其事實を稱揚し、贊美するを主とする。けれども餘り阿諛虚構の文辭を使用すると却つて吉賀を傷つくる事になるから注意せねばならぬ。殊に式場で朗讀するものに至りては、其形式如何によりて或は他より誤解せらるゝ事がないとも限らぬのみならず、公會の席上であるから其文章體裁等にも十分意を用ゐねばならぬ。

弔文 は元來身分の高い人が同輩若くは同輩以下の人の、而かも不遇又は不幸にして死去したる者に對し、其靈を慰めんが爲に誦した文章であつたが、今日では必ずしも身分の上下に拘はらず、之を草し

十一、慶弔文

て其墓前に誦するの風となつた。又弔文と相似たものに祭文といふのがある。之は死者の靈を祭る爲めの文であるが、今日に於ては弔文と祭文とはさしたる區別を見ぬ様になつた。何れにしても共に敬意と哀悼の情とを表する様にせねばならぬ。

十二、慶弔文例

勅語下賜記念祭祝辭 辻 新 次

謹みて惟ふに、昨年の本日本日は、我允武允文なる天皇陛下より辱くも教育に關する勅語を下し賜ひたる當日にして、我等教育者の深く記念すべき佳辰なり。夫れ、本邦の教育は屢々として改進の域に赴くと雖、從來道徳に關する教育の如きは、其標準一定せざるの有様なりしが、前年大詔の下るや、陰雲忽ち消散し、始めて光明を仰ぐを得たるが如し。且つ聖旨の優渥なる、道徳に知識に、苟くも教育の範圍に屬するものは、其大綱擧げて洩らす事なく、千古

不拔の明訓を垂れさせ給ふ。嗚呼我輩教育者は誓うて、聖旨のある處を奉戴し、益々勉勵以て國家の進途を贊襄し、陛下の大恩に奉答せざるべからず。茲に本日佳辰に當り、謹みて微意を陳す。

内國勸業博覽會開會式祝辭

大久保利通

臣利通謹んで白す。陛下叙聖至徳の治、深く民産の興隆を慮り、爰に内國勸業の博覽會を開く。維時明治十年八月二十一日、會場の建築成るを告げ、貨物の陳列完きを稟し、覽略親臨開場の盛典を擧ぐ。伏して惟れば博覽會の功績たる、大いに農工の技藝を奨し、殊に智識の開進を資け、随つて貿易の宏圖を介し、以て國家の殷富を致す。陛下叙聖至徳の治、早く已に此典を擧ぐ、信に偉なりと頌すべし。而して退いて會場を観るに、陳列の品類殆んど四萬、品主の員數二萬に近し。其産出の佳、製作の美、已に其業の奨勵を徹にす。將來興隆殷富の期、果して立つて候べきなり。實に此民の匪勉なる、能く奮勵の効を表す。陛下叙聖至徳の治、蚤く已に其微を得

る、豈亦偉なりと頌せざるべけんや。嗚呼斯億兆、幸に奎運炳照の時に遇ひ、萬化爛熳の場に遊び、觀覽以て其智を進め、討究以て其識を伸ぶ、孰れか感喜振興して陛下叙聖至徳の治に報い、以て丕績を贊せざらん。臣謹みて開場區畫圖及び出品目錄を奉呈し、仰いで陛下叙聖至徳の治を頌す。

奥田義人市葬弔詞

高橋要治郎

維時大正六年八月廿一日、東京市長從二位勳一等法學博士男爵奥田義人閣下渣橋として薨去せらる。洵に痛哭哀悼の至りに堪へず。閣下は明治十八年以來、幾多の顯官に歴任し、文部大臣司法大臣と爲り、又夙に中央大學を創設して力を育英事業に盡し、衆議院及び貴族院議員法律取調委員會會長帝室制度審議會委員等に擧げられ、皇國の事に盡瘁せられたる功績枚擧に遑あらず。大正四年四月推されて東京市長に就職せらる、や、夙夜恪勤熱誠以て市政の振興を圖り、銳意以て財政の基礎を鞏固ならしめ、各般の施設亦將に成らんとするに方り、終に病を得て起たず、嗚呼哀哉。其の功勞の

顯著なる、其の職に忠にして市民の休戚を思ふの切なる、永く欽慕措く能はざる所なり。茲に我東京市の公葬を營むに臨み、特に市會の議決を經謹で弔詞を呈す。

大正六年八月廿六日

東京市長代理

東京市助役 高橋要治郎

戦死者を弔ふ文

乃木希典

曩に我軍の關東半島に上陸せしより、茲に二百十餘日、其間將士は善く勇往し、善く健闘し、鋒鏑砲火の下に命を致し、或は風餐雨虐の間病歿せし者少しとせず。而かも其功業遂に空しからず、茲に旅順港内敵艦隊の全滅に歸し、敵要塞の攻略を見るに至りし者、誠に諸士の遺烈に由る。希典等、諸士と生死を共にし、而かも大元帥陛下より優渥なる勅語を下賜せらるゝに會ひ、顧みて諸士と遺烈を思へば、豈獨此光榮を享くるに忍びんや。嗚呼諸士と此光榮を頌たんとして幽明相隔つ、悲哉。乃ち全軍の旅順に入るや、諸士が忠血を以て染めたる山川と要塞とを

文藝 第五卷

下瞰する所を相し、先づ地を清め壇を設けて、諸士が英魂を招ぐ、希くば魂や髣髴として來り鑿けよ。

祭の詞

村田春海

こゝに、文化の五とせ、九月八日、平春海、謹みて芳宜園の大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらをたきて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも、君はわれに十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、われはまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物まなびにゆきかひたる時、朝にまるとしては君の御はかしの後に從ひ、夕にまるとしては君の御袖のもとにすがりて、あひうるはしみまつれること、親子はらからにても何かことならむ。書よむとは君を師ともたふとみ、歌作るとしてはわれをおととひのつらにぞ教へ給ひける。中頃にして君はつかへの道に暇なくおはし、われは世のさがにか、づゝひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君つかへを退き給ひて後は、われも同じ衝にうつり任めば、花をたづねとては、

われ道しるべをなし、月を思ふとは君が舟にあひ乗り、うきことも共に憂へ、うれしきふしも共に喜びて世にありふるわざの、まめごと、あだごと、かたみにへだてなく心をはせること今にはたとせ。そのはじめをくりかへし數ふればあひ友たる事既に五十とせにぞあまりける。さるを今おくれ奉りていつの世にか相見む。いづれの時にかこととはむ。常なきは人の身の習ぞと知るも、之をいかでか歎かざらむ。かゝるを誰かはよく堪へむ。あはれ悲しきかも。文の林、世々に衰へ、言の葉の道日々下り行けるを、賀茂の翁世に出で、今を捨て、古にかへり、青雲の高き心しらひを求め、しづ機のあやなるみやびごとを尊みいへれど、株を守り、舟にきだつくともがら、かれになづみ、こゝにひかれて猶あやしみ咎むるたぐひはおほく、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心をおこしてあまねくさとし、ひろく誘ひしより、近き人はまのあたり、あひうづなひ、遠き人は遙かになびき來て、古ぶりの歌、世にさかりになりたるは、まことに君の力によりてなり。其自ら詠み出で給へる歌を見るに、

ふるき調、新らしき姿、とりんぐに備らざるなし。其古をうつせるは藤原、寧樂の御世におよび、後の巧に習へるは堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡さる事なく、目に觸るものは詞にのほせざる事なむあらざりける。之を見て高きも短きも愛で尊ばざる人なし。また事ごのみの人はその名を君に知られては身のおもておこしと思ひて世にも誇り、君の歌を得るは「價なき寶にもかへじ」といひてぞ深く喜びける。さるを今、金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大方の世人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜まざらむ。かゝるを誰かはしたはざらむ。あはれ悲しきかも。わがかくことあけするを泉の下にもさやかにきこし召し、天がけりてもはるかにみそなはせとなむ申す。

勝安芳君を弔ふ

松田 秀雄

時維明治三十二年一月二十四日、我東京市は國家の元老たる樞密顧問官正二位勳一等伯爵勝安芳君の薨去を悲み、追憶の意を述ぶ。君少壯、英資卓出、夙

に文明の學を修め、泰西の兵を講じ、大勢を達觀して世を濟ひ國を開くの志あり。既にして國運の變遷に際會し、屢々身を挺して時事の紛糾を解き、其最も天下に勳勞あるは、實に明治維新の際にあり。其危きを轉じて安らかしめたる功績は、普く天下の瞻仰する所にして、我東京市民が直接君に負ふ所なり。此時に當りて君一身能く天下の重きに任じ、百難を冒して時論を鎮め、大義を伸べて幕府に臣節を致さしめ、王師を待つに禮を以てし、平和の間に江戸城を開けり。以て上は皇室を尊奉するの實を擧げ、中は舊主家の社稷を保護するの誠を盡し、下は我東京市民の安寧幸福を全うするの基を立てたり。今日東京市の依然と存し、益々其規畫を大にし日々に繁昌を加へ、一大都として宇内に顯はるゝもの、是即ち君の爲す所大に與りて力あり。當時若し君なかりせば、其此大都を如何。百萬の人家焦土と化し去り、八百八衝の人煙は一時跡を絶つに至らんか。乃ち往時を追懐し、君の本市に於ける成績の偉大なるを感謝す。嗚呼君逝けり。悲しむべし。而して東京市民は此賜を享け、永劫記して忘れざるなり。今や紀念

として之を告ぐるに至る。洵に悲哀の至に堪へず。爰に特に臨時東京市會を開き、滿場一致の決議を以て謹んで市民の誠を致す。

帝國大學卒業式答辭

卒業生總代大西祝

文部大臣閣下、並に帝國大學總長閣下、本月本日、内外朝野の貴顯紳士を招請し、生等百十八名の爲に、卒業證書授與の典を擧げらる。生等の喜び何ぞ之に加へん。夫生等の大學に在るや日久し。其間總長閣下教授諸君の薰陶誘掖終始一日の如く、生等が今日の榮を得る所以のもの、蓋し之に職由せざるなし。加之今又總長閣下の高諭を辱うす。生等誰か閣下の誠意に感ぜざらん。惟ふに生等此盛式に列するの榮を得たるもの、或は社會に出で、學術技藝の應用を試みるものあらん。或は大學院に入りて更に其蘊奥を究むるものあらん。其修むる所同じからずと雖、皆内に顧みて我學の尙淺く、識の未だ高からざるを記し、致々益々怠らず以て閣下の誠意に副はん事を希ふに至りては則ち一なり。又惟ふに近時世態の進

歩に伴ひ、學界又將に新ならんとす。且生等の業を卒ふるや、幸にして帝國憲法の發布、皇室典範の制定と過々年を同うせり。此の如き時機に遭遇する生等は益々我大學の我皇室及び國家と其隆運を共にせん事を熱望し、且に此に努力せずんばあらざるなり。聊所感を述べて以て答辭となす。

十三、論 說 文

論說文とかういつても、之は論文と、説明文とに分れて居る。

論文 は文章中最も困難なものとされて居る。平凡な論文ならばさまで六ヶ敷ものでもないが、議論が公平で、よく條理一貫し、精確明晰の文を草するには大なる修養を要するものである。嚴密な意味から云ふと論文には理論、政論、經論、實論、史論、文論、諷論、説論等に區別せねばならぬ。しかし是等の論文は何れも公平、精確、明晰の三者を具へて居らねばならぬ。そして何人も其論旨に首肯

るものである。

説明文 は即ち自己の思想又は學問、其他社會の事物を説明する爲に用ゐられるもので、深遠なる思想學問等も成る可く平易に説き、複雑して居る事實も簡單明瞭に説明する様に草するのが此文の目的である。故に此文を草せんとするには先づ如何に分解し、配列し、如何なる順序を以て説明すべきかを考へ後草すべきである。それから尙附言して置かねばならぬ事は、多くの場合に於て此論文と説明文とは截然たる區別を立てる事が出来ぬものである。例へば或事柄の是非善悪を斷せんとせば自然其事柄を明かにせねばならぬ事となる。斯る時は文章も勢ひ説と論とを連結して書いて行かねばならぬものである。故に論文と云ひ、説文といふと雖、實際に於ては交互相錯するを常とし、純然たる區別を有するのは寧ろ特殊の場合で、却つて珍らしい位のものである。

すべきものたるを要し、徒らに陳腐な事を論じたり、論法が不條理であつたり、他人の論を自家創見の如く論ずるのは最も避けねばならぬ。又論文には虚勢と實勢との二法があつて、虚勢といふのは迂餘曲折、硬軟の文字を錯綜して隱微の間に鋒を露はし、實勢といふのは直截簡明で疾風の如く、迅雷の如く、直に敵に向つて突進する概あるものである。即ち虚勢は眞綿を以て首を緊めるが如く、實勢は直に其人の臟腑を別るが如きものである。若し對者が堂々たる論を以て、戰を挑んで來た場合には即ち虚勢法を以て之に應じ、若し又敵者にして虚勢法を以て對して來た場合には實勢法を以て之に應じ、忌憚なく喝破して、假藉する事なく飽くまで敵者を屏息せしむべきである。次に論文を草するに當つて注意すべきは初めに先づよく想を練り、思を凝して後筆を執り一氣呵成に草する様にするがよい。さうせずして中途に想を凝らして居る様な事があると自然に筆鋒が鈍

十四、論 說 文 例

頼 山 陽 論

朝比奈知泉

徳川氏の季年は、それ猶歐洲十七世紀の末葉の如きか。彼にありては、古文辭その盛行の極に達したるも、近世國語の文辭は猶幼穉を免れず。我にありては、戰國の餘習既に脱して文教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學詞藝その秀を鍾めて、その萃を抜きたるも、わが近世文學は纔にその萌芽を發したるのみ。この時にあたり、蓋世の偉才いできて以て、わが文學を振ひたらむか、その風動は全國に影響して到るところに行はれ、或は獎勵せられ或は誘導せられ、或は挑撥せられ、或は反激せられ、才俊の士は彬々として輩出し、以て文藝の圃に遊び、わが文學の黄金時代は必ず三四十年前に來りしならむ。つらつら各國文運の振興を考ふるにその先をなすものは、大抵詩人ならざるはなく、その衰を振ふものまた、詩人ならざるはなし。さてはわが文學を振ふ張本もまたこれを詩人に求めざるべからず。余は古

體詩家において眞淵、景樹二翁を得、近體詩家において近松、竹田二叟を得たれども、出づる、或はその時を得ず、才或はその器に盛たず、學或はその道に適せず、力或はその量に叶はず、その勢力の及ぶところ限極するところあり、未だ文學の全般に向ひてその積衰を振ふこと能はざりき。余は彼の諸家の外に才學力量すべてその權を得て、しかも恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱きてその用處を誤り、日本文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒に史家なり策家なり文家なり詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絶世絶代の文字を以てせらるゝに至らず、彼の「萬能達して一心足らず」とかいふ如き、嘲をも受くるに至りたる、一人物を發見し、未だ會てその人とその才とを痛惜せずばあらず。余は今日世人が猶その人を崇拜するを見て、いさゝか、自ら、慰むるところなきにあらずといへども、退きて再びこれを考ふれば更に深く惜むところなくばあらず。その人は誰ぞ。山陽頼氏これなり。

「詩は別才なり」といひ、「詩人は生る、成るにあらず」といふは、東西一致の金言なり。今山陽の一生

を考ふるにその性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざるはなし。その童時にあたり、夙成を以て老博士を驚したるは詩なり。その父母を懐ふにあつくその王室を懐ふにあつく、その忠臣義子を懐ふにあつく、その天下國家を懐ふにあつく、情の熱するは常に理の冷なるに勝ちたるは詩なり。その北馬南船行李おろさざるところなく、春花秋月、遊屐、あまねからざるところなかりしは詩なり。その吟域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王公に接したるは詩なり。山陽の性格、言行、誰かこれを詩にあらずとせむ。

試にその著作の史編を視よ、政記の一書はもとより多とするに足らず。外史何の取るところぞ。その議論は平凡のみ。その事實は謬誤のみ。その體裁は偏失のみ。されどもその筆墨の靈妙活動、殆ど天馬の空を行くが如き趣あり。叙事或は精或は疎、或は長、或は短、精にして長なるときは、微として穿たざるなく、細として及ばざるなし。疎にして短なるときは、或は脈々の餘情を含み、或は爛々の餘韻を存す。戰爭を叙すれば讀者をして汗を握らしめ、別離を叙す

れば讀者をして涙に咽ばしむ。しかして、その叙論の如き俯仰低徊、感慨淋漓、まことに讀者をして一唱三歎せしむるものあり。これらの文字、これらの思想、果していかなる天才より流出するものぞ。その題目を撰びては源平以後の戰爭記を探りたるが如き、その事實においては博搜旁引と明證確説とを主とせず、専らその文章を鑿動して讀者を感激せしめむとしたるが如き、ことに王室と忠臣とを思ふ情の切なるより、正記を出づる標準定らず、その體裁に、前後の矛盾を來せるが如き、半生の精力を費して、編述したる二十二卷の外史は、看來れば一篇無韻の叙事詩たるのみ。

試にその論策文章を視よ、民政といひ市糶といひ水利といひ邊防といふ、迂疎空濶、實用に施すべからざるものゝみなれども、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、驚くべきものあり、しかして外史以前の文章につき、その精華を求むるに、寸鐵人を殺す妙多くは小品の文字にあり。その形體はすなはち論策たり。文章たり。その本質はすなはち想像のみ。詩詞のみ。

去りてその詩を見よ、雄健なるものあり。典雅なるものあり。遒麗なるものあり。輕妙なるものあり。しかしてその最も長ぜしは歌行にあり。樂府にあり。料を史傳に取りてこれを詩詞に寓したるにあり。こは山陽も自ら得意とせしところにて、「余不欲詠物、詠物不若詠史、史中有無數好題目、隨讀者、淺深皆可成眞詩」とは、その平生の持論なりきといふ。また以てその才の日本文學を振ふに足りしを見るべからむ。

余會てその戯に作れる今様を読み、その跌宕飄逸おのづから不群の趣あるに服せり。この詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好を以てし、馳騁縱橫、奇想を天外に飛し、その事實に拘泥せず、演義述作するところあらしめば、その造詣何ぞ彼の如くにしてやまむ。

わが史傳は、未だ多く題詠に入らず、潛心好案を求め、研精妙句を探り、その外史に瀝きたる心血を傾倒して、これを詞賦に注がむか、嚴然たる叙事詩を作りて、わが文學界を風靡せむこと、蓋し難からざりしならむ。然るに漢土の詩に倣して、固有の天才を矮縮し、經濟の學に志を奪はれて、専ら功力を詩

に用ゐざりしことかへすがへすも惜むべきかな。余が山陽の専ら詩人とならざりしを惜む理由頗る多し。今これを擧げむか、詩は別才なり。しかして詞才敏妙、その天稟に出づ。これの一なり。詩人は料を取るに自ら新機軸を求むべし。しかして史傳を以て材とすることその卓識に發す。これの二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべからず。しかして尊王の誠と忠臣義士を思ふ情とは、面にあふれて背にあまねし。これの三なり。

かくて余が特に、表彰せざるべからざる第四の理由あり。余會て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を讀み、その「常日、謂_レ我才子、未_レ悉_レ我者也、謂_レ我能刻苦、眞知_レ我矣」といふに至り、私にその實を失へるにあらざるかを訝りしが、後彼の「前兵兒論」並に「蒙古來」の原稿を観るに及び、その苦心經營、一句も苟もせざりし實迹を審にし、かつその古賀穀堂を訪ひ、はじめその千言立成の敏才に驚きしも、數月を隔て、再び訪ひたる時、その文稿は依然として改削するところなかりしを觀て、こゝに與し易きのみ念を起したりといへる逸事を聞き、その意匠

憐愍、勉勵刻畫の勞を厭はざる耐忍あるを明認し、そぞろに景慕の情を催したり。蓋し創意の才は必ず刻畫の力と相待ちて、後、始めて絢爛の華彩を發すべし。彼の「好句天成」といふもの、豈に必ずしも「吐屬輒成_レ章」の謂ならむや。余が山陽を惜む第四の理由とするは、すなはちこの經營刻畫の魂氣のみ。又、山陽が當時の儒者の如くに、談義に耽り、章句訓詁の末を争ふ風なかりしは、頗るその才の發達に便なりしなるべしといへども、かの經濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考へしに至りては、山陽もまたその常套を襲ふを免れざりしなり。山陽の才幹を窺ふに、政治吏務は長するところにあざりしが如し。早く自ら計をなし、區々たる論策を作るをやめ、大に詩に奮はばその成功何ぞ唯今日の名聲に止らむ。人或いははむ、「山陽は外史を著して一世を鼓舞し、大に尊王の氣象を喚起して、遂に維新中興の遠因をなせり。もし外史を作らず一詩人にしてやまむか、いかでこの大功を奏するを得む」と。嗚呼これ詩を知らざるもの、言のみ。詩の人心を感發するは、その勢力遙に散文に過ぐ。外史果してよく維新中興

の遠因をなせりといはば、外史中の事實を敷衍してこれを詩にせるもの、亦豈にその遠因となる能はざらむや。かつ外史の如きはその文章いかに靈妙なるも、今日の史學よりこれを見れば、小説と實録との間によこたはる一種の不可思議物たり。史の名目を以てしては決して完璧なりといふ能はず。上乘なりといふ能はず。さては始より純然たる詩篇のまされるにしかざるなり。柴野博士は山陽童時の詩を見て大に歎賞し「實材たらしむべし、詞人たらしむべからず」とて、山陽の父春水に勸めて史を學ばしめたりといへり。博士の見亦時流を脱せずといへども、その史を學ばしめたるは大に可なり。その遂に修史の業に志すに至らしめたるは、余が山陽のために再四歎惜するところなり。

作文論 高山樗牛

如何にして文章を作るべきか、予は是迄幾度となく此疑問に接したり。然れども予素より文を能くする者に非ず。實は問者と等しく此疑問の中に在る者也。唯年來筆硯に親みればにや、平生の經驗に徴

して聊か心に會する所無きに非ず。敢て自らは實にすと云はざるも、尙以て青年子弟の參考に資するに足らむを思ふ。乃ちこゝに作文の論を作る。如何にして己れの所思を忠實に現はすを得んか。之れ文を作る者、筆を執るに先ちて熟考すべき第一義たるべし。己れの使用する所の文字、語句、己れの言ひ現さんとする所の觀念を代表して果して遺漏なきか、遺漏なきと同時に又果して過剰なきか。文章の要、實に茲に存す。此第一義を失はんか、是れ既に文章無き也。如何ばかり美はじなる辭藻を如何ばかり巧に累ねたりとて畢竟狂言綺語のみ、遊戯文字のみ、事に臨みて寸毫の益無き也。予は此點より見て世の所謂文章家の文字を厭ふ者也。其文を美にし、其語を壯にせむが爲に動もすれば事を假り、情を矯む。一見歎ぶべきが如きも、幾もならずして其弊に勝へざるを覺ゆ。之に反して些の矯飾なく、單に己れの所思を忠實に現はさむ事を力めたるものは、文字如何に拙きも尙眞情の掬すべきものあり、以て讀む者の心を動かすに足る。猶使佞にして辭令に巧なるものよりは、朴訥にして禮を

解せざる野人の事に臨みて功を成すが如けむ。所謂文章家の弊は、予漢學者若しくは漢文の素養深き者に於て特に多きを見る。本邦の文章が漢文に負ふ所多きは言ふまでもなし。隨うて苟も文章を作らん者の一通の漢文に通ずるを要するは素より論なし。唯漢文の通弊は餘りに形式的なるにあり。文法、語法等の餘りに定着せるにあり。換言すれば吾人の觀念の極めて複雑にして變化多きに應對してを忠實に表現せんには餘りに大まかに又餘りに頑固たるにあり。之れ或は漢文を操縦する能はざるが爲にして漢文其物の罪にはあらざらんも、而かも大かたの漢學者が此弊に染まざる無きを以て見れば、普通の人によりてはやがて漢文其物の弊なりと見むも妨げなかるべし。漢語は其形壯重にして力あり。場合によりては缺くべからざるも、其多くは吾人の言ひ表はさんとする觀念に比べて誇大鋪張に過ぐるもの多し。之を以て作る人は始めより文字通りに解釋せらるゝを好まず、讀む者も亦始めより其間に矯飾あるを豫想す。斯くの如くんば作者讀者互に虚偽を以て相交はるなり。達意を旨とする文章の第一義を去

る頗る遠しと謂はざるべからず。

されば予の思ふ所を以てすれば、漢文的語句は今日現に使用せらるゝよりも遠に節減せらるゝを可とすべし。精緻なる景物の記述或は細心なる學術上の叙論等に於て殊に其要を見るが如し。一定の形式に投じて其思想を行ふの風は、時に不測の危険を招ぐことあるべし。吾人の思想は他人の心を以て考ふる能はざるが如く、他人の文字によりて表はさるるを得べからず。唯自己の言葉のみ自己の思想を發表して能く遺憾なかるべし。まことの文章是に於てか成る。予は漢語使用の節減を望むと共に、本邦古文の擬似を事とする所謂國文家の文章にも嫌らざるふし多し。文章の種類多き、素より一律にして規約し難しと雖、例へば王朝以前の古文辭を模倣するが如きは如何なる場合に於ても成功せる文章を成す所以に非ざるが如し。源氏物語は古今の名文と稱へらる。されど所謂國學者を外にせる國民の大多數と共に、其妙味を解し能はざる予の如きものより見れば、晦澁冗漫の悪文字に過ぎざるのみ。古文の妙は國文學者の翫味を妨げず、ただこれを今日に施し、擬似模

倣以て得たりとするの弊風はつとめて除去せん事を要す。今の人の思想は今の世の文字もて初めて表はし得べき也。若し予一己の嗜好に本づきて論斷するを許さば、おしなべて今の文を學ぶものにとりて王朝以前の古文は殆ど用ふる所なかるべき也。世人は古來の因襲に基きて漫りに源氏物語の巧妙を言ふと雖、平家、太平記の如きは今の人の普く解し得らるべき更に巧妙なる文辭には非ざるか。世人は僧侶の文章には餘りに注意せざれども、例へば日蓮の遺文の如きは獨り鎌倉文學の偉觀たるのみならず、今日の人尙則を取り得べき程の名文章なりと想はるゝは如何に。之を源氏などの讀みがたく解しにくゝ今世の趣味を去る頗る遠きに較ぶれば文を作る者特に留心するの價値あらむか。

すと雖、詮する所「忠實」の二字に歸着すべし。文を作るもの自己に忠實なれ、文字を以て自己の思想を拘束する勿れ。思想ありて而して文字あるを忘るゝ勿れ。須らく文字を使用すべし。決して文字に使用せられざれ。良心は道德の上ののみ言ふべきものは。自己に忠實ならずして徒らに言綺言麗を喜ぶ者は之れやがて文藝上の良心なきもの也。斯くの如き偽情一點たるあらば千萬言の大文字も一紙半錢の價値無けむ。

國語國文の變遷

井上 毅

中古漢文の佛法と共に、我國に入り來りし時は、恰も渴者の水を得たるが如く、非常の熱度を以て歡迎せられ、漢文をもて公私一般の用文となし、律令格式より、歴史、風土記の編纂裁判の宣言、官吏の請暇、下は租税の帳簿、貸借の証文にいたるまで、皆不十分ながらも漢文を用ゐしめたり。此時の人の思想には其語源語法を異にしたる漢文と國語とは遂に相合一すべからざる事を思はざしか、或は又漢文漢語を用ゐて我固有の國語を撲滅せんと企てたりし

か、今より測り知るべからざれども、とにかく一國の國民としては一國の命運と共に、固有の國語を愛重すべき事を忘れざりしが如し。固有の國語を撲滅するは事情のゆるざる所にして、當時實際の有様は漢文はひとり博士學士の間に行はれ、僧侶におこなはれ、國民の一部に行はれしに止まり、政事上の公文及び政府編纂の歴史は形式の美觀に止まりて、一般國民に取りては到底其耳目に熟すべきもあらず、かへりて文武離隔、朝野蔽塞、大政振はざる原因とはなりしなり。

斯くの如く舉世迷霧の中にありしも、幸に豪傑の士ありて音韻及び假名の用法を發明し、之を通俗に用ゐ、又和歌に用ゐ、國語と相密着して自在に使用するを得しめ、其後又一步を進めて漢字まじりに活用し、國語を經とし、漢字を緯とし、國語を主とし、漢字を客として更に一層の便利を感じしめたり。假名の使用は一般に便利を感じしめたるに拘はらず、又其使用法の更に一步を進めて漢字まじりの物體となり、いよく便利を加へたるにか、はらず、當時にありては尙女文といはれて朝廷の公文に用ゐ

られざりしのみならず、鎌倉の武力第一の時に於てすら、政府の記録及び裁判申渡は拙劣なる文章生又は僧侶の手を假りて鶴の如き漢文を用ゐたりき。徳川氏に至りてはいかに、林道春は東照公の命を奉じて信長譜、秀吉譜を編述せしに、尙漢文を用ゐたり。余が最も惜む所のものは水戸義公の大本史を編纂せらるゝに當り、三宅觀瀾の如きは國文を用ゐむとの議を建てしも當時多數の勢に制せられて、遂に漢文を用ゐるに至りし事にして、氣運の未だ到らざりきとはいへ、遺憾の事なり。思ふに幕政三百年の間、文人彬々輩出して漢文の著述すくなからざりしも、帆足萬里は猿の狂言といふ一語をもて之を冷遇したるにあらずや。

もし徳川氏の始めに當りて一の豪傑ありて漢文の邊に國語と一致すべからざるを知りて國文の体を一定し、公文に歴史に、教育に、之を用ゐしめたらんには、其間に生れたる俊才の士は青年の精神氣力を借傭艱難なる漢文の修業に用ゐずして他の有用なる事業に用ゐ、三百年の文運は疑々として一層高度の進歩に達したりしならむ。要するに我國民が國文

想に生活する人也。

十五、日記文

日記は如何なる方面の人でも書いて置くがよい。殊に一家の主人たる者は之を毎日記入して置くこと、一家の整理上又は家族の便宜上非常に都合がよいものである。忙はしい人程必要で、之を記入する時間は毎日就床前五分間か十分間もあればよい。此位の時間は何とか都合のつく者である。そんな時間がなから日記などは面倒臭いなど、いつて居る者も往々見受けるが、それは時間がないのでなく、時間を空費するか、さもなくば怠つて居るからである。毎日の就床前の日課として置けば必ず出来るものである。此日記を毎日書くといふ事は其時は別に必要を感じない様でも、後日に至り、之を記入して置くのと置かぬとによつて非常な便不便と損得とが別れるものである。のみならず精神の修養上にも妙な

國語に於ける固有の特性は長き年月の間に一種の事情の爲に發達を妨げられつゝ、經過したりしは歴史の證明する事實なり。

理想に生活する人 大町 桂月

一瓢の飲、一簞の食、陋巷に窮居せし願回の一生、果して苦しかりし乎。之を苦しと思ふは俗人の俗解也。俗人は現實に生活す。たゞ現實の快樂を得れば則ち満足する也。毫も理想の生活を解せず、美酒を飲み、佳肴を食ひて始めて人生の甘きを知る。武士は食はねど高楊枝の味は到底彼等のよく解し得る所にあらざるなり。

修養のなき人は一身一家の事のみ氣にし、私利私慾をのみ逞しうせんとす。社會の益沒趣味なる所以也。其不平を起すも一身の爲也。其怒るも、其恨むも、其慨くも、皆一身の爲也。小兒然り、女子然り、小人然り、修養なき者皆然り。唯修養ある者はひとり此間に超脱す。廟堂にありては其民を憂ひ、江湖にありては其君を慕ふ。達して喜ばず、窮して悲しまず、死時によりては甘き事給の如し。此の如きは理

らず影響するものである。例へば其日の任務を果して全うしたか、其日には如何なる仕事を爲したるか、自分は果して良心に反する事がないかどうか、自分は其日に手落の事になかつたか等を毎日日記を書く時に反省する丈でも非常な修養になるものである。故に日記を書く者の多少によつて其文明の程度が分るとさへ云はれて居る。然らば此日記は如何にして書くかといふに、其人の地位境遇等によつて各々文体や内容を異にするが、何れにしても餘り面倒にせぬがよい。面倒にすると却つて實行が出来難くなるからである。何でも事實其儘を書き、別に想を練つたり文章を吟味したりするよりも實用的に書くのがよい。又精神の修養を主とする者であるならば、其日に反省した事などを書くのもよい。日記は人に見せる爲に書くのでなく、全く自分が後日の参考となしたり、精神の修養に資したり、明日以後の豫定を作つたりするのであるから、其積りで成る可く適

切にして實際的に書く様にせねばならぬ。次に注意すべきは日記を書き初めると、其初めの頃は頗る熱心でも、毎日同様の事を繰返す爲め無味淡白となり、終には記入を怠るに至るものが多いから、最初から不拔の精神を以て一日たりとも決して怠らぬ様にしに行くのが最も大切である。一日怠ると遂に一年の怠りとなるものである。之はくれぐれも注意すべき點である。

十六、日記文例

日記文は前にもいふ如く人に見せる爲に書くものでないから、文例を示すにも頗る困難であるが、今左に數種の文例を掲げて参考に資さう。

湯河原日記

小森松風

二日。朝新橋を出て、小田原で晝飯を食うた。人車鐵道は乗手があつても、車がないといふので貨車に乗せられた。四方格子作りで天井のない吹きすかし

である。風の強い日は寒い。海ばたの砂埃をまともに吹きつける、波のとばしりも散りかゝるといふのであつた。山へかへつてからはそれ程風はあてなかつたが、人夫が汗をかいて來た。余は一人、繪の浦といふ所まで半里許りの道を歩いた。おかけで汗が出た。繪の浦には幸ひ下等車のあきがあつたので、貨車組五人はそれに乗り移る事になつて日が暮れて、門川といふ所に着いた。そしてそこで下車した。車で湯河原に上つて、中西屋に入つて、四方太に遇つた。先づ一風呂浴びやう、まあ酒を一盃といふので、よう／＼人心地がついた。虚子は二合徳利をあけてしまふて、もう眠いといひ出す。六人枕を並べて寝たのは是が切めてあつた。四方太と予は寢ながらいろいろな話をした。吾々仲間の事、レミゼラブルの事、文章の事、俳句の事、以後はお互に何かの批評を怠るまいといふ事、批評をする時は少々過言もするが、それには腹を立てぬといふ事等で、何だか湯河原まで小言を喰ひに來た様に思つた。

三日。隣室の赤坊の泣く聲に目が覺めたら、裏を流れて居る川の音が耳について眠られない。どこかで

時をうつ。これではならぬと復もぐりこむ。すると亡くなつた親父に、いやな妾があつて、それが後家さんと張合ふ、予は悴で道樂がしたいといふ小言を云はれる、食客の男には女が出來たといふ様な艶っぽい夢を見た。温泉宿で友禪染の蒲團に寝るなど、云ふ事が氣になつて居たからであらう。六時起床、冷水摩拭例の通り、朝は飯を食はずに牛乳を飲んで居たが、それがないので玉子湯一杯、二人が難養をかへんかなどいつて居るのが少々羨ましかつた。中西屋は満員なので、虚子と予は別に宿をとる事になつた。藤田屋の三階にきめた。併し二人の部屋は別である。二室とも東南をうけて明るいので氣に入つた。虚子は八疊、予は六疊、晝前に引越した。晝后うしろの山へ三人で上つた。箱根へ越して行く山ださうだ。きのふの名残の吹風は未だ寒かつたが、山畑の蜜柑の残りを取つて食ふたのはうまかつた。歸つて詔一番、一風呂浴びて夕飯にする。九時半寝る。蒲團は中西屋のに大差はない。矢張友禪染、花色裏であつたが、敷蒲團が短いので足が出るのには困つた。眠りしなに思出して復一風呂、

晝飯 鳥鍋、椀盛、酒一杯
夕飯 蝦のつけ焼、とうふら鍋、酒
小使 なし

銷 夏 日 記

徳 富 蘆 花

七月一日。『今年も半ば過ぎにけり』と隣の女児いふ。三日。半夏生、かへりて、雨なり。籬の楓、枯れし後に女竹五竿植う。

今植ゑた竹からも来る嵐かな。とは古人の句。雨洒ぎて婆娑たる木には見られぬ趣深し。

八日。三日月清し。今夕はじめて近きあたりの大榎に鯛の鳴くを聞く。

十三日、隣家の翁、杉籬ごしに『泰山木の花咲きたれば見に来よ』といふ。行きて見る。葉はゆづり葉のそれに似、花は白木蓮を三つ四つもあはせたる程にて、芳香たとへむ方なし。富麗にしてしかも品高き花なり。

十六日、去年近所の林より移し植ゑし山百合初めて開く、返子あたりは、六月の中旬を盛とするに一月

も後れたる、一は今年の氣候の故なるべし。晝日細雨煙の如く、原宿の夏いと寂し。友人某より寄贈せられし『晝聖ラツファエル』を読む。眞面目の著作、ラツファエル及び其時代の一斑を窺ふに倔強の手引草なり。

十七日。嫁菜の花一輪咲く。こは去秋京都に遊びて山陽先生の山紫水明處の下なる礪より堀りて来しものなり。立ちて見る程に、

水の音も心もともにすみゆきて
月しづかなる賀茂の夜半かな

と詠みし、その折の清興、水の如く湧きかへり来ぬ。午後澁谷の川に鮎釣に行く。水まさりて青蘆を没し、川柳の偃して小さきアーチを作れるを心得顔の水馬ついで潜り行けば、犬藁の花揺ぎて小き蛙のさんぶと水に飛びこむも興あり。時々雨しぶきて風景みるく淡墨の畫になりゆく。傘、蓑、笠こゝら見えたれど、獲物ありとも思はれず。我も一尾を得ず、納に整されて歸る。

十八日。菊に肥料をやる。花を愛しそめて、いつしか糞尿も厭はしからずなりぬ。糞尿を愛するにあら

ず、花を愛すればなり。清濁併せ呑むといふ事、耳の痛き程聞き知り居れども、我が量狭ければ異を嫌ひ、非を惡みてみづから世を窄うす。恥しき事なり。

十七、序、跋、銘、贊、題

序文には書籍の序、人を送るの序、其他壽序、宴序等がある。書籍の序とは其書の成立及び編纂の方法等を書き記したものである。人を送るの序、壽序等は其實情を述べて賀意を厚うし、跋は書籍の終りに記するもので多くは其書籍の略評又は有効なる事を簡潔に記す文である。銘には鐘の銘、盆石の銘、墓碑銘、琴の銘其他種々のものがある。何れも其來歴や、功績等を書くべきものである。左に是等の文例を掲げて見よう。

十八、序、跋、銘、贊、題の文例

『禪と英雄』の序

三宅 雲 嶺

予は常に思ふ。禪は精神修養上決して悪くはないが、しかしこれまでの参禪のやりかたは面倒である。ノンキな封建時代ならばさういふ事に浮身を變しても差岡ないが、今時ではモット手取り早くなければならぬ。乃で今は如何に参禪を簡單にすべきかを研究しなければならぬと思ふ。兎に角是を修めるものをして徒らに引込思想ならず、隠遁者めがさず、樂隠居的ならず、將た冷酷にならぬ様にせんければならぬ。是まで参禪を修めたもので悉く斯ういふ傾きがあるとはいはぬ。中には立派な人物、即ち英雄もある。本書に掲げられた古英雄などはなか／＼活動的禪を修めたものであつた。がしかし随つて其弊に陥るものは十の八九まである。それにはいろ／＼の例があるが、今はいはぬ。最初に云ふた通り、禪は決して悪くはない、眞面目に眞の禪に参じて自得したならば、其精神の修養の効果や決して少くはなからう。處が其れはなか／＼の大難事である。今日までのやりかたでは可くない。では非こゝに一偉僧、否強て僧でなくともよい、偉大なる人物が出て、改善する様にありたいと思ふ。禪についての所感を述べ

て序に代ふることとする。

『朝野の五大閥』の序

福本日南

語に古今の別あり。『閥』の字、元『伐』に从ひ、『門』に从へり。功伐を以て家門を顯はすの謂なり。『其の等を明にするを閥といひ、日を積むを閥といふ』といふに視ても察すべし。故に古の閥に對する、其尊む可きを見て、其卑む可きものを見ず。而して今の之に對する、寇讎の如くなるは何ぞや。權勢に資藉して威福を弄し、他位を壟斷して、進路を遮るを以てなり。甚だしい哉、今人の天を畏れざるや。是に於て平等しく同一の『閥』の字なり。古は其『伐』に从ひ、『門』に从へるを見て、功伐の門と意識し、今は其『伐』に从ひ、『門』に从へるを見て、伐つ可きの門と領解せり。是れ實に古今人事の變なり。鷲城五閥の人物を捕捉し來りて、一々之を月旦に上す。鷲鷹の烏雀を搏つが如し。讀者被評者と、其れ天を畏れよや。但だ其の官、黨、學、財の四閥は、兩なりと雖、尙男性の事業たるを失はず、最後の閥閥に

至りては女の湯卷を頭上に被り、其臭を嗅ぎて、社會の表に跳躍する者なり。現日本人一分の墮落、實に寔に此に至る歟。鼻を掩ひて洪噴するも焉を久し。

『奇人正人』の跋

鶴崎 鷲城

人を品するは恰かも醫の患者を診するが如きか。時としては診断の適中し、時としては少しく誤り、或は大いに誤りて人を傷け、甚だしきは殺すに及ぶなきを必せず。余誤つて筆を人物評論に染めて以來久しからざるにあらざるも、猶凡醫の診脈に拙なると相違ぼざるを耻づると同時に、人を評するの益々難きを感じ。一日、戸山統聲君余の寓に來り、近く『奇人正人』の一書を世に問ふとて跋文を徵す。當時余は其内容を審みせざりしも、常居余の人物論を愛讀すとの一書を聽きて知己の感をなすと共に、當代の流弊を慨し殊に世の偽物、俗物、奸物を憎むの情に於て余と一致せるを認め、隨つて君が著の決して尋常一様の閑文字にあらざるべきを察したり。越えて旬日其書を読むに及びて果して曩の想像に違はざるを知りに

き。兩三年余は朝野の人物にメスを加へ、或は紙上のギロチンに上すこと幾百人を數ふべく、心竊に其崇の大なるべきを惧る。洵に料らざりき今君の六一六百餘人を珠數繫にして憚る處なく批難を加ふるあらんとは。是れ地獄行の奸伴侶たりとして大に意を強うする所以。

『世界圖屏風』の跋

佐々木高行

この屏風の原物は徳川三代將軍家光公、閨の枕邊にたておかれしなりとぞ。高行いにし明治二十四年の夏、常宮、周宮兩殿下の御供仕りて日光に旅るせしほど、輪王寺の寶庫中に之を認め、その傳來を問ひしに、寺僧答へて曰く『從四位下左兵衛督梶定良ときこえしは、將軍の愛臣にて薨去の後も、此山に住み、朝夕御墓に仕へし忠節の士なりしが、御かたみとして此屏風の原物を賜り、終身秘藏せしが、子なかりしかば、近く仕へし小野善助良久に與へき。さて後、如何になりけむ、知らねど、こゝに傳へたるはわが寺にて模寫したるなり』といふ。かくいふうづしも、いたく古びて屏風の形にもあらず、引き割

れてあれど、昔ゆかしく物見くらべともなるべく思はるゝまゝに、繪師に誂へて又更に模寫せしめつるなり。かくて駿府政事録を見るに、慶長十六年九月廿日の條に『南蠻國世界圖屏風有御覽二而及異域國々之沙汰』といふことあり。おもふに家光公の枕邊にたてられし原物はやがてそれにて、祖父家康公より傳へられしものならむ。家光公は外教を嚴禁し、外人を擯斥しなどして心狭き人なりし如く、世には思へどまことは然らず、通商貿易の利を知りて深く心をこれに用ゐる、朱印船の掟を設けて海賊を禦ぎ、漂ひ來し歐州人をよくあしらひて彼方の形勢を探り、又は彼の國ぶりの船を造りて使を出し、書を贈りなどもせられき。伊達政宗が支倉を羅馬に遣し、も實は家光公の内意によるとさへ聞きけり。然るにその頃わが國に弘めむとせし基督教は全く羅馬政府の野心を混じたるものなる事を覺り得られければ、急ち之を嚴禁し、さて外人をも擯斥せしなりけり。そのかみ、我政府が海外に對せし用意の周到なりし事、かくの如きを思へば、ただ感歎の外ぞなき。ただし三百年前の人、輿地上の知識の狭かりし事は、

歐洲としても免れず、豈に我國のみならむや。今の人昔とだにいへば無下に蒙昧にていふかひなかりしやうに悔るめれど、なか／＼に恥しき節もあるぞかし。かゝる屏風を常に枕邊にさへおきて海防に通商にたえ間なく心を注がれけむ家光公はあはれゆかしき將軍なりしかな。

足水翁の墓碑銘

村田 春海

翁は氏は片山、名は誠之、あざ名を子進といひ、又つねに足水と呼べり。伊勢の國一志郡菅瀬里の人なり。その父ながしの時より、江戸の大城のもとに來りてよろづの交易の業を以て業とせり。事足り、家豊かなりければ、翁の家を繼ぎては、あながちに富を求むる所もなく、すべて商人の業をば思ひとどまりてせず、淺草の里に住るて、大方世のまじはりを厭ひ、静けき窓にひとり心をぞ遣りける。その常に好めることは、春秋の本草の花もみぢを、遠く手づからおほしたつるをもて、明暮の業とし、又いにしへ今のうつしゑ、鳥のあとをからもやまとも、ひろくつどへて、これを起臥の友となむしける。そ

は只友とするのみにあらず、よく其まこといつはり
を辨へ知りて、其品をさへ定むること、斯道の人も
言ひくはふべきこと無しといへり。かゝれば其家に
藏め持たるは、世に知らずめづらしき品なむ多かり
ける。又わが御代のふるごとをしたひ、山岡大人の
教へをうけて、書よむことをしもつとめたりき。年
は六十あまり八つになむありける。其子ながし、
早くより翁のつねの心をしも、能く知れ、ばとて、
おのれに其ありし世のありさまをしるさしむ。また
相むつびたる人なればとて、橘千蔭になむ乞ひける、
その歌に

かた山に立つ松が枝をさしのほる

月くもりなく思ひあがりて

盆石の銘

豊 臣 勝 俊

物あり。長さ四五寸、高さ二三寸、その色は紫のけ
ぶりのこれるかとおほゆる。頂より白きすぢの麓に
くだれるが、瀧などのみなぎり落つるやうなれば、
彼の瀑布になすらへ、又李白が詩のことばに任せて、
かれを廬山と名づくべく、愛すべく、もてあそぶべ

きすがたなり。昔居易のぬし、こゝに住みてなにの
花の時、にしきのとばりのもと、かや、誦しけむ。
柴のとほその有様た、此のいしのいさ、かなる内に
思ひこめて見るこそ、いとをかしけり。

韓文公像の贊

佐藤 一齋

貌は以て神を傳ふ。神は貌に寓せり。仰ぎて惟ふに
韓公は、岱の如く高く、斗のごとく耀き、詞は衡山
の雲を開き、文は鱷魚の暴を馴れしむ。其學たるや
醇、其氣たるや浩なり。誰か文のみと謂ふ。公は道
に進めり。

朱文公像の贊

佐藤 一齋

吾之を敬すること鬼神の如く、吾之を信すること書
龜の如し。鬼神は其れ詔ふ可けんや。書龜は其れ疑
ふ可けんや。世の疑へる者は固より非なり。詔ふ者
も亦竟に小人の歸なり。

寒紅獨釣圖に題す

頼 山 陽

僕西遊して筑後川を下る。時方に臘月なり。舩艇中

に瑟縮し、寒凍繩の如し。瓢酒を出して寒威に敵抵
せんと欲す。願ふに下物なし。枯蘆の間に漁翁の信
宿するを見る。就きて小魚數尾を乞ふ。舟子又爲に
寒芹を楪む。相共に數酌す。而して雪霰忽ち至り、
簾を架するに暇あらず。急に簾を頭に蔽ひ相酬酢す。
今此圖を南洞相公の座に觀て、往事を憶ひ起せば、
己に五裘葛なり。因りて相公の爲に之を述ぶ。相公
の如きは居れば則ち深簷、出づれば則ち大輿高蓋、
豈人間遇ふ所、此の如き者あるを知らんや。

自ら小照に題す

田中從吾軒

圓顔方跡、其の容貌未だ嘗て人に異なる有らざるな
り。而して何ぞ其の獨り我が命の窮するや。夫れ必
ず異なる所以のもの存する有らん。此膝荷も勢家に屈
せず、此口荷も諛言を發せず、此手荷も苞苴を奉ぜ
ず、此足荷も權門に踵らず、其異なる所以のものは
既に此の如くなれば、則ち其窮する所の者、亦何ぞ
其因る所有らざるを知らん。

第二章 和歌

第一節 和歌の沿革

我國は天然の風景に富み、氣候の溫和、山川の秀麗、而して又人心敦厚にして優雅であるから、和歌は古くから行はれて居た。そして幾多の變遷と發達とを経て今日にも尙盛に行はれて居る。

上古時代 之は神代から天武天皇の御代まで、人文の甚だ開けない時代であつたが、各自は口々に思想感情に解れて唱へ出でたもので、其言辭が自ら口誦し易く、記憶に便なる様になつて居た。伊邪那美命が「あなにやし、えをとこそ」と唱へ給へたるに、伊邪那岐命が「あなにやし、えをとめを」と和し給へたといふ事が古史に書いてあるが、之れ即ち和

歌の始めともいふべきもので、其後素盞鳴尊が須賀の宮造の時、

八重垣つ出雲八重垣妻ごめに
八重垣つくるそのやへがきを

と詠み給へたのは、もはや既に三十一文字の歌になつて居る。猶、人皇の御代となつても歴代の天皇皇后、皇子の歌が少くない。又貴賤の別なく皆歌を詠んだもので、古事記や日本紀の中に載つてある歌は凡そ二百首もある。是等の歌を見るに中には四字、六字の句、若しくは十一字に及んで居る句もあるが、五七の調が最も多い。

奈良朝時代 は持統天皇の御代から桓武天皇の御代まで、此時代には文字の使用も大いに發達し、從つて文學も著るしき進歩を遂げた。萬葉集二十卷は此時代の産物で、此集は雄略天皇の御代より淳仁天皇に至るまで約三百年間の歌を集めたものであるが、舒明天皇以前は雄略天皇の御歌一首あるのみで、

他は悉く舒明天皇以後の百三十年間のものである。此集は所謂萬葉假名で記したもので、雜歌、相聞、挽歌、譬喻、四季の五種に分ち、短歌四千八百八十六首、長歌二百六十六首、旋頭歌六十三首が載つてある。此時代の歌は未だ規則に拘束せられなかつたから、其風が自然的で、又雄健で氣魄があつた。殊に長歌に至つては極めて絶妙なものが多い。次に此時代の歌人としては柿本人麿、山邊赤人、山上憶良、大伴旅人、大伴家持、大伴郎女、坂上郎女、厚見王、額田女王等が有名である。

平安朝時代 は即ち桓武天皇の御代より御烏羽天皇の御代まで、あるが、醍醐天皇の頃までは和歌は一時衰ひ、清和天皇の頃から再び盛んになつて來た。そして最も盛んになつたのは宇多天皇の御代から後で、大宮人の間に歌合といふのが始まつたのも此頃からである。古今和歌集といふ勅撰の歌集が出來たのも此時代である。此歌集が出來てから後、後

撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞花集、千載集等の和歌集が出來た。而して此時代の歌人としては六歌仙(僧正遍照、有原業平、文屋康秀、喜選法師、大友黒主、小野小町)藤原敏行、素性法師、在原行平、和泉式部、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑、能因法師、紀友則等が最も知られて居る。

鎌倉時代 は後鳥羽天皇の御代より後醍醐天皇の御代まで、此時代に入つてからは大宮人は何れも閑散となり、世は泰平となつたから、歌の如き風流の遊びが盛んとなつた。殊に御烏羽天皇は此道が好き給ひ、歌道の隆盛を圖られたから群臣中に此道に傑出した者が少くない。かの新古今和歌集の如きも此時代に成つたものである。此時代の歌人としては經信、俊賴、基俊、俊成、藤原定家、家隆、有家、雅經、通具、良經、源具親、實朝、慈圓、寂蓮等の有名なものが出た。而して此時代に成つた歌集には新古今集を始めとして新勅撰集、續後撰集、續拾

遺集、新後撰集、玉葉集、續千載集、續後拾遺集、金槐集、拾玉集、山家集、壬仁集等がある。又此時代には今様のものも頗る盛んとなつた。

室町時代は御醍醐天皇の御代から後陽成天皇の御代に至る時代であるが、南北朝の大亂によつて文物衰ひ、和歌も亦衰運となり、前期より所謂嚴重なる和歌の諸式を説くに至つた爲め、之に束縛せられるの傾きとなり、歌學傳授なるものが起つた。堺傳授、奈良傳授、二條家傳授等は傳授として有名なものである。此時代にも歌集の成つたものは少くないが、其重なるものは風雅集、新千載集、新拾遺集、新後拾遺集、新續古今集等がある。歌人としては藤原爲定、同爲明、僧の頼阿、藤原爲遠、同爲重、飛鳥井雅世、兼好法師、淨辨、慶運、足利義政、同義尚、東常縁、齋藤妙椿、宗祇、宗長等がある。又連歌は此時代に至りて一層盛んとなり、宗祇の如きは連歌を以て天下第一と稱せられ、天皇より「花の

本」の號さへ賜つた位である。筑波集は即ち宗祇が勅を奉じて撰んだ連歌集である。此連歌は後に至つて俳諧や俳句の基を爲したのである。

江戸時代は即ち御陽成天皇の御代から孝明天皇の御代まで、此時代に至つて歌は復古して隆盛となり、彼の秘傳傳授の弊は漸く止んで歌道の範圍廣くなるに至つた。此時代の歌人としては曾契沖、賀茂眞淵を始めとして、村田春海、小澤蘆庵、伴蒿蹊、澄月、涌蓮、加藤千蔭、香川景樹、穂井田忠友、八田知紀、熊谷直好、木下幸文、渡忠秋等がある。而して又此時代に成つた歌集又は著書には契沖の萬葉代匠記二十卷、其總釋二卷、古今餘材抄、漫吟集二十卷、加茂眞淵の萬葉考、冠辭考、歌意考、古今集打聽、縣居歌集三卷、加茂翁家集五卷、蘆庵の振分髪、蘆庵集、村田春海の琴後集、千蔭の萬葉集略解三十卷、うけらが花、景樹の古今正義三十卷、桂園一枝、中空の日記、新學異見、土佐日記創見等がある。

第二節 和歌の種類

明治以後 明治維新となつてからは、文運益々進み、和歌の發達著るしく、朝廷に御歌所を置いて毎年御歌始の會には勅題を設け給ひ、一般臣民から詠進せる中から秀逸の歌を撰抜して御前に披讀せらるゝ事となつた。御歌所の歌風は種々あるが、多くは景樹の歌風である。又一方新派和歌なるもの出で、其歌風從來のものと甚だ異り、歌としての範圍は益々廣くなるに至つた。次に今様から出た新體詩なるものが出づるに至つた。明治に入りてからの重なる歌人としては八田知紀、近藤芳樹、渡邊忠秋、眞島冬道、伊藤祐命等前時代よりの歌人と、小出衆、高崎正風、税所敦子、高畑式部、太田垣蓮月尼、坂正臣、又新派としては落合直文、佐々木信綱、正岡子規、與謝野晶子、北原白秋、尾上柴舟、吉井勇、前田夕暮、金子薫園、齋藤茂吉、若山牧水、石川啄木等が重なるものである。

和歌には短歌、長歌、旋頭歌、今様等の種別があるが、此中にも亦種々の體をして居るのである。短歌は即ち普通のもの五七五七七の五句で三十一文字から成つて居るものであるが、之には四句切、二句切、三句切、一句切等、句の途中で切る事がある。例へば

- 二句切のものならば
春がすみ、たなびきにけり。久方の、月のかつらも花やさくらん。
- 三句切のものは
見渡せば花も紅葉もなかりけり。浦の苫屋の秋の夕ぐれ。
- 四句切は
淡路島、かよう千鳥の、なく聲に、いくよねざめぬ。すまのせきもり。

一句切は
思ひやれ。」とふ人もなき、山里の、かけひの水の、
こゝろほそきを
次に短歌の詠み方には物名といつて歌の中に或物
の名を詠み込むのである。そして其名を上にも顯はさ
ぬ様に巧みに詠むのである。例へば
あしびきの、山たちばな(橘)れ、ゆく雲の、や
どり定めぬ、世にこそありけれ。
又折句といつて句の初め毎に物の名や地名等の一
文字を置いて詠むのがある。例へば
あかす見ん、はるもさかりの、のどかさに、くも
かとばかり、にほふさくらは。(あはの國)
又沓冠といつて始めは句毎に上の一字つゝをと
り、後には句毎に下の一字づゝをとつて詠みつけ
るものがある。例へば
を野のはき、みし秋に似ず、なりぞ増す、へしだ
にあやな、しるしけしきは。(をみなへし、はなす

まき)
又廻文といつて上から讀んでも、下から讀んでも
同じ様になるものがある。例へば
長き夜の、とおのねふりの、みなめざめ、浪乗船
のおとのよきかな
それから連歌といふのがある。之は上の句又は下
の句を人に詠みかけ、又は詠みかけられて、上の句
又は下の句を詠み合はせて一首の歌にするのであ
る。例へば上の句を詠む者が、
あつま人のこえこそ北にきこゆなれ
と詠めば下の句を詠む者は
みちの國より來しにやあるらむ
と詠み合はせるが如くするのである。又下の句から
初まる場合には下の句を詠む者が
賤が板屋をふきぞ煩ふ
と詠めば上の句を詠む者は
月は洩れ雨はとまれと思ふにぞ

と詠み合せるのである。此連歌は初め二人の唱和し
たものであつたが、後には百韻連歌などといふ事が
行はれる様になつた。

長歌 は五言七言を幾つも聯ねて終りに五言七
言七言を以て止めるものである。又反歌といつて長
歌の後に副へる歌がある。之は多く長歌の意を約言
するが、又は其意の足らぬのを補ふに用ゐるもので
ある。而し中には此反歌を副へぬ長歌もあれば、二
首も三首も用ゐる事もある。例へば

山寺暮秋 春 海
片山や 世をふる寺の
苦むしろ おり居て見れば
とゝめえぬ 秋はかぎり
もみぢ葉も 風にきほひて
おく霜に あらそひかねて
白菊も 色ぞうつろふ
うつせみの 世はかくこそと

瀧川の 是やく見し世を
くりかへし しのび出でつゝ
かへるべき 家路もとはす
夕しぐれ 袂ぬらせば
ちりの身の 夢させとや
岡の邊の 松にこたふる
入相の鐘

反歌
鐘のおとに秋をとちめて山寺の
山かきもみぢ散りはてにけり
近江の荒都を過ぎし時の歌 柿本人麿
玉だすき 畝傍の山の
権原の ひじりの御世の
あれまし、 神のことごとく
つがの木の いやつきくに
天の下 しろしめし、を

文

第五卷

六四

空に見つ 大和をおきて
 青によし 奈良山をこえ
 いかさまに 思ほししめせか
 天さかる 鄙にはあれど
 石走の 近江の國の
 さざ浪の 大津の宮に
 天の下 しろしめしけむ
 天皇の 神のみことの
 大宮は ことときけども
 大殿は ことといへども
 春草の しけくおひたる
 霞たつ 春日のきれる
 百敷の 大宮どころ
 見れば悲しも

反歌
 さざ浪の滋賀の辛崎さきくあれど
 大宮人のふねまちかねつ

さざ浪の滋賀のおほわだよどむとも
 わかしの人にまたもあはめやも
旋頭歌 は短歌の如くにして三の句に七文字の
 一句を挿んで調を延ばしたものである。下の句から
 よみはて、上の句に旋りよむも、其意は同じなので
 かく名づけたのである。例へば
 かすがなる、三笠の山に、月の船いつ
 みやびをの、飲む杯に、影の見えつ、
 君がさす、三笠の山の、もみち葉の色

かみな月、しぐれの雨の、そめるなりけり
今様 は七五の調で、平安朝時代に盛に行はれ
 たものである。之には種々の變體があるが、七五の
 調を四つならべたのを普通として居る。例へば

花
 春の彌生の、あけほのに、
 四方の山邊を見わたせば、
 花さかりかも、白雲の、

かゝらぬ峰こそなかりけれ。
吉野山 山

花よりあくる、みよし野の、
 春のあけほの、見わたせば、
 もろこし人も、こま人も、
 やまと心に、なりぬべし。

第三節 新體詩

新體詩は今様から出て來たもので、今様の一種として見るべきものであるが、今様と少し異つて居る所は、長短の極らないことである。又諸種の變體が出來て七言五言のつづきに限らず、或は七言七言とつづけたり、長歌調の如く五言七言とつづけたり、いろいろである。人によつては新體詩の事を長詩ともいつて居る。左に二三の例を掲げて見よう。

なつかしき山 佐々木信綱
 懐しき山見ゆ、
 懐しき野邊見ゆ、

第五卷

夕日さす森かけ、
 千町田はるんと、
 今ははや間近し、
 なつかしきもの皆、
 妹は花たば、
 弟は旗ふりて、
 疾く行きて見えん、

孝女白菊の歌

其一

阿蘇の山里秋ふけて
 いづこの寺の鐘ならん
 折しも一人門にいで
 年は十四の春あさく
 梅か櫻かわかねども
 父は先つ日遊獵にいで
 軒に落ちくる木の葉にも
 父やかへると疑はれ

小鳥群れて、
 早苗の色青し、
 わが故郷、
 笑ひつゝ迎へぬ。
 さゝけ持ちて、
 小犬も走り來ぬ、
 わが父母。

落谷直文

眺さびしき夕まぐれ
 諸行無常とつげわたる
 父を待つなる少女あり
 色香ふくめる其様は
 末頼母しく見えにけり
 今猶おとづれなしとかや
 寛の水のひゞきにも
 夜なく眠るひまもなし

六五

わきて雨ふるさ夜中は
 鳴くなる蟲の聲々に
 かゝる淋しき夜半なれば
 菅の小笠に杖とりて
 八重の山路をわけゆけば
 さらぬもしけき袖の露
 俄に空の雲はれて
 父をしたひて迷ひゆく
 遠くあなたを眺むれば
 いづこの里かわかねども
 松杉あまた立ち並び
 讀經の聲の聞ゆるは
 籠も半ばやれくづれ
 月の影のみさえくゝて
 門べに立ちておとなへば
 待間ほどなく年わかき
 いかにあやしと思ひけん

庭の芭蕉の音しけく
 いとど哀れをそへにけり
 獨りおもひに堪へざらん
 いでゆくさまぞ哀れなる
 雨はいよゝ降りしきり
 あはれ幾度しほらん
 月の光りはさしそへど
 心の闇にはかひぞなき
 燈火一つほの見ゆる
 それをしるべに辿りゆく
 あやしき寺の其うちに
 いかなる人の行ひか
 庭には人のあともなく
 梢のあたり風ぞふく
 かすかに應ふ聲すなり
 山僧ひとりいでゝ來ぬ
 しはし見てあり此方をば

少女はそれと知るよりも
 吾はあやしき者ならず
 ゆくへを君のしらしなば
 少女の姿をよく見れば
 柳の髪の亂れたる
 山僧心やとけぬらん
 ぬしは何所の誰なるか
 折しも風のふきすすび
 軒の梢にむさゝびの
 少女はいよゝ堪へ難く
 妾はもとは熊本の
 初めは家も富み榮え
 月と花とに身をよせて
 一とせいくさはじまりて
 吹来る風はなまぐさく
 親は子をよび子は親に
 逃げ行く状は哀れとも

やがて間近く進みより
 父を尋ねて來つるなり
 教へてよかし其ゆくへ
 匂へる花のかほばせに
 此世の者にもあらぬなり
 少女を奥にさそひゆき
 審に語れ家も名も
 四邊のけしき物すこく
 鳴くなる聲さへ聞ゆなり
 落る涙をかきはらひ
 或る武士のむすめなり
 心豊かにありければ
 樂しく世をば送りにき
 青き千草も血にまみれ
 砲の響もたへまなし
 別れくゝて四方八方に
 うしとも云はん悲しとも

この時母と諸共に
 ながめられけり朝夕に
 人のことばに父上は
 聞くよりいと胸つぶれ
 あげくれ父を待つ程に
 雲井の雁はかへれども
 母は思ひに堪へ兼ねて
 日毎々々におもひゆき
 父の生死もわかぬまに
 夢に夢みし心地して
 いかにつれなき我身ぞと
 神のたすけか去年の秋
 母のうせぬと聞きしより
 浮世の習となぐさめて
 先つ日かりにと出でし
 又も心にたのみなく
 妾の姓は本田なり

阿蘇の奥まで通れしが
 なれし故郷その空を
 賊にくみしてましますと
 袖のひるまもあらざりき
 早くも秋の風たちて
 音づれだになかりけり
 病の床につきしより
 逢にはかなく世を去りぬ
 母さへ歸らずなりぬれば
 おもへば今猶身にぞしむ
 思ひかこちてありつるに
 父は家にぞかへり來し
 たゞに嘆きてありけるが
 此年月は過したり
 待てど暮せど歸らねば
 かゝる山路にたづねきぬ
 名は白菊と呼びにけり

父は昭利母は竹、
 行ひ悪しく父上の
 風のおしたも雨の夜も
 何所の空に迷ふらん
 これを聞くより山僧は
 物をもいはず墨染の
 とにもかくにも此寺に
 この山僧の心には
 少女はそれを知りたるか
 さすがに否ともいなみま
 寝るま程なく戸をあけて
 枕邊近くさしよりて
 我過ちて谷におち
 谷は荆棘のおひしけり
 明日さへ知らぬわが命
 子を思ふてふ夜の鶴
 言葉終らぬそのさきに

兄は昭英その兄は
 いかりにふれて家出しぬ
 しのばぬ時のなきものを
 今猶ゆくへのわかぬなり
 俄に顔のけしきかへ
 袖をしほりて泣き居たり
 一夜を明せとすゝめてし
 深き思のあるならん
 果知らざるか知らざれど
 其夜は其所にかりねせり
 あやしく父ぞ入り來る
 聲もあはれに涙ぐみ
 今は千尋の底にあり
 出でゝ來ぬべき道もなし
 せめては此世の別れにと
 泣くくこゝに尋ねきぬ
 裾ひきとめて父上と

呼ばんとすればあもなく
夢かうつゝかあらぬかと
曉ちかくなりぬらん

其二

夜もやうく明はなれ
月の光の影おちて
少女は寺を立出で
たどりて行けば遠かたに
道のゆくての枯尾花
吹き来る風の身にしてみ
岩根こやしき山坂を
みやまの奥にやまぬらん
梢のあたり聞ゆるは
木かけをはしる歌は
こゝは高根かしら雲の
我身をのせて走るか
はるく四方を見渡せば

窓のともしび影くらし
思ひ亂れてあるほどに
木魚の聲もたゆむなり

心もなにかありあけの
庭のやり水音すこし
またもの暗き杉村を
きつねの聲も聞ゆなり
音さやうにうちなびき
寒さもいとまさりけり
登りつ下りつゆくほどに
人影だにも見えぬなり
いかなる鳥の聲ならん
熊てふものにや有ならん
袖のあたりを過ぎてゆく
思へばいとおそろしや
山又山のはてもなし

父はいづこにおはすらん
折しも後より聲たつて
逃る少女をひきとらへ
あなおそろしと叫べども

山彦ならで外にまた
山のかげぢををれ迎り
伴はれつゝ行く程に
やれかゝりたる竹の垣
四邊は木々に閉されて
内よりしれもの出で来り
めでたき得物と思ひけむ
豫てまうけやしたりけん
飲みつ食ひつする様は
頭とおほしき者一人
汝のこゝにとらはれて
今より我をせとたのみ
我家に久しくひめおける

かへりみすれどぞなき
山賊あまたよせきたり
かたく其手をいましめぬ
人なき山の奥なれば
こたへん者もなかりけり
谷の下道ゆきかよひ
あやしき家にぞ至りけり
くづれがちなる昔の壁
夕日の影もてりやらす
少女の姿を見てしより
ほゝ打笑ふさまにくし
酒と肴ととりいで
世にいふ鬼に異ならず
少女のもとにさしよりて
来るは深きえにしなり
此世のかぎりつかへてや
いとも妙なる小琴あり

幾千代かけて契りせん
奏で、我に聞かせてよ
かりにも辭まん其時は
針の林をわけさせて
少女は否と思へども
なくく小琴を引寄せて
風や梢をわたるらん
軒端を雨やすぎつらん
いとも妙なる調べには
いともめでたき手振には
嵯峨野の奥に調べけん
父の行衛をしのぶなる
峰のあらしか松風か
ひとり木陰に佇みて
たづぬる人のつま音と
調べを終る折しもあれ
及のひかりにおそれけん

今日のむしろの喜びに
唄ひて我を慰めよ
剣の山にのほらせて
辛き憂目を見せやせん
いなみがたくや思ひけん
調べいてしぞあはれなる
雁やみそらをゆくならん
岸にや波のよせくらん
かしこき神もまひやせん
ひそめる龍もとるべし
想夫戀にはあらねども
心はなにかかはるべき
たづぬる人の琴の音か
きゝ居し人やたれならん
いよゝ心にさとりけん
きりて入りしぞ勇しき
頼の事にやおちにけん

きられて叫ぶ者もあり
きりて入りし其の人は
身に纏ひしは墨染の
わななく少女の手をばも
な驚きそおどろきを
いざ細やかに語らなん
父の怒りにふれしより
東の都にのほらんと
あらし波路のかぢ枕
淡路の島をこぎめぐり
こゝより陸路を辿りしに
並木の邊風ふきて
都につきしその後は
朝夕ならひし千々の文
父の恵みを知ること
悔しき事のみ多ければ
心改めつかへんと

逐はれて逃ぐる者もあり
姿はそれとわかねども
衣の袖としられたり
月の影さすまどにきて
われは汝の兄なるぞ
心しづめてきゝねかし
心に思ふことありて
筑紫の海をば船出しぬ
かさねく須磨明石
武庫の浦にぞはてにける
頃はやよひの末なれば
衣のそでに花ぞちる
たゞ文机によりあつゝ
はじめて人の道しりぬ
母の情を知るたびに
泣きて其日をおくりけり
ふる里さしてかへりしに

戦のありし後なれば
見渡す限り野となりて
尾花が袖に打やつれ
こや我家のあとならん
照す夕日の影うすく
たのみ少き我身ぞと
浮世の事のいとはれて
朝夕読經をする毎に
讀行く文字の數よりも
昨夜そなたの尋ね來て
我嬉しさはそも如何に
たゝちに我名を名乗んと
名のりかねたる身の辛さ
曉ふかく別れしを
汝を追ひて今こゝに
そなたを助けし上からは
この後何のおもありて

其さびしきぞ只ならぬ
昔のかけもあらしふく
露の玉のみちりみだる
そや父母の死体ならん
ちまたの柳に鴉鳴く
思ひわづればわづる程
かの山寺にのがれけり
果なき事のみかこたれて
しけきは袖の涙なり
語ることはを聞きし時
我悲しさはまた如何に
思ひしかどもしかすがに
名のるより尙辛かりき
道にて事もやありなんと
汝をかくはたすけたり
心にのこる事もなし
父に再び見えまし

彼世にありて又はやと
ぬく手も見せず一筋に
少女は見るより聲立て、
嘆きつ叫びつ慰むる
折しも空の霜白く
雲間さえゆく月影に

其三

いひも果てぬに腰刀
切らんとすなり我腹を
堅く其手をおさへつゝ
心の底やいかならん
夜半の嵐の音たえて
かりがね遠く鳴き渡る

あはれ弱ると聞く程に
峰のよこ雲わかれゆく
四邊の様を眺むれば
あれたる庭の霜白し
かたみに山路を過行けば
後よりあまた追ひて來つ
早くも少女を適しやり
切りつ切られつ戦ひつ
谷のかけ橋うちわたり
あとに心や残るらん

切られて痛手は負せぬか
遙かに高根を打眺め
道の傍へにしめゆひし
涙ながらに額づきて
そこに柴かる翁あり
如何に哀れと思ひけん
事の由をば尋ねしに
翁は少女を慰めて
深くとざし、柴の門
片山里の静けさは
木々の木の葉の散亂れ
嵐は時雨を誘ひ來て
父の行衛に兄の身に
深き情にほたされて
ひまゆく駒の足早み
果なく過ぎて又更に
み山の里の習ひにて

兄上さきくましましてと
しのぶ心ぞあはれなる
小祠はたれをまつらん
祈るもあはれその神に
なくなる少女を見てし
此方に近くよりてきぬ
まこと悲しき事なれば
我家に伴ひ歸りけり
半ばやれにし竹の垣
晝尙夜にことならず
籬の菊の色もつく
蟲のなく音もいと寒し
朝夕心にかゝれども
暫しそこには止まりぬ
二とせ三とせは夢の間に
のどけき春はめぐりきぬ
髪も姿もみだせども

色香はいかで失やらん
若菜摘にと打群れて
ならの林に一もの
里の長なるながしは
媒人ひとりたのみきて
翁はいたくかしこみて
少女はかくと聞きし時
袖もて顔はおほへども
思ひまはせば母上の
妾を近く召し給へ
或年秋の末つかた
露けき野路を別け來れば
匂へる花の其中に
かゝるめでたき子實を
悲しき事にてありけりと
菊咲野邊にてあひたるも
千代に八千代に榮えよと

あはれ名におふ菊の花
近き野澤にゆく道も
花のまじるが如くなり
早くもそれを聞つらん
長き契りをもとめしが
こへるまに、許したり
其驚きや如何ならん
止めもかねつ其の涙
此世を去らん其折に
言遣されし事ぞある
み墓詣でのかへるさに
白菊あまた咲みてり
あはれ泣子の聲すなり
いかなる親の葉つらん
拾取りしはそなたなり
深き契りのあるならん
やがて其名をおはせにき

更に告ぐべき事こそあれ
 汝の兄とたのむべき
 早く家出を爲してより
 此世にあらば歸り來ん
 歸り來つらん其をりは
 夫といひ妻と呼ばれつゝ
 母のいまはの言の葉は
 いかで教をそむくべき
 さは云ひ此所に來てし
 とやせんか人知れず
 かれを思ひて泣き沈み
 思ふ思ひは千々なれど
 折しも媒人入り來り
 にしき衣のあやの袖
 少女の心の悲しさを
 見つゝ翁の喜べば
 時雨ふりきててる月の

汝は絶えて知されど
 夫ともいふべき人こそあれ
 今に行衛は別ねども
 老いたる父もましませば
 行末かけて契り合ひ
 此世樂しく送りてや
 今尙耳にのこりけり
 いかで教にそむかれん
 翁のめぐみはいと深し
 思ひ感ふもあはれなり
 之を思ひて打ち嘆き
 死ぬる一つに定めてん
 少女に贈りし其物は
 實にも眩ゆく見えにけり
 あたりの人は知らざらん
 隣の姫も來て祝ふ
 影もを暗きさ夜中に

何所をさして行くならん
 村里遠く離れ來て
 死を急ぎつゝ行き行けば
 雲井をかへる雁が音も
 にぐる少女の心には
 橋のたもとに身を隠し
 遠里小野のともし火の
 下に流るゝ川水の
 哀れ悲しきその音は
 死ぬる命は惜まねど
 さこそ嘆かめ父上の
 父上ゆるせたまひてよ
 此世を我は先立ちて
 南無阿彌陀佛と云捨て
 待ちてと呼びて引止めし
 臘月夜の影くらく
 春秋かけてしのびてし

少女は忍びて家出しぬ
 川風寒き小笹原
 水音すこくむせぶなり
 小笹をわたる風の音も
 追手とのみや聞ゆらん
 我來し方を眺むれば
 影より外に影もなし
 底の心は知らねども
 少女が死をや誘ふらん
 かくと知らさん其折は
 いかにかこたん我兄は
 兄上恨みなしたまひそ
 母の身元に待ちぬべし
 飛ばんとすれば後より
 人は如何なる人ならん
 さやかにそれと判ねども
 兄と少女は知りにけり

夢か現かまほろしか
 里の童のふきすさぶ
 問ひつ問はれつ來し方の
 一夜語りてあかせども
 我故郷のこひしさに
 野こえ山こえ行き行けば
 日數もいく日ふる雨に
 家に歸りし其折は
 山ほととぎす鳴頻り
 しける夏草ふみわけて
 昔しのぶの露ちりて
 妻戸おしあけ内見れば
 此方の驚き如何ならん
 父上さきくと音なへば
 事を細かに聞きてより
 兄の戒しめゆるしやり
 親子の三人打集ひ

思ひみだるゝさ夜中に
 笛の音遠く聞ゆなり
 聞きつきかれつ行末を
 猶言の葉や残るらん
 道を急ぎて歸らんと
 霞たなびき花もさく
 ぬれてやつるゝたび衣
 五月頃にやありつらん
 門の立花かをるなり
 軒端を近く立ちよれば
 袖にかゝるもあはれなり
 あやしく父はましましき
 かなたの嬉しさ又いかに
 子等もさきくと答ふなり
 父も哀れと思ひけん
 妹の操をほめにけり
 過ぎにし事ども語り合

くむ歪の其のうちに
 我過ちて谷におち
 木の實を拾ひ水のみて
 或日のあした起出で
 長くかゝれる藤かつら
 なくなる聲の何となく
 神の助けとよぢのほり
 嬉しとあたりを見渡せば
 木立のしけき山蔭に
 浮世の習といひなから
 人に情のうせはて
 父の言葉聞き居たる
 うれしと兄の立舞へば
 千代に八千代にぞくて
 後の山の松が枝に

嬉しきかけも浮ぶらん
 登らん術もあらざれば
 長き月日を送りにき
 峰のあたりを見上ぐれば
 上に猿のなきさけふ
 心ありけに聞ゆれば
 始めて峰に登りえつ
 さきのましらは跡もなく
 蟬の聲のみ聞ゆなり
 浮世の常とは云ひながら
 獸ののこるあはれなる
 二人の心やいかならん
 樂しと妹もうたふなり
 借に喜ぶ折しもあれ
 夕日かゝりて鶴ぞなく

第四節 和歌の作法

和歌は眞情を詠むべきもので、苟も虚構のものであつてはならぬ。そして歌は理想上から来たものでなく、感情を云ひ表はしたものでなければならぬ。理窟に陥つたり、奇を好み、巧妙を構へんとするのはよくない。即ち景物を云ひ表はせば、讀者をして眼前に見る心地あらしめ、感情を抒べれば讀者をして全く同情を投ぜしむる様にし、而かも其歌たるや品格高く、氣韻ある事を要する。如何に眞情を吐露したからとて其歌が野卑に流れては和歌として價値が薄くなつて来る。次に世の進むに従つて新らしい言語が出来たり、百般の事物も進歩して来るのであるから、其時代に適合する様に詠まねばならぬ。例へば古體の和歌を模して詠む場合には古語を用ゐる現代の和歌を作らんとすれば現代の詞を用ふべきが如き事である。世の歌を作る者を見るに、只徒らに古人の歌詞を用ゐて現代の事を詠んで居るのを往々見受けるが、是等は實に滑稽といはねばならぬ。そ

れから詞や調にのみ拘泥して、自己の個性や、自然の景物をよく云ひ表はす事が出来ぬ様なのも和歌として甚だ價値のないものである。寧ろ其歌の巧拙よりも時代の精神と自己の個性とをよく發揮する事を最初に力め、是等を遺憾なく表はし得る様になつて、而して後歌の調や詞を吟味する様にすべきである。

詞句の活用 歌は僅少の文字を以て深長の意を表はすのであるから詞句の活用に意を用ゐねばならぬ。そして無用の文字を用ゐず、一字一句を苟もせず凡て活躍せしむる様にすのがよい。それから

- 一、中心點を定める事
- 二、中心とせる物は他と換ふべからざる事
- 三、道具立の多きを省略する事

等に心掛けねばならぬ。中心點といふのは、歌の中心となるべきもので、例へば春の歌の場合に其一部分を換ふれば秋の歌となつたり、夏の歌となつたりする様にするのは歌として生命がない。それから道

具立の多いとふのは、多くの材料を用ゐてやつと叙景を詠んだり、抒情を詠んだりする事で、例へば春の歌を作る場合に櫻、桃、若草、すみれ、雲、等を只集める事のみ苦心して一首を作るが如きは、よい歌とは云はれぬ。成るべく材料を少くしてよく其情を表はす様にせねばならぬのである。又一首の中に秀句のあるのは悪くはないが、其爲に他の一部の句が消されて、あつてもない様に平凡の句となるのはよくない。それから一句や二句は面白く出来ても、他句が用ゐない枕詞や意味もない縁語を持つて來て一首を強ひて作るが如きもよくない。

縁語 といふのは風は吹く、雨は降る、花は咲く、散る、虫は音、聞く、鳴く等の如きもので、其の詞に縁のある語をいふのである。しかし之れも無理に用ふべきものでなく、自然によまれる様にせねばならぬ。例へば

袖ひぢてむすびし水の氷れるを

春たつけふの風やとくらん
に就いて云へば、之は水と氷との結ぶといふ縁語を用ゐて、春風の氷をとくといふを取組んで結ぶとくとの掛合を詠んだ縁語歌であるが、中心たる春風の氷を吹きとく實情が疎くなつて縁語の方に力を奪はれ、立春の風景がない様になつて終つた。又

咲きそめて、まつにくらし、世の人の
心をはるの山ざくら花

の如きも餘りに縁語が多過ぎる嫌ひがある。

字餘 といふのは短歌ならば三十一文字より多く字を用ゐる事である。之は本式からいふと勿論之を許さないものであるが、母音のアイウエオの五音は差支ないとしてある。しかし其調が氣ざはりになつたり、亂れたりしなければ別に差支はない。例へば

わすれぬらん、うちあしとおもひ、思ふとても
待つべきにあらず、いはんともいはじ

の如きは三十六字であるが、聞き苦しくない。殊に長歌の如きは語勢を強くしたり、變化をなす爲に字餘り、字足らずが却つて面白い場合がある。短歌の場合には成る可く字餘は避けるがよい。

修句 といふのは一名かけことばともいつて物を兼ねて云ひかける事である。例へば

おとにのみきくのしらつゆよるはおきて
晝は思にあへすけぬべし

雲をのみつらき物とて明すよの
月やこすゑにをち方の山

枕詞 は又冠辭ともいつて語調を整ふる爲に縁故ある辭を以て句の頭に冠らせるものである。之は短歌にも用ゐる事もあるが、長歌に多く用ゐるものである。枕詞は大抵は五言のものが多し。例へば
ひさかたの……、 ゆふづくよ……、
とりがなく……、 いはばしの……、
さにつらよ……、

の如きもので、枕辭それ自身には意味がない。
序歌 といふのは、枕詞の延びたもので、此序辭を用ゐて成つた歌を特に序歌といつて居る。之れも枕詞と同様に其自身は意味がないもので、一首の中短い意味の序辭を用ゐる、下の句に至つて其意を表はすものである。例へば左の如きものである。
足引の山鳥の尾のしだり尾の
長き長夜をひとりかもねん

題詠 といふのは或る題を設けて歌を詠むものであるが、唯單に題意のみを詠むべきものではなく、よく自己の個性を發揮し、時代の精神に應じたものでなければならぬ。題詠は動もすれば其題に拘束せられて十分に自己の感情を表はす事が出来ぬものがあるから、此點は殊に注意せねばならぬ。次に傍題といふ事がある。之は或る題を詠んで其景に添へたものゝ方が勝つて、主たるものが却つて客の位に居るが如く、題に叶はないものをいふのである。

題を説明するに止まるのは勿論避くべきものであるが、題を離れ過ぎて其意を爲さぬが如きもよろしくないものである。

第五節 和歌の書式

一、懷紙

懷紙 はもと高檀紙を用ゐたものである。陸奥紙といふのは即ち之で、大高、小高の別がある。古は疊紙(疊んで懷の中に持てる紙)に用ゐたものである。又薄様をも用ゐた。之は厚紙に對して云つたもので、鳥の子の厚いのを厚紙といひ、薄いのを薄紙といつたのである。今は多く鳥の子を用ゐるが通例となつた。そして昔は其寸法は御製、大臣、公卿、殿上人等の區別があつたが、今は大抵、幅一尺二寸、丈一尺六寸を以て常例としてある。

端作 といふのは即ち題書の事で、季書、署名

等に關する事をいふのである。そして端作の書初めは大方懷紙の右のはしから曲尺で二寸四五分位の所とし、端作の文字は墨黒に書くべきものである。
季同 といふのは春日同詠、夏日同詠などと書く事で、此場合には端作の頭と、歌の冠と平頭に書くものである。之は格別の尊儀であるから妄りに書くべきものではない。

季書 といふのは春日詠、夏日詠などと書いて季同の場合と異つて同の字がないものである。此場合には端作は歌の頭よりも少しく下けて書くのである。
季無 といふのは季同でも、季書でもないもので、例へば「詠櫻和歌」といふ様なもので、此場合には古は端作を一行に書いたものであるが今では和歌の字を次の行に書く様になつた。

名乗 は端作の和歌の字と歌の初行との真中に和歌の字から半字下けて書くを例として居る、但し

氏又は姓、官位等を書く時は其名の上に書くものである。

墨繼 は和歌を懐紙に認むる場合に注意せねばならぬもの一つである。墨は季書でつき、同詠でつき、題でつき、和歌でつき、續懐紙は詠でつき、何首でつき、和歌でつき、位署書は官位は皆墨黒に書き、兼、守、姓、朝臣等の字は墨をつがずに書くものである。

関字 といふのは帝王、高貴の人等の稱號の出でたる時、敬ひて其上に一字或は二字記すべき程の間を明けて置く事であるが、之が和歌の場合には端作に関字を用ゐる。例へば

應製 (禁裏、仙洞の仰によつて讀む事)
應令 (皇后、東宮親主、内親王などの仰)
應命 (親王、内親王、法親王などの仰)
應教 (攝政關白、將軍家などの仰)

の如き場合には應の字で関字するのである。

一首懐紙 といふのは懐紙一枚に一首を認める事を云ふのである。此場合は詠の字から題を端作に書き入れて、自己の官位、氏、名等を書き、歌は端作よりも一字ほど上げて三行三字に書くべきものであるが、三行三字といふのは、初めの行は九字、二行目も九字、三行目は十字で、次に三字書く事である。例へば此所に掲げた如くするので、又位上の兼

春日御詠は遠哉
和歌
雪の降るを春の風
もわらふと春の風
もわらふと春の風
もわらふと春の風
漢字雅

に書くのを例として居る。

は官位ばかりかき法中は官位と名乗のみにし、普通人は官位、氏、名乗共に書き、官位なき者は氏と名乗ばかり書くのである。

二首懐紙 といふのは一枚の懐紙に二首認める事で、通常は二行七字

三首懐紙其他 三首懐紙は二首懐紙と同じく二行七字に書き、五首七首懐紙は一首を二行宛に書き、若し紙を二枚綴ぐ時は二行七字に書き、紙の継目に書かないものである。繼いで書くのを續懐紙といふのである。以下十首、十五首、以上百首等は適宜の懐紙を繼いで右に準じて認めるのである。

二、短冊

短冊は其寸法長さ一尺二寸、幅二寸で、雲形、砂形、切箔、霞等を置くのを通例とする。雲形の場合には青雲を上にし、紫雲を下にするものであるが、追悼とか懷舊などの場合には此反對に紫を上にする事もある。金砂等を散らしたものは多く明いて居る方を上とするのである。

認め方 短冊に書く場合には普通三分の一を天として明けるものであるが、題を書かぬ時はそれより少し上つてもよい。墨つきは初句、三句、五句の

書初めにつき、漢字を混じて認める時には上の句、下の句の頭字を何れも漢字にせず、假名にするか又は一方を假名、一方を漢字で認むべきものである。署名は上の句の尾から半字下りとし、古歌を書く時には名を書かない。結尾は上の句の尾と殆んど同じ高さとするものである。題字は一字より三字までは中程に一行に書き、四字以上は二行にわたつて書くものである。而し其句の都合によつては四字を一行に書く事もある。

三、色紙

色紙は即ち色のある紙を用ゐたので此名があるが其大きさと色とは種々あつて一定して居ない。今日普通に用ゐて居るものは豎七寸、幅五寸位のものであるが、豆色紙といつて幅三寸、豎三寸五分位のものもある。

色紙の認め方 是三行三字を正體とし、其他

文 第五卷
の撒らし方は各自の意匠に任せ、歌のみを認めるのもあるが、自詠のものには必ず名を記入するものである。小倉色紙は大抵四行に認めるを常として居る。

四、詠草

詠草には縦詠草と横詠草（又は折詠草ともいふ）の二種があつて、縦詠草は正しい儀式に用ゐる、杉原紙、小奉書、美濃紙等を縦に二つに折り、それを五分して一行には題、次の行には名、三行目には上の句、四行目には下の句を書くのである。又横詠草は略式に用ゐる、用紙は杉原紙、美濃紙等で横に二つに折り、更に縦に四つに折つて初めに名を書き、順次頭を列ねて書くのである。

五、扇面

扇面に和歌を書く場合には別に定まつた書式としては無いが、折目正しく書く場合と、折目に關はら

八〇
す書くものと、上部に書くのと、下部に散らして書くのとある。詩などは多く上部に書き、歌は多く下部に散らして書くを例として居るが、位置をよく見て、見栄えよい様に認むべきものである。

第六節 和歌の古今の例

終りに和歌の作例を古今に亘り、時代の順に左に掲げて見よう。

○ 八雲たつ出雲八重垣妻ごめに 兼盛 鳴尊

○ 八重垣つくるそのやへがきを (神代) 高 姫 命

○ 天なるや弟棚機(たな)の嬰(あな)がせる玉の御統(みすま)るに 穴玉(あなたま)はやみ谷(たに)二(ふた)亘(わた)らす味耜(あぢき)高彦(たかひこ)根(ね)の神(かみ)ぞ (神代)

○ 菟田(うた)の高城(たかしろ)に 鳴(な)わなはる 吾(わが)待(まち)つや 鳴(な)はさやらすいすくはし 鱒(まづ)さやる 前妻(まへつま)が 魚(い)乞(こ)はさば 神武(かむ) 天皇(てんわう)

○ こほりて出づる有明(あかり)の月(つき) (鎌倉時代) 俊 成 女

○ おもかけの霞(かすみ)める月(つき)ぞやどりける 春(はる)や昔(むかし)の袖(そで)のなみだに (鎌倉時代) 兼好(かねこう) 法師(ほうし)

○ 今日(けふ)もまたゆくての花(はな)に休(やす)らひぬ 山(やま)わけごろも袖(そで)にほふまで (室町時代) 後(ご)花(はな)園(うゑん) 天皇(てんわう)

○ しられじなかすみの底(そこ)にこぐ舟(ふね)の ほのかにかよふ心(こころ)ありとも (室町時代) 加(か)茂(茂) 眞(眞) 淵(淵)

○ うらくとのどけき春(はる)の心(こころ)より 匂(にお)ひ出(い)でたる山(やま)ざくらかな (江戸時代) 香(か)川(川) 景(景) 樹(樹)

○ 後(ご)おろす清瀧(きよたか)川のたきつせに ちりて流(なが)るゝ山(やま)ぶきの花(はな) (江戸時代) 村(むら)田(田) 春(春) 海(海)

○ 立(た)爪(づめ)稜(りやう)の實(み)の 長(なが)けくを こましひゑね 後妻(ごつま)が 魚(い)乞(こ)はさば いちさかさき實(み)の 多(おほ)けくを こきだひゑね (上古代) 山(やま)部(部) 赤(あか) 人(ひと)

○ 春(はる)の野(の)にすみれつみにぞ来(こ)しわれぞ 野(の)をなつかしみ一夜(ひとよ)ねにける (奈良朝) 紀(き) 貫(貫) 之(之)

○ さくら花(はな)さきにけらしも足引(あしひき)の 山(やま)のかひより見(み)ゆる白雪(しろゆき) (平安朝) 和(わ) 泉(いづみ) 式(しき) 部(ぶ)

○ 今(いま)ひとたびのあふこともがな (平安朝) 藤(ふじ) 原(原) 家(家) 隆(隆)

○ しがの浦(うら)やとほざかりゆく浪(なみ)まより 第五卷

よる波にみだるとすれど浦なれて

またたちかへるむら千鳥かな (江戸時代)

高崎正風

霜ばしらふめば聲ある月夜にも

こほらぬ梅が香こそきよけれ (明治時代)

正岡子規

とばりたれて君いまださめすくれなるの

牡丹の花に朝日さすなり (明治時代)

小出 榮

祝ひつゝたれも迎ふる年なれど

千年は君のものにぞありける (明治時代)

落合直文

磯松の今はなれたるあらわしの

行方に見ゆる蝦夷のとは山 (明治時代)

與謝野晶子

身の中に悲みの湧く筋などの

ある心地して手を眺め居ぬ (現代)

時にふと冷たきことをわれ云ひぬ

耳に聞かぬを頼みとするや (現代)

尾上 榮舟

煩えても遂に何を求め得ず

今見る世にもまた求めえじ (現代)

吉 井 勇

舞姫の木履の音しんくと

更けたる秋の夜半に聞ゆる (現代)

北原 白秋

一心に舟を漕ぐ男遙に見ゆ

金色の日がくるくと射し (現代)

前田 夕暮

妹が腹を割きたる病院の

かべしろく見え大河ひかる (現代)

若山 牧水

とびくく岩のあらはれ濁まける

浪にわが帆はかたむき走る (現代)

尾張 穂 草

心なく伸びたる髪の亂れつゝ

秋に入る日を嘆きぬるかな (現代)

第三章 俳句

第一節 俳句の沿革

俳句の起原 俳句は始め連歌から出で漸次發達して來たものであるが、連歌は平安朝の末に金葉集といふ勅撰の和歌集の中に既に其名が見えて居る。其後室町幕府の末に山崎宗鑑、荒木田守武が出で、連歌に一新機軸を出し、此所に俳諧なるものが起り、其後幾多の變遷と改良とを加へて終に今日の俳句となつたのである。

俳句と發句 發句といふのは俳諧の發端なりといふ所から起つた名で、今日では此發句なるものが獨立するに至り、俳句と稱する様になつた。即ち發句も俳句も今は同一物となるに至つたのである。俳句の名稱は榎本其角が「虛栗集」の序文にも見えて居るが、廣く其名の行はるゝに至つたのは、正岡子規が、即ち既に俳諧の第一句たる實を失ひたる上は、發句と稱するよりは寧ろ俳諧と稱せし關係より俳句といふ方適當なるべしといひ出で、からである。

流派の變遷 寛文の頃に至り、西山宗因といふ者出で、従來の發句に氣骨なきを憂ひ、一の新機軸を案出して所謂「談林風」といふ一流起り、一時殆んど天下を風靡するの感があつたが、後元祿年間に至つて松尾芭蕉の出づるに及び、其風は又一變して實情を旨とし、山家風の寂寥を求め、幽玄の體を以て景物に應じ、雅言の獎勵を爲すに至り、此所に所謂「正風體」なる一風體を起すに至つた。芭蕉の門

下には秀才頗る多く、即ち蕉門の十哲たる榎本其角、服部嵐雪、森川許六、向井去來、立花北枝、河合曹良、志田野坡、内藤文草、各務支考、越智超人等の俳人を出した。又天明、安永の頃には谷口蕪村、雪中庵、女流には加賀の千代、高桑蘭更等が出て、殊に蕪村は俳道に一派を立てたものである。

明治時代 に至りて俳句は非常な發達を遂げ、正岡子規を中心として新なる機軸を出し、所謂新派俳句の卒先者となつた。又碧梧桐は日本派と稱する一派を開き、最も新らしき傾向の俳句として近來頼に勢力を有するに至つた。尙明治時代より俳人として有名な者には子規、碧梧桐の外に盧子、露月、青々、紅綠、鳴雪、蝶衣の諸氏がある。

月並 といふのは元祿以來宗匠門流が各々一門を立て、門下を誘導する爲に月々會を設け、俳句を披露して卷を作るなど例の如くに行はれ、之を月並の會と稱へた。然るに子規等の新に創めた俳句は數

名の集合に過ぎずして別に定まつた例會とはなく又卷を作る事もなく、不規則な態度を以てしたので、之を昔の月例會と區別する爲に、昔のものに月並の名稱を與へ、後宗匠等を舊派と名づけ、子規等を新派と名づけ、月並と云へば舊派を指して云ふ事となつた。所が、新派の俳句が高尚にして價值多きに對し、芭蕉、蕪村没後の宗匠門流の俳句が俗情を歌ひ、文學、美術と離れたる傾向を有するに至つたので、それ等のものを總て月並的の俳句となし、更に轉じて凡庸にして拙劣なものを月並といふ様になるに至つたのである。

第二節 季

俳句には季といふものがある。之は即ち四季の季で春夏秋冬の季である。俳句に於ける四季の區別は春は立春、立夏の間を云ひ、夏は立夏、立秋の間を云ひ、秋は立秋、立冬の間を云ひ、冬は立冬、立春

芭蕉
蕪村

之は季を借りず其詠じた事物に美的趣味を表はす事が出来る場合の俳句である。例へば

雲霧の暫時百景をつくしけり
狐火や獨體に雨のたまる夜に
の如きは全く季のないもので、又

の如きは春秋を同時に用ゐた雑の句である。芭蕉

季寄 俳句の季は太陽曆によるのではなく、多くは太陰曆によるべきものである。人の周圍に屬する事物は凡て四季によつて變化するものであるから、其變化をそれ〴〵應用し、力めて自ら之を経験し、或は經驗せぬ事でも、成る可く實地の如く想像して其季によつて變化する事物の趣きを十分表はす様にせねばならぬ。此季の變化を十分知る事をしないと、春又は秋などの季の冠を添へなければ何れの季を詠んだのか分らぬ様な句となつて了ふ。今季寄の最も必要を認むべきものを左に掲げて初學者の資に供す

の間を限つて云ふのである。而して臘、日永、暖、長閑等は春季となり、短夜、涼し、熱等は夏季となり、冷、凄、朝寒、夜寒、坐寒、肌寒、夜長等は秋となり、寒し、つめたし等は冬季となるのである。日の最も長いのは夏季であるが、俳句では日永を春とし、夜の最も長いのは冬であるが、俳句では夜長を秋として居る。斯く四季の題目を定めるのは俳句の特色で、俳句は元來僅少の限られたる字數によつて深長の意味を表はすのであるから、季の題目を定めて置いて、或る事物を表はす場合にそれに近い季の物を入れて餘韻餘情を起さしめねばならぬ。即ち其季を挙げたる爲にそれ以外の周圍の景況、春夏秋冬それ〴〵の景況を聯想することが出来て、自分も其詩想に味ひを増し、讀む者も亦それによつて味ひを深くし、季を除いて詠じたものよりも數倍の趣味を生じ、俳句としての價值を増すのである。

雜 四季の題目がないものを雜といつて居る。

文 畫 第五卷
る事とする。新年といふのは多くの場合に於て一月一日から十五日までを云ふので、之は春夏秋冬以外の部となつて居る。

新年の部

時 候

元朝旦

三ケ日

千代の春

千々の春

人事

四方拜 鏡餅 若水 若水

元始祭 若戎 護葉 掛鯛 左義長 藪入り

朝拜 星佛 齒染 惠方 人打木

腹赤奏 門松 蓬萊 子の日 粥杖 水祝

初日 小殿原 太原 大原 初寅 着衣初 商初 舞初 弓初 鳥追ひ 萬歳 手まり 福引 年禮 齒因

初空 福鍋 喰み 屠蘇 初卯 湯初 鞞初 彈初 騎初 初芝居 大黒舞 毬打 蹴鞠 新年宴會 寶引

初東風 骨正月 開豆 雜煮 帳とち 初手水 書初 吹初 乘初 一月場所 傀儡師 破魔弓 歌がるた 餅花

初風 數餅 若卸 店曆 初鏡開 藏開 謠初 懸想文賣 猿曳 春駒 羽子玉 年玉 蘭玉

春の部

時 候

一 月 春 浅 日 春 暖 暮 春

二 月 春 寒 永 日 春 宵 夏 近 し

三 月 返 閑 春 夜

初 春 春 曉 麗 夜

御 降

動 物

嫁 君

初 鷄 初 鳥

植 物

福 壽 草

文 畫 第五卷

紀元節 春日祭 安良日祭 初午 御身拭 針供養 彼岸 彼岸 雜餅 草餅 鞞餅 柳太刀 八十八夜 出代 峰入 摩耶參 御忌 西行忌 春季皇靈祭

神武天皇祭 人丸祭 其角忌 涅槃會 寒食 二日灸 繪踏 鷄合せ 踏青 雁風侶 種もの 野を焼く 菊根分 芥

釋奠 水口祭 水生念佛 薪能 社日 上巳 曲水 野遊 小引 茶摘 種蒔 田打 慈姑堀 上り魚籠

人 事

青角茗青葵蒲河十葛驚夕風松夏
 鬼鬼荷荷蕪穗骨藥の草顏車葉菊
 燈豆の子蕪葛花草花車牡丹

麻茄苜蓿夏蘭澤杜鴨凌飄白紅擬
 子子畫草花蕪若草花花丁花花寶珠

藍早いち早路蓮蓮花風岩糸酸織石
 松松ちち苗苗の浮花蘭梨瓜藥線石
 茸茸ご苗苗葉葉蒲花花花花花竹

瓜麥朝蓍水一河葱麟畫百撫
 青蕃椒顏の苗木草草八原無草顏花合子

秋の部

後の海踊燈生逆去七神秋
 のの彼瀛廻籠身身峰來夕田季
 岸岸しし玉玉入入忘忘祭祭皇
 入入入入入入入入入入入入入入

後の樹つ走大施絲宗逆神
 のののののののののののののの
 入入入入入入入入入入入入入入

後の八後の放經孟地鬼貴天
 のののののののののののののの
 出出出出出出出出出出出出出出
 代代代代代代代代代代代代代代

花秋菊夏接墓御太硯太
 火社日菊書待祭難祇船長秦
 日句旬納待餅餅忌忌祭節節祭

秋の初秋の初
 日句旬納待餅餅忌忌祭節節祭

夜秋秋立
 寒の涼秋
 夜秋秋立
 寒の涼秋

新新芥藥牡下新毛相
 蕎麥酒時搗根分丹築綿見撲

古胡菱芍初砧案鳩
 酒刈取藥獵子吹

濁扇菜木燒漆添蟲
 酒置時種刈米極水送

柚蠟大茜滋網鳴駒
 味の根根取代子迎
 噌別時搗取打子迎

天文

秋の秋朝居三名
 ののの待日日月月

秋の秋盆廿待月
 ののの日月宵

秋落蛇鴨鸚類稻雀鷹鹿
 刀刀穴窩鴉鴉雀雀祭祭
 魚魚入入入入入入入入入入

太能河渡四啄鴉鴉山猿
 刀能河渡四啄鴉鴉山猿
 魚能河渡四啄鴉鴉山猿

沙鱸鱸歸鶉菊璫鴻鳴熊
 魚鱸鱸歸鶉菊璫鴻鳴熊

鱈江鱈歸鶉菊璫鴻鳴熊
 魚江鱈歸鶉菊璫鴻鳴熊

小凍寒初十
春の内の冬月

時
候

冬の部

歳冴小冬十一
暮る寒の日月

待霜大冬十二
春の夜の寒夜月

冬寒寒立
ざれさ入冬

苗枝夕唐新秋草
顔の黍米の實の實

籬南瓢穉鬼蓮
豆瓜目實とぶ

刀鳥冬粟稻紫
豆瓜瓜初蘇實

種西絲黍初煮
麻瓜瓜茨

文
藝
第五卷

年新 御火 十夜 空也 嵐雪 玄猪 貳枕 札納 爐開 年貢 冬籠 夜興 竹篋 寒念 年の市

人

孝明 神樂 御命 維摩 几童 臘八 厄拂 事納 口切 顔見 冬構 狩代 網代 蕎麥 煤掃

事

神の 惠比 御佛 蕪村 冬至 節季 曆着 袴着 べつ 北窓 鷹狩 寒聲 麥蒔 岡見

九五

吹草 遠取 御取 芭蕉 雜魚 節分 衣配 古曆 髮置 西の 火事 柴積 寒垢 餅搗

蚯蟻馬蒼蟬秋秋
蚓蟻追蟲蟬蚊

植
物

浮塵 蟻 蜻蛉 松 蜻蛉 秋の 蟻 蟬

放 蜻蛉 蟻 蠶 蠶 秋の 蟻 蟬

芋 玉 茶 鈴 蟻 秋の 蟬

栴檀 椶櫚 檉 桐 楓 常木 木
檀實 實 實 葉 花 犀

木 菩提 椶 榧 柳 楸 梅 木
の 實 提子 櫚 實 散 散 嫌 椴

栴 南天 椶 烏 銀 柞 名 芙
天 實 櫚 犀 杏 杏 木 蓉
實 實 實 葉 紅 葉

遊 塞 椶 銀 椎 檀 紅 桃
栴 角 實 杏 杏 實 葉 花

間末 菽 萬 草 蕎 吾 桔 檀 女 竹 棋 無 橙 柘 栗
引末 引 花 花 麥 亦 亦 檀 郎 郎 棋 果 橙 柘 栗
菜 菜 花 花 花 紅 紅 特 特 秋 秋 實 花 花 櫚

唐敗 萱 鷄 秋 蘆 縷 鬱 蘭 菊 男 秋 葡 桃 柚 蜜 團
辛敗 荷 頭 草 花 紅 金 花 菊 郎 海 萄 桃 柚 蜜 團
子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

芋 鬼 薄 葉 煙 澤 蔓 此 月 紫 鳳 秋 通 木 佛 金 梨
燈 荷 荷 頭 草 桔 花 花 花 草 苑 仙 草 瓜 手 柑 柑
子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

九四

零 薑 草 芒 芭 葛 茗 白 龍 野 蔓 朝 藤 楹 ざ 九 棗
鹿 薑 紅 芒 芭 葛 茗 白 龍 野 蔓 朝 藤 楹 ざ 九 棗
子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

で、若し右の如く字餘になつて却つて趣きが出る様な場合には、努めて根本の調を離れない事に注意せねばならぬ。

切字 といふのは句の姿を整へ、意味の統一を爲し、句の歸結を爲すものであるが、初學者は此切字の運用に熟練し、後切字なくして俳句を作り得る、様にすべきである。今切字の格を示せば

中の切

猫の戀やむ時。ねやの臘月
やすくと出て。いさよう月の雪

心の切

いざさらば。雪見にころぶ所まで
やがて死ぬけしきは見えす。蟬の聲

挨拶切

世を。旅に。代りて小田の行戻り
人に。家を。買はせて我は年忘れ

二字切

君火たけ。よき物見せん。雪丸け
折る人は花に恨ん。風もなし

三字切

いかに寝て。何云ふ事ぞ。星の中
子供らよ。晝顔咲きぬ。瓜むかん

二段切

夕にも。朝にも。つかす瓜の花
から鮭も。空也の瘦も。寒の中

三段切

梅。若菜。まりこの宿のとろ汁
女帯。男の衣裳。うつらの尾。

をまはし

青くても有るべき物を。唐からし
米くる。友を。今宵の月の客

にまはし

桐の木に。鶉鳴くなる塚の内
袖の花に。昔しのばん料理の間

かな、かも

雪折れも聞えて暗き夜なるかな
世をいとふ心あざみを愛すかな
つばくろや去年も来しと語るかも

▲かなは詠めの詞、かもは疑の詞である

もかな

我が頭巾うき世の人に似ずもかな
白ほたに廿日の闇のなくもかな
▲もかなは願の意である

つ

日一日同じ所に畑打つ
▲つは俗語のタゾの意となる

下知の詞

名乗れ名乗れ雨篠原の時鳥
蝙蝠も出でようき世の花に鳥
小法師に心ゆるすなをみなへし
五月雨の雲ふきおとせ大井川

無名の切
名月の花かと見えて棉畑
一家みな杖に白髪の墓參
次に切字の各文字に就いて示せば

は

是やこの煤にそまらぬ古格子 (口合のや)

朝顔や晝は鎖おろす門の垣 (切のや)

露とくく心みに浮世すゝがばや (捨のや)

旅をしてみしや浮世の煤はらひ (中のや)

白魚や黒き目をあく法の網 (はのや)

むさんやな甲の下のきりくす (すみのや)

庭掃いて出てばや寺にちる柳 (こしのや)

難波津や田螺のふたも冬籠 (名所のや)

梅白しきのふや鶴を盗まれし (疑のや)

▲上に疑のやあるときは下にべき、なき、しき、ありし、みし、ぬ、たる、ける、つる等の文字を以て結ぶを例として居る。

花の雲鐘は上野か浅草か
ほろくと山吹散るか瀧の音

▲此かは疑ひのかで切字である。

爐塞て聞やうなりぬ竹の雨
蝶追ひぬ摘べき草は摘まずして

こそ、そ

白魚に慣あるこそ恨みなれ
手にとれば消えん涙そあつき秋の霜
立聞の心こそすれ鹿の聲
我がかへる道幾筋ぞ春の草

▲こそは下に、け、せ、て、ね、へ、め、れ、じ、
かの詞を以て結ばねば格が整はない。又ぞはは
の意を含むものと、デアアルゾの意を含むものと
ある。

ん

女具して内裏拜まんおほろ月

五月雨に鳩の古巢を見に行かん

ら し

水仙や美人頭を痛むらし
赤頭巾人甘んじて老いけらし

▲らしは俗語のサウナの意である。けらしも亦
同じ意である。

ら ん

西行の庵もあらん花の雪

▲らんはデアアラウの意である。

じ

其まゝに月もたのまじ伊吹山
馬方は知らじ時雨の大井川

▲じは打消の意味で俗語のないといふ意

べ し

白魚のしろき噂もつきぬべし
戯作者のたぐるなるべし絹頭巾

▲べしははかりさためていふ詞である。

隠れけり師走の市のかいつむり
行く春を近江の人と惜しみける

あ り

梨の花月に書をよむ女あり
病間あり秋の小庭の記を作る

を

御手うちの夫婦なりしを衣がへ
聲よくば歌はんものを散る櫻

▲をは俗語のチャノニの意である。

な そ

窓の灯を山へな見せそ鹿の聲

▲な……そは勿れの意である。

よ (下知にあらざるよ)

ゆかしさよ櫛花さく雨の中
交へ折りて白桃くる、嬉しさよ

▲此よは俗語のゾヨといふ意である。

ば や、て や、め や

喰つて寝て牛にならばや桃の花
五月雨の降り残してや光堂
箱を出るかほ忘れめや糞二對

▲ばやは願ふ意、てやは俗にタノカといふ意、
めやは將の變化したためにやの感動詞がついたも
のである。

た り

捧けたり二月中旬初茄子
子は寝たり飯はくうたり夕涼

▲たりはてありのつゝまつたものである。

て、 て

唐崎の松は花よりおほろにて
揚州の津も見えそめて雲の峯
老の名はありとも知らで四十雀

あら涼し裾吹く蚊帳も根なし草

極樂は蓮の實飛んで月丸し
嵯峨寒しいさまづ下れ都どり

入相の鐘も聞えず春の暮
紅葉やく法師は知らず酒の爛

閑古鳥寺見ゆ麥林寺とや云ふ

▲此ゆはゆるの意である。

いづこ

月いづこ鐘は沈める海の底
山彦の南はいづこ春のくれ

作句の種類 俳句は之を大別すれば叙景のもの
叙事のもの、抒情のもの、三種に區別する事が出来る。
【叙景の句】といふのは人の目に觸れ、耳に觸れる所の天地、山川、湖海、野丘、草木禽獸等の形や音聲や有様等が一種の美的現象に表はれる所を捉へて詠するものである。例へば

青柳の泥にしたる、沙干哉
此寺は庭一ぱいの芭蕉哉

片町にさらさ染むるや春の風
絶頂の城たのもしき若葉哉

芭蕉 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

右の如く各事物は各季によつて變化するものであるから故らに春夏秋冬の文字上の断りはなくとも自然に其何れの季に屬するものなるかを表す事が出来る。叙景の句を作らんとするにはよく其事物を精細に觀察する事が第一である。觀察が足らぬと従つてつまらない句が出来て了ふものである。【叙事の句】は主として人事、行動に關する事を詠んだものである。歴史上の事や、長い歲月の間に種々様々の出来事を叙したり、自然の生活上の事や、人の行動等を詠んだものは即ち叙事の句である。例へば

芭蕉 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

飛入りの者怪しき角力かな
物書きて扇ひき裂く別れかな

芭蕉 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

右の句によつて見ると大抵季を詠み込んである。之は一種の色彩を増さしめ、感興を與へんが爲めであつて、同一の事柄を叙しても季又は天然や動植物を添加したのと否とでは其趣味や感興に少なからぬ差異を生ずるものである。即ち美的感興を惹き起さしむるには是等の添加に工夫を凝らしたものでなければならぬ。【抒情の句】は喜怒哀樂等の感情を詩的に又美的に詠するもので、此句は多く無形的で、前に述べた叙景と叙事との句は大抵有形的である點が異つて居る。而しながら叙事や叙景の句でもそれに附随した自己の感情を詠み添へたものは抒情の句にも屬するものである。又抒情の句でも四季を借りて利用したり、動植物を借りて抒情の力を添へたりする事は勿論で、春は戀を説くに適し、秋は愁ひを述べるに適するが如き即ちそれである。抒情の句の例を

二三左に掲げて見よう。

うき我を淋しがらせよ閑古鳥

芭蕉

父母の頻りに戀し雉の聲

同

いとほる、身を恨み寝や暮の春

同

淋しさの嬉しくもあり秋の暮

同

右に述べた叙景、叙事、抒情等の區別は必ずしも劃然と區別する事は出来ない。叙景の句の中にも抒情があり、抒情の句の中にも叙景が含まれる場合が多いものである。只是等は比較的の區別で、叙景を主としたもの、抒情を主としたものとして區別した方が寧ろ穩當である。次に俳句には主觀的のもの、客觀的のものがある。【主觀的の句】といふのは其人の心中の狀況を詠んだもので例へば

聲よくば歌はんものを櫻ちる

芭蕉

岩底の水も潤るゝか鳥噪く

青々

夢に入る故山の秋の柿の味

鳴雪

孤つ松も見ぬ日爐塞いてあらん

碧梧桐

の如きが即ちそれである。次に「客観的の句」といふのは其人の心に寫つて來た事物を其儘に詠じたものである。例へば

五月雨や大河を前に家二軒

燕 村

下駄の雪たゞきの上に轉がれり

虚 子

寒梅や煤けて在す夫子の像

繞 石

風に抱き合ふ雌松雄松かな

鳴 雪

等の如きものである。しかし此主観的の句、客観的の句も亦嚴密の意味からいふと劃然と區別する事は不可能である。何となれば其人の心に映つた事物を叙したとしても、人によつて映り方が異なる場合がある。例へば「風に抱き合ふ雌松雄松かな」の句にしても、甲は抱き合ふ如く見えても、乙は喧嘩する如く見るかも知れぬ。又丙は互に巫山戯る如く見るかも知れぬ。同じ山の色でも青く見る者もあれば、紫に見る者もあり、紺青に見る者もある。即ち全然自分の心情を其事物に入れないとしても、其事物を

が其人の目や耳や、心に映るといふ事は既に幾分の主観が含まれて居るものといはねばならぬ。故に主観的、客観的といふ俳句の上の言葉は比較的の語で絶対に之を區別する譯には行かぬ。寧ろ主観を多くしたものを、客観を多くしたものといふのが際當である。

平叙と倒叙

俳句の叙寫法には平叙法と倒叙法とがある。「平叙法」といふのは、一句が滞りなく讀み下さるゝ様に作つたもので、例へば

氷りたる佛の飯を盗みけり

虚 子

掃き寄せし落葉に雨の降出しぬ

同

別れたる身を踏み込んで田植哉

燕 村

煤掃の庭で魚焼く焚火哉

鳴 雪

の如きものである。「倒叙法」といふのは即ち順序を變更して下に云ふべき事を上におき、又は中に云ふべき事を下におきかへなどするのをいふのである。此法は詩形の單調となるのを防ぎ、且つ十分に趣き

を添へたり、力を加へたりするが爲である。例へば

戀猫の妻も籠れり籠の下

鳴 雪

秋晴れの日暮るゝ背ろ明き水に

碧 梧 桐

日光を浴びて休むやすゝ拂

虚 子

草深く虫取る人の紙燭して

鳴 雪

等の如きものである。

趣向

俳句の趣向には種々のものがある。勁健のもの、壮大なもの、優柔なもの、雅撲のもの、細微のもの、幽遠のもの、平易なもの、莊重なもの、輕快なもの、奇警なもの、淡泊なもの、眞面目なもの、滑稽なもの等千態萬様であるが是等の内二三の例を左に掲げて見よう。

□雄大なもの

あら海や佐渡に横たふ天の川

芭 蕉

五月雨を集めて早し最上川

同 芭 蕉

一二寸降りもて行くや雪千里

同 芭 蕉

五月雨や蒼海を衝く濁り水

同 芭 蕉

□壯重なもの

奈良七重七堂伽藍八重櫻

芭 蕉

絶頂の城たのもしき若葉哉

同 芭 蕉

鹿ながら山影門に入る日かな

同 芭 蕉

□細微なもの

短夜や毛蟲の上に露の玉

芭 蕉

春雨や蜂の巢傳ふ屋根のもり

芭 蕉

第目にあやまつ足やわか楓

芭 蕉

吹く度に蝶の居なほる柳かな

芭 蕉

□平穩なもの

明月や池をめぐりて夜もすがら

芭 蕉

くたびれて宿借る頃や藤の花

同 芭 蕉

あたゝかな窓に風邪の名残哉

同 芭 蕉

大水の引いて雨なし秋の空

同 芭 蕉

□奇抜なもの

梅ヶ香にのつと日の出る山路哉

同 芭 蕉

雲雀より上に休らふ峠かな

同 芭 蕉

雲を呑んで花を吐くなる吉野山
大砲のどろくとなる木の芽哉
ところてん倒きに銀河三千丈

□滑稽なもの

蓬萊を捧けて眉のかくれけり
下駄の雪たきの上に轉がれり
獨鈷鎌首水掛論の蛙かな
逃げし怖れに氣抜けて二人稻妻を

鳴雪
虚子
蕪村
青々

滑稽の俳句は室町時代の末に於て頗る盛んとなつたが、芭蕉に至つて正風唱起せられ、滑稽の外廣く美的感懐を詠する事となつた。俳句の滑稽と川柳の滑稽とは自ら其趣き異にするもので、川柳の滑稽は人をして抱腹絶倒せしめ、俳句の滑稽は其間に雅致あるを要する。故に俳句にして川柳に近いのは俳句の拙なるもので、若し之を川柳として見る時は更に拙劣なるものである。又川柳にして俳句に近いのは川柳の拙なるもので、若し之を俳句として見る時は更

に拙劣なるものである事を知らねばならぬ。要するに俳句に滑稽味を帯ばしめんとするには美的感懐を添へ雅致ある様せねばならぬものである。

動と不動

俳句を作るには配合する事物がよく調和適應しなければならぬ。此調和適應したものを動かぬ句といひ、然らざるものを動く句といふのである。即ち或季の事物に他の事物を加へて、一つの景色を詠する場合に、其加へた事物が季の事物と如何なる調和を保つかをよく吟味して、最もよく調和したものが動かぬもので、十分に調和しないものは動くものである。例へば

□□□雪積む上の夜の雨

といふ下二句の上へ上の句を置き換へる場合に「静けさや」淋しさや「田舎路や」「川舟や」など種々の句を置いても俳句にはなるが、芭蕉は之に「下京や」の上の句を置いたといふ事である。此他斯る例は尠くないから、一字一句十分吟味して最もよく調和す

る様な字句を用ゐなければならぬ。

弛緩と緊張

俳句にはたるんで居るものと、しまつて居るものがあるがたるんで居る俳句といふのは調和が整つて居らぬのみならず、無益な字句を用ひて何となく一句が緩んで緊りのない抜目のある句をいふのである。之はテニヲハや、副詞、動詞等を多く用ゐる爲に起るもので、名詞を多くするとし

まり易いものである。例へば

ものたらぬ月や枯野を照るばかり

の句に就いて見るに、此句に必要なのは「月」と「枯野」の二つで、「月や枯野を照るばかり」丈で「ものたらぬ」意は既に含まれて居る。又「ものたらぬ月」の「枯野」のみで「照るばかり」の意は其中に含まれて居る。又單に「枯野の月」「月の枯野」といふのみでも其意は十分である。こんな無駄な字句を用ゐたものは即ちたるんだ句といふのである。同じ枯野の月の句でも

月も今土より出づる枯野哉

といへば前の句よりはすつと緊張したよい句となるのである。而し茲に注意すべきは引緊つた句のみがよいといふのではない。或る場合には婉曲に穩かに優しく詠まねばならぬ事もある。此場合には十分にテニヲハを用ゐる、餘裕ある様に詠むのであるが、動いたり抜目があつたりしてはならぬ。

題詠

之は實地でない或事物に對し、或感懐を起したものとて句作するもので、想像によつて實地に境遇した如く詠するのである。而して其範圍頗る廣く、既知の事物によつて未知の事物を想像したり、感懐を加へたりする事は差支ない。只注意すべきは想像が餘りにかけ離れたり、適用を誤つたりせぬ様にせねばならぬ。

運座

之は和歌に於ける歌會の如きもので、一座に會した俳人が協議の上或題を設け、其題が五題なれば一題一句宛即ち五句を詠じ、各人が紙片に認

めて之を集め作者の名を書かすに句のみを淨書し、之を順次列席者に廻し、各自が佳句を選抜するのである。そして其選抜の句数は豫め定めて置き、其豫定の句数丈を自ら淨書して差出せば列席者の一人が之を読み上げるのである。其時其句の作者は自ら名乗つて其名を句の下に記し、又別に表を作つてそれを選抜せられ句数を記入し、それから又すべてが読み上げられ、總ての作者別に點数を其表中に記入した上、更に其得點の多い者から順次に読み上げ、其得點の多い者を座上の優者とするのである。又此座に於て互に意見を交換したり研究したりする事もある。之は新派俳人の運座であるが、舊派の方は句作は右と略同様で、選句は席上の各自がせず、一人の宗匠が總ての批判を爲し、其得點の多い作者を優者とするのである。

第四章 漢 詩

第一節 漢詩の沿革

起原 漢詩は支那から起つたものである事は云ふ迄もないが、何れの時代から起つたかを尋ねれば、支那に於て最も古い歌謡は擊壤歌及び康衢謠の二歌である。此二歌は堯帝の時に成つたもので、擊壤歌は堯帝の世が太平で、百姓は何れも無事安康の爲め、老人壤を撃つて歌うて曰く

日出而作、日入而休、擊壤而歌、耕田而食、帝力于我何有哉、

と歌つたのである。又堯帝が天下を治むる事五十年、其治まれるや否やを見んと欲し、康衢の間に遊びたるに、兒童謠うて曰く

立、我蒸民、莫匪爾極、不識不知

順、帝之則

と。堯帝之を開きて大いに喜んだといふ事である。又其後舜帝の時には南風歌があり、夏の代には吾子歌、殷の代には桑林禱辭、周の代には麥秀歌、及び采薇歌等が最も有名となつて居る。

春秋戰國時代 其後春秋戰國時代に至つては即ち有名な詩經三百篇が成つた。之は孔子の時に至つて古詩三千餘篇の内、其尤なるものを採り、孔子皆之を統歌して詔武雅頌の音に合はせて事を求め、禮樂は之れから始まつたといはれて居る。始めは三百十一篇であつたのが、六篇は失はれて今日は三百五篇を傳へて居る。詩經三百篇は分つて風、小雅、大雅、頌の四つになつて居る【風】といふのは民俗歌謡の詩で、【小雅】は正樂の歌で、燕饗の樂である。【大雅】は會朝の樂で、【頌】は盛徳の形容を美して、其成功を以て神明に告ぐるものである。其後孔子の

如きも去魯歌、龜山操、臨河歌等を作り、尙有名なものには齊威の飯牛歌がある、此詩は七言六句の古詩で、七言古詩の源ともいふべきものである。それから詩が衰へて賦が起つた。賦は歌はずして誦すもので、最も有名なものは屈原の賦二十五篇である。即ち支那では南方の人種によつて賦が起り、北方の人種によつて古詩が起つたものといふ事が出来る。

漢の時代 秦の初に至つて易水歌あり、次に項羽の垓下歌、漢高祖の大風歌がある。それから漢の武帝に至つては文學頗に起り、帝も亦好んで文學を奨励し文學の士を厚遇したので、司馬遷、司馬相如、董仲舒、枚乘等の詩人が輩出した。武帝の作には瓠子歌、蒲梢天馬歌、落葉哀蟬曲等がある。從來の詩は句に長短の規がなかつたが、漢の初めに至つて四言詩を作り、武帝の時に至つて始めて五言の體があり、是より盛んに五言が行はるゝに至つた。即ち五言古詩を以て詩の正格と稱し唐の代に至るまで之

が行はれて居た。
次に武帝の元封三年に柏梁體が成る。群臣中詩をよくする者を侍座せしめ、帝先づ首句を賦し、一人毎に一句を賦し、總て廿四人東方朔に至つて止む、柏梁體なるものは即ち之で、後世七言の始めと稱せられて居る。又聯句の體も是に始まつたのである。次に樂府も亦此時代に始めて置いたものである。樂府はもと詩と同じで、詩を以て樂に合せ、之を歌奏し、或は軍中に、或は郊祀に相和したのである。

六朝文學 漢室が滅びて三國となり、蜀魏吳相對峙し、それから西晉となり西晉に及びて東晉となり、宋齊梁陳順次に傳へ、次いで南北朝に及び後南北混じて一となつたが、此間に起つたものが即ち六朝文學である。此時代の詩人として知られて居る者は蔡邕あり、諸葛亮あり、魏の武帝及び其子文帝あり、文帝の弟曹植あり。又曹植と時を同じうして王粲、陳琳、劉楨、徐幹、應瑒、孔融、阮瑀等の輩あり。

り。而して是等の詩人の賦した詩を名づけて建安體と云つて居る建安は當時の年號である。其後に阮籍あり、嵇康あり、太康年中には傅言、陸機あり、殊に陸機は太康年中の英と稱せられ、其詩は多く排偶を用ゐる、律詩の始めといはれて居る。陸機と伍すべき者に左思がある。詠史によく後人の典型と稱せられて居る。此時代も亦詩人輩出し、詩風一變して之を太康體と稱へる。

其後に至り詩運漸く衰へんとする時に當り、晋末に至つて陶淵明が出て詩運を回復し、宋の代に入つて謝靈運が出て、淵明と並び稱せられ、靈運に次いで顔延之、謝惠連、鮑照等がある。又齊には謝玄暉、孔稚圭等があり、梁には沈約、紅淹、任昉等があり、隨に入つては煬帝がある。

唐の時代 唐の時代に至つては支那に於ける文學極盛の時代で、殊に詩は最も隆盛を見た。【初唐】に於て最も名ある者には王勃あり、楊炯あり、盧照

隣あり、駱賓王がある。世に是を初唐の四傑といつて居る。而して漢代に於ける賦は此時代に至つて七言古詩となり、長篇を多く見るに至つた。又陳子昂が出づるに及んで六朝の弊を一掃し、沈徐期、宋之問出で、所謂沈宋體なる詩風を作り、音韻相和し、句を約し、技巧を競ふに至つた。杜審言、張說、張九齡等も此時代に屬し、賀知章、包融、張旭、張若虛等も亦初唐の終に出た。【盛唐】に至つて唐朝の文學は實に絶頂に達したものと云ふを得べく、此時代に李白あり、杜甫あり、前代の風を一變して詩道に新局面を展き、燦然として唐朝の文運を左右したるの觀がある。李白は情よりも氣を以て勝り、天馬空を行いて飄勃すべからざる勢ひがある。杜甫は李白に反し情の人で、常に時事を悲しみ、薄命を歎ずる所に天才を有して居た。又李杜の外に此時代に王维あり、孟浩然あり、儲光義あり、高適あり、岑參あり、崔顥あり、王昌齡等がある。【中唐】の詩人と

して最も傑出した者は白樂天及び韓愈である。白樂天の詩は平易にして暢達清空、よく支那及び我國の上下に歡迎せられた事は世の知る所である。長恨歌、比巴行、遊悟真寺詩等の如き最も有名なるものである。韓愈は詩人であるのみならず、文章家として有名である。詩として有名なものには南山詩、元和聖德詩、石鼓歌、月蝕詩等である。韓愈は孟郊と共に聯句を中興し、白樂天は天頌と共に次韵を創成した人である。此時代の詩人としては此外に劉禹錫、張籍、李賀、劉長卿、韋應物、劉夢得、王建、十才子、賈綸、吉中孚、錢起、司空曙、苗發、李端、崔洞、夏侯、審歌諱等がある。【晚唐】に至つては詩運衰ひたるの觀がある。此時代の詩人として知られたる者には杜牧、溫庭筠、李商隱、許渾、皮日休、陸龜蒙、羅隱、空圖等がある。

宗の時代 は朝廷文學を獎勵した結果唐の後五代の衰運を挽回した觀がある。宋の初期にあつては

揚億、劉大年等が所謂西昆体なるものを起し、又林連あつて隱逸の詩をよくした。後歐陽脩出でて、長篇大作多く、梅聖俞、蘇東坡、王安石等も亦此時代に傑出せる詩人である。又黃庭堅、張耒、晁補之、秦觀等あり、共に蘇門の四家と稱せらる。北宋滅びて南宋となつては陸放翁があるのみである。支那詩人中第一の多作者と稱せられて居る。宋が滅びんとする頃に至つては文天祥、謝枋得等の悲歌慷慨の詩人が出た。

金元の時代 金の代には其末に於て元遺山がある。元遺山は殊に文章家として著書頗る多く、詩としても悲壯感憤のものが少くない。元の代に入つては超孟頫が最も傑出して居る。又虞集、揚載、范梈、薩都刺、倪瓚、揚維禎等がある。

明の時代 となつては幾分詩運の復古を見たが其末期に至つて輕靡の調となり、更に清新の詩風を作るに至つた。此時代の詩人としては劉基がある。

又時を同じうして高青邱がある。高は明代中の卓絶した詩人と稱せられて居る。又此同時代に楊基、張羽、徐賁、張簡、袁凱、劉崧、林鴻等がある。太宗以後に至つて傑出したる者は李東陽である。東陽の詩は唐宋時代の餘韻を存し、延いて復古の氣運を致し、更に李何七子出でて、當代の文運に一新局面を劃した。李何七才子とは李夢陽、何景明、徐禎卿、賈海王、九思、王廷相をいふのである。次に其餘風は更に李王の七子が出でた。七才子とは李攀龍、王世貞、謝榛、梁有譽、宗臣、徐中行、吳國倫である。李の七律、王の樂府は自ら新機軸を出した。然れども多くは其精神に及ばずして其文字を擬するに過ぎなかつた。明の末に至つて陳子龍出でて詩道の衰運を救はんと力を盡し、錢謙益亦正に復さんとしたが明は終に亡びた。

清の時代 錢謙益は明の代に詩の復古を唱へたも明が亡びた爲此時代には其志を得る事が出来

かに清の時代となつた。此外明の遺臣が清の代に入つて著名なる文章家又は詩人となつた者は少くない侯方域、吳偉業の如き即ちそれである。清の時代に知られた詩人には施閏章、宋琬、王士禛、朱彝尊、趙甌北、查初白、袁枚、蔣士詮、沈德潛、王昶、黃景仁、吳錫麒、張問陶、陳文述等がある。殊に施の五律は最も神に入りて古詩十九首に匹敵すると稱せられて居る。又趙甌北は別に一幟を樹て、其名一世を傾倒し、清朝屈指の作家として知られて居る。

日本の漢詩 次に我日本に於ては何れの時代から漢詩が始められたかといふに、一千二百餘年前弘文天皇時代を以て始められて居る。奈良朝から平安朝に亘つて漢學は漸く盛んとなり、殊に桓武天皇より清和天皇に至るまで七八十年間は漢學極盛の時代で、詩賦盛に行はれ、和歌は一時頹れるに至つた。即ち支那は當時唐の時代である。奈良朝時代に作られた漢詩集には淡海三船が擇んだ懷風藻がある。之

れ即ち我國に於ける最初の漢詩集である。又菅原道真、小野篁の如きは我國上代に於て有名な漢詩人である。其後徳川時代に至るまでは漢詩の見るべきものがなかつたが、徳川時代に至つて漢學復古し、詩賦は文人儒者の間に盛に行はれ、荻生徂徠、服部南郭等出でて、李王修辭の説を唱へ、文化文政の頃に至つて宋代の詩を唱へたが此間に名ある者は菅茶山、頼山陽、廣瀬淡窗、梁川星巖、廣瀬旭莊等がある。尙徳川時代の後期に至つて市川寬齋、館柳灣、大窪詩佛、摩島松南、中島機隱、篠崎小竹、草場佩川、村上佛山、藤井竹外、劉石秋、劉冷窓、大槻磐溪、齋藤拙堂其他の諸氏あり、又藤田東湖、梅田雲賓等も有名である。明治に入つてからは、大沼枕山、小野湖山、森春濤、野口寧齋、森槐南等がある。大正に入つては歐洲戰亂の影響を受けて文學方面は頗る衰へ、殊に漢詩人として特筆すべき者が出来ない。

第二節 漢詩の種類

漢詩は之を大別して古體と近體の二種となし、古體に屬するものには三言古詩、四言古詩、五言古詩、七言古詩、長短句、樂府等があり、近體に屬するものには五言律、七言律、五言排律、七言排律、九言律、十一言律、五言絶句、七言絶句、九言絶句、十言絶句等がある。而して是等の内最も多く行はれたのは古體にあつては五言、七言、長短句、樂府で、近體にあつては五言、七言の律排律及び絶句で、他は一部に試みられたのみで多く行はれない。

- 四言古詩 は商の時代から周の時代に盛に出来たもので、詩經三百篇にある詩は大部分四言體である。今左に一例を掲げて見よう。
馨彼小星 三五在東 肅々宵往
夙夜在公 寔命不殆 肅々宵往
維參與昴 肅々宵往

抱衾與綯 寔命不殆
五言古詩 は武帝の時に至つて始めて成つたものである事は前にも述べたが、今其一例を左に掲げて見よう。

- 骨肉緣枝葉 結交亦相因
四海皆兄弟 誰爲行路人
況我連枝樹 與子同一身
昔爲鴛與鴦 今爲參與辰
昔者常相近 適若胡與秦
惟念當離別 恩情日以新
鹿鳴思野草 可謂喻嘉賓
我有二樽酒 欲以贈遠人
願子留斟酌 叙此平生親
將軍旋馬邑 揚旆驚霧靜
荒裔一戎衣 雲臺凱歌入
七言古詩 は遠く春秋戰國時代に於て齊威の飯牛の歌を以て始まつて居るが、今初唐に於ける四傑中の第一位と稱せらるゝ王勃の七言古詩を左に掲げ

て見よう。

滕王閣

王勃

- 滕王高閣臨江渚 佩玉鳴鸞罷歌舞
畫棟朝飛南浦雲 朱簾暮捲西山雨
閑雲潭影日悠悠 物換星移幾度秋
閣中帝子今何在 檻外長江空自流

樂府 は節奏を主とするものであるから、句法は長短定まらない。詞も亦雅俗を擇ばない。古詩は自己の感情を叙ぶるものであるから、主観的であるが、樂府は見聞した事實を其儘に詠するものであるから客観的である。今其一例を掲げれば

飲馬長城窟行

太 宗

- 塞外悲風切 交河水已結 瀚海百重波
陰山千里雪 迥戍危烽火 層巒引高節
悠悠卷旆旌 飲馬出長城 塞沙連騎跡
朔吹斷邊聲 胡塵清玉塞 羌笛韻金鉦
絕漢干戈戢 車徒振原隰 都尉反龍推

文 藝 第五卷

- 將軍旋馬邑 揚旆驚霧靜 亂石功名立
荒裔一戎衣 雲臺凱歌入
五言律詩 は五言八句に限つて居て、一二の句を起聯又は發句、發端とも云ひ、三四の句を前聯といひ、五六の句を後聯と云ひ、七八の句を尾聯又は落句といふのである。左に一例を掲げる。
從軍行 揚炯
烽火照西京 心中自不平 牙璋辭鳳闕
鐵騎繞龍城 雪暗凋旗畫 風多雜鼓聲
寧爲百夫長 勝作一書生
七言律詩 は五言律詩の如くで、七言八句から成つて居る。其句の名目及び對偶の法は五言と異なる所はない。今一例を左に掲げる。
龍池篇 沈佺期
龍池躍龍龍已飛 龍德先天天不違
池開天漢分黃道 龍向天門入紫微
邱壑樓臺多氣色 君王鳧鴈有光輝

爲報寰中百川水 來朝此地莫東歸
五言排律 といふのは五言律詩を多く續き合せたやうな者で、韻法も平仄法も五言律詩と同じである。左に一例を掲げる。

靈隱寺 賈賓王

鷲嶺巖巖 龍宮鎖寂寥 樓觀滄海日
門對浙江潮 桂子月中落 天香雲外飄
捫蘿登塔遠 剝木取泉遙 霜薄花更發
冰輕葉互凋 夙齡尙遐異 披對滌煩囂
待三人天台路 看余渡石橋

七言排律 は七言律を多く續き合せた様なもので、前に掲げた五言排律の様になつて居るものである。

五言絶句 は五言四句から成つて居て、第一句を起句と云ひ、第二句を承句といひ、第三句を轉句といひ、第四句を結句又た合句といふのである。左に其一例を掲げる。

鹿 柴 王 維

空山不見人 但聞人語響
返景入深林 復照青苔上

七言絶句 は七言四句から成つて居て、名句の名稱は五言絶句と同様である。

秋江送別 王 勃

早是他鄉值早秋 江亭明月帶江流
已覺近川傷別念 復看津樹隱離舟

江南春 杜 牧

千里鶯啼綠映江 水村山郭酒旗風
南朝四百八十寺 多少樓臺烟雨中

第三節 漢詩の作法

一、平仄の式

漢詩には平仄の式といふものがある。漢詩を作る

上にはどうしても之を心得て居らねばならぬ。漢詩に平仄のあるのは和歌にテニテハがある如く、洋詩に抑揚がある様なもので、之があるが爲に調和し、又餘韻を生ずるものである。平仄といふのは平聲、上聲、去聲、入聲の四聲で、
平聲は平にして流暢な音である。
上聲は高くして激しく強いものである。
去聲は悽愴で悠遠な音である。
入聲は急促にして急に切迫する音である。
而して上聲、去聲、入聲は之を總稱して仄聲又は仄韻とも云つて居る。之は平聲に對した語である。次に此四聲の区分は左の如くである。

□上平聲(十五韻あり)

- 一、東 二、冬 三、紅 四、支
- 五、微 六、魚 七、虞 八、齊
- 九、佳 十、灰 十一、眞 十二、文
- 十三、元 十四、寒 十五、刪

□下平聲(十五韻あり)

- 一、先 二、蕭 三、肴 四、豪
- 五、歌 六、麻 七、陽 八、庚
- 九、青 十、蒸 十一、尤 十二、侵
- 十三、覃 十四、鹽 十五、咸

□上聲(二十九韻あり)

- 一、董 二、腫 三、講 四、紙
- 五、尾 六、語 七、麌 八、霽
- 九、蟹 十、賄 十一、軫 十二、吻
- 十三、阮 十四、旱 十五、潛 十六、銑
- 十七、篠 十八、巧 十九、皓 二十、哿
- 廿一、馬 廿二、養 廿三、梗 廿四、迥
- 廿五、有 廿六、寢 廿七、感 廿八、琰
- 廿九、謙

□去聲(三十韻あり)

- 一、送 二、宋 三、絳 四、寘
- 五、未 六、御 七、遇 八、霽

- 九、泰
- 十、卦
- 十一、陰
- 十二、震
- 十三、問
- 十四、願
- 十五、翰
- 十六、諫
- 十七、霰
- 十八、嘯
- 十九、效
- 二十、號
- 廿一、箇
- 廿二、碼
- 廿三、漾
- 廿四、敬
- 廿五、徑
- 廿六、宥
- 廿七、沁
- 廿八、勸
- 廿九、盪
- 三十、陷

口入聲 (十七韻あり)

- 一、屋
- 二、沃
- 三、覺
- 四、質
- 五、物
- 六、月
- 七、曷
- 八、黠
- 九、屑
- 十、藥
- 十一、陌
- 十二、錫
- 十三、職
- 十四、緝
- 十五、合
- 十六、葉
- 十七、洽

以上平聲には上下を通じて三十韻、仄聲には上、去、入の三聲を通じて七十六韻ある。平聲の韻は總じて清聲で、仄聲の音は總て濁重であるが、我日本人には容易に之を判別し難い。然れども多く習熟するに従ひ自ら判明するに至るものである。殊に平聲の

三十韻をよく記憶して之に習熟すれば平韻の字と仄韻の字は識別するに容易となる。又フツクチキに平字無しといつて此音のつく字は平字ではない場合が多い。例へば

- 輯(シフ) 立(リフ) 共に十四緝の韻
 - 塔(タフ) 閣(カフ) 共に十五合の韻
 - 妾(セフ) 蝶(テフ) 共に十六葉の韻
 - 密(ミツ) 膝(シツ) 共に四質の韻
 - 佛(フツ) 爵(ウツ) 共に五物の韻
 - 髮(ハツ) 骨(コツ) 共に六月の韻
 - 竹(チク) 菊(キク) 共に一屋の韻
 - 玉(ギョク) 綠(リョク) 共に二沃の韻
 - 鶴(カク) 落(ラク) 共に十藥の韻
 - 日(ニチ) 七(シチ) 共に四質の韻
 - 碧(ヘキ) タ(セキ) 共に十一陌の韻
 - 笛(テキ) 微(ゲキ) 共に十二錫の韻
- の如き、即ち其一例である。次に字書には此四聲を

左の如く記してある。即ち上部左方の隅に符號のあ
 去 入
 上 平
 入
 るのは上聲、右方隅が去聲、
 下方左隅が平聲、下方右隅
 が入聲の符號である。而し
 之はどの字書にもあるといふのではないから此四聲
 を研究せんとする者は此符號のある字書を求めるが
 よい。

平仄の符號 次に平仄を表すには符號を定め
 である。即ち平字は○とし、仄字は●とし平仄何れ
 をも用ふべきものは○の符號である。

孤平 といふのは一個の平字が二個の仄字の間
 に挟まれたもので、例へば符號で示せば●○●とな
 る場合である。之は近體の絶句や律詩に最も忌むべ
 きものとせられて居る。其音節の上に於て殊に最も
 注意すべきは、五言の場合には第二字、七言の場合
 には第四字である。何となれば上二下三の五言第二
 字より下に推移するものであるから、第二字は第五

字と相對して調和し、又上四下三の七言は第四字か
 ら下に推移するのであるから第四字は最も重く、此
 字が調和を缺く時は第五字又は第七字に十分に響應
 を生ずる事が出来ないものである。だから上の字が
 平ならば下の字を仄とし、下の字が平ならば上の字
 を仄とすると共に又此一字の平が仄字の間に挟まれ
 ぬ様に工夫して音調を整へなければならぬ。

下三連 といふのは句の下三字が仄字若しくは
 平字の三つ連るもので、之も忌むべき事である。例
 へば○○●○○○又は●●●●●の如きが即ちそ
 れである。

二、五言絶句

五言絶句は四句二十字から成るものである事は前
 に述べた如くであるが、此平仄は左の如くである。

●○○●○○○○○○○○

仄起格

○○○○●●●●
 ○○○●●●●●
 ○○○●●●●●
 ●●●●○○○○

平起格

仄起といふのは第一句の第二字が仄字を用ふるのをいひ、平起といふのは第一句の第二字が平字を用ふるのをいふのである。而して各句共第一字は平仄を變ずる事が出来る。例へば

仄字起格

●○○○○○
 ●○○○○○
 ●○○○○○
 ●○○○○○

平起格

○○○○○○○
 ○○○○○○
 ○○○○○○
 ○○○○○○

起承轉合 絶句は何れも第一句を起句、第二句を承句、第三句を轉句、第四句を結句又は合句と稱

の如くである。

三、七言絶句

七言絶句は四句二十八字から成るもので、其平仄は左の如くである。

仄起格

●○○○○○
 ●○○○○○
 ●○○○○○
 ●○○○○○

平起格

○○○○○○○
 ○○○○○○
 ○○○○○○
 ○○○○○○

仄起は第一句第二字が仄字の場合、平起は第一句第二字が平字の場合をいふ事は前の五言絶句と同様である。

押韻 といふのは起句、承句、結句の三句に同韻の字を用ゐ、只轉句にのみ之を用ゐないものをいふのである。例へば

し、各々其特色を有して居る。即ち起句は説き起す句で、承句は起句を承けて之を暢言し、轉句は起承二句以外の意を以て一轉せしめ、結句は起承轉の三句を收束して、篇を纏むるものである。而して轉句は全篇の變化曲折を起す所の骨子となるべきもので最も大切なるものである。

對格

といふのは白水に對する青山、大川に對する小流、白砂に對する青松の如く他物と取り合せて對となる事をいふので、詩に於ては二句宛又は四句を對句にしたるものを對格と稱する。而して其法に三種がある。前對格、後對格及び全對格で、前對格といふのは起句、承句の二句を對句としたもの、後對格といふのは轉句と結句とを對句としたもの、全對格といふのは起句承句及び轉句結句各二句宛共に對句から成つて居るものをいふのである。之は五言も七言も同様である。

天涯小雨潤如○

草色遙看近却無○

最是○一年春好處

絕勝○煙柳滿皇都

李 白

名花傾國兩相歡

常得君王帶笑看

解釋春風無限恨

沈香亭北倚闌干

の如く、酥、無、都の三字、歡、看、干の三字は何れも同韻の字を用ゐたものである。而しながら中には起句に韻を押まない事がある。之を押落といつて變格である。例へば

王 維

獨在異鄉爲異客

每逢佳節倍思親

遙知兄弟登高處

遍插茱萸少一人

の如く承句及び結句には親、人の同韻を用ふるも起句には用ゐて居ない、之は即ち變格であつて、已む

を得ない場合にのみなすべきものである。次に七言絶句の場合は左の如く第一句に韻を押すのが正體であるが、五言絶句は之に反し第一句に韻を押さぬのが正體である。又韻は平韻の時には第三句の七字目は仄字を用ゐる、仄韻の時には第三句の七字目は平字を用ゐるのである。

拗體 といふのは平仄の定式を外れて而かも尙今體の音節聲調に背かぬ様にしたもので例へば

賈 至

楓岸紛々落葉多 洞庭秋水晚來波
乘興輕舟無近遠 白雲明月弔湘娥
の如きは前半は仄起の格にして後半は平起の格を用ゐたものであるが、其平仄には違つては居ない。而し之は已むを得ざる場合に於てのみ爲すべきもので強ひて爲すべきものではない。

四、七言律詩

七言律詩は同じ格の平仄の七言絶句を二首聯ねたるものと同様で只異なる所は前の二十八字は七言絶句の格と全く同じく、後の二十八字は押落の格を用ゐたものである。其平仄は左の如くである。

仄起格

●○○○○○○○
○○●○○○○○
○○○○●○○○
○○○○○○●○
○○○○○○○○○
○○○○○○○○○
○○○○○○○○○
○○○○○○○○○

平起格

○○○○○○○○○
○○○○○○○○○
○○○○○○○○○
○○○○○○○○○
○○○○○○○○○
○○○○○○○○○
○○○○○○○○○
○○○○○○○○○

右の如くであるが、各句の第一字及び第三字は平仄

何れにしても妨げはない。而して初の二句を起聯といひ、次の二句を頸聯といひ、第三の二句を腹聯といひ、最後の二句を結聯といふのである。對聯 とは對語を以て作つた二句を一聯とするもので、律詩の中四句は必ず之によつて組織するものである。而して對聯には雙起單結體、單起雙收體、八句全對體の三種がある。

雙起單結體

前の述べた如く律詩は第一、第二の句は之を起聯と云ふが、通例は之に對句を用ゐないものである。若し之を對句とする場合には多く押落しと爲すものである。之れ即ち雙起單結體である。例へば

西山白雪三城戍 南浦清江萬里橋
海內風塵諸弟隔 天涯涕淚一身遙
惟將遲暮供多病 未有涓埃答聖朝

跨馬出郊時極日

不堪人事日蕭條

單起雙收體

といふのは前と反して第一、第二の散句(對句を用ゐないもの)にして第七、第八の句を對句としたものである。例へば左の詩の如くである。

雲飛玉立盡清秋 不惜奇毛慾遠遊
在野只教心力破 于人何事網羅求
一牛自獵知無敵 百中爭能耻不羈
彫甍九天須却避 兔藏三窟莫深憂

八句全對體

とは全八句が總て對聯によつて成つて居るものである。

五、五言律詩

五言律詩は平仄は七言律詩の上の二字を取り去つた様なものであるが、起句は押韻しないのが正格である。而して其平仄は

仄起格



平起格



の如くで、第一字は平字仄字何れでも差支ないが第二字の孤平は忌むべきものである。而して押韻する變格の律詩にありては押韻の句の第二字が平字にして第四字が仄字の時は第一とは必ず平字を用ゐるも

ので、又第二字が仄字で第四字が平字の時は第一字の平仄は何れでもよい。

六、五言排律

五言排律に就いては前にも述べた如く五言律詩の對聯を重疊聯接して十句以上數百句にも及ぶものをいふので其平仄及び對聯は普通の律詩と異なる所はない。七言排律も亦之に準じたものである。而して排律の特色ともいふべきは對聯に力を用ゐる事で、一句一字精練熟考して一の瑕瑾なき様にせねばならぬ。少しでも間が抜た所や字句の用ゐる方が精練を欠くと全體の美を損うものである。次に排律は最初四韻のもの最も易く、韻の多くなるに従つて至難となるものである。今左に杜甫の二十韻を掲げて見よう。

寄李太白

昔年有狂客

號爾謫仙人

杜甫

稻梁求未足

蕙苒謗何頻

五嶺炎蒸地

三危放逐臣

幾年遭鵬鳥

獨泣向麒麟

蘇武元還漢

黃公豈事秦

楚筵辭禮日

梁獄上書辰

已用當時法

誰移此議陳

老吟秋月下

病起暮江濱

莫怪恩波隔

乘槎與問津

七、漢詩の用語

漢詩を作る上に最も意を用ゐなければならぬものは前に述べた平仄の式は勿論であるが、用語も亦大切なるものである。漢詩の用語は古來自ら定まつて

- | | |
|-------|-------|
| 筆落驚風雨 | 詩成泣鬼神 |
| 聲名從此大 | 汨沒一朝伸 |
| 文彩承殊渥 | 流傳必絕倫 |
| 龍舟移棹晚 | 獸錦奪袍新 |
| 白日來深殿 | 青雲滿後塵 |
| 乞歸優詔許 | 過我夙心親 |
| 末負幽棲志 | 兼全寵辱身 |
| 劇談憐野逸 | 嗜酒見天真 |
| 醉舞梁園夜 | 行歌泗水春 |
| 才高心不展 | 道屈善無隣 |
| 處士禰衡俊 | 諸生原憲貧 |

居る所のもので、妄りに自ら作成すべきものではない。數千年來用ゐて來た語と雖も、巧みに之を用ふれば極めて新なものとなるものである。次は名詞であるが漢詩は名詩を多く用ふれば雄健となるけれども、二句以上名詞のみで作る事は困難である。故に此場合には動詞を運用せねばならぬ。例へば

空山不見人 但聞人語聲

返景入深林 復照青苔上

の詩に就いて云へば山、人、聲、景、林、苔、上等は名詞で、見、語、聞、返、入、照等は動詞である。次に肝要なのは助字である。詩に餘り多く助字を用ゐると勢が薄くなるものであるが、全然之を用ゐない事は勿論不可能で、要するに之れを用ふるの巧拙如何によつて活躍する事になる。例へば

霜滿三軍營 秋氣清 數行過雁月三更

越山併得能州景 遮莫家鄉憶 遠征

によつて見ると遮莫(さもあらばあれ)は助字であ

る。此虚字によつて此詩が活躍して居る。

八 實接と虚接

漢詩には實接と虚接といふ事がある。實接といふのは事實を以て起句及び承句の二句に接續するもので、虚接といふのは第二句即ち轉句が虚語を以て前の兩句(即ち起句、承句)に接するものである。之は周勃の説く所で、其説に曰く「絶句の法は大抵第三句を以て主となし、首尾率直にして婉曲なきもの、是異時の唐に及ばざる所以なり。實事を以て意を寓し、接すれば轉換力あり。斷るが如くにして續き、外振起して内平妥を失はず、前後相應ず、四句に止まると雖も、而かも不盡の意を涵蓄す」と又虚接に就いて曰く「虚接は第三句虚語を以て前兩句に接す。亦語は實と雖も、意虚なるものあり、承接の間に於て略轉換を行ふ。反正と相依り、順逆と相應じ一呼一喚、宮唱自ら諧ふ」と

第 二 編 蜜 蜂 の 飼 養

第 一 節 蜜 蜂 の 種 類

日本種 は古くから我國に飼養せられたもので、甲斐、信濃、紀伊、薩摩等は最も盛に飼養して居た。此種は性質が温和で労働は長く勉めるが、探蜜が周到でなく、且つ大群を爲す事が出来ない短所を有して居る。日本種の働蜂は炎黄灰色で老成すれば黒灰色となり、外國種に比すれば稍小さい。蜂王は黒褐色で光澤があり、腹及び脚は茶褐色である。それから雄蜂は鐵漿色を有して居る。蜜蜂が蜂王を愛する念は何れの種類も強いものであるが、日本種は殊に甚だしい。故に蜂王を亡失した時は非常に喧騒するを常とする。そして集合の力強く、分封

の際に於ける蠢動は早く、固く圓くなるものであるから、其群集又は巢脾間に空隙又は他の物質のあるを嫌ふものである。故に之を飼養するには織箱を用ゐるも之に巢脾を造營するのを喜ばない。

伊太利種 は蜂體大きく、其色が黒黄色で腹部から胸部に接して三條乃至五條の腹輪がある。蜂が蜜を啣む時は其腹輪が伸びて黄色を現はす事が多いが、蜜を啣まない時は腹部が縮少するから一見別種の如き観がある。蜂王は黄褐色であるが時によつて濃淡異なるものを生ずる事がある。そして老成すると漸次に鈍色を呈し、尾端は黒色を帯ぶるものである。雄蜂は大小があつて黒褐色で帯黄色の横條が美しいものである。体格は強健で物に恐れる事なく、巢框を出しても騒亂する事がない。そして柔順に取扱ひ易く、よく大群を爲すものである。色は人為陶汰の結果黄金色、緑皮色、暗色等の種類を生

じ、レットクロバニー又はロングタング等の名稱を附したものである。次に伊太利種の特長は舌の長い事で、日本種蜜蜂が採蜜し能はざる蜜槽の深い花から能く蜜を採取するものである。而し此種の短所とする所は飛力が強くない爲に空気の濕潤な時は勞働鈍く、殊に我國の如く梅雨期の長い地にあつては勞働少く、従つて貯蜜を減少するのみならず、動もすれば餓に瀕する事がある。

セイフリアン種 は伊太利種と其原種同じくし、其性質も亦よく似て居る。腹部が胸部に接した三環節には三條の淡橙黄色の腹輪があつて頗る鮮麗である。而して下腹部は殆んど全部淡黄橙色を帯び、後胸の背面稍凸起した所は淡褐色の半月形を現はし、尾端は尖り多くして黒色である。蜂王は橙黄色の腹輪があつて頗る美しい。そして産卵中のものは體軀が大きい、産卵を休止すると腹部が甚だ縮少するものである。雄蜂は一般に黒褐色である。

此種は貯蜜甚だ多く、一蜂群が一期間の收蜜は千斤に達する事は珍らしくない。之は勉強なるが爲で、よく遠方まで至りて花を求め、夏季他の種類の蜜蜂が收蜜を減する時にあつてもよく貯蜜を減少せしむる事が少ない。又蜂王産卵も多く繁殖力強く、蜂群の境遇がよくない時でも倦怠する事がないから其勢力を保持し、終には全く恢復するに至るものである。而し晩秋に於て永く産卵を繼續し越冬準備をする事が遅いので越冬は十分の貯蜜を得る事が出来ないから飼養者は此點に十分注意せねばならぬ。又晩秋若しくは空気の濕潤な時に於てもよく勵精し、多くの蜜を運んで歸るから巢箱が不適當な場所に置かれてあると、巢門の近傍に歸つて翅力疲れて休息した儘冷氣の爲めに起つ能はざるに至る事があるから注意せねばならぬ。此種は頗る怒り易い性質を有し、若し取扱が荒い時は螫れる事があるが、少し蒸煙を用ふる時は取扱ひ易いものである。次に此種

の蜜蜂は巢脾を保護する力が強く害敵を防ぐ事が巧みである。

カーニオラン種 は埃地利の原産で、其色は灰黒色である。腹部の各環節後方に銀白色の毛を生じ、老成したものは黒色を帯びて白毛漸く減少し、體は伊太利種よりは稍大きく、尾端の尖りが少く、蜂王は暗褐色で淡い斑紋がある。下腹部は赤銅色を帯びて居る。雄蜂は暗褐色で腹輪は濃い赤銅色を帯び其翅力が甚だ強い。性質の温順なのは此種の特長で取扱は容易である。然れども勇氣に乏しいのではなく、害敵を防ぐ事は甚だ巧みである。又よく激しい氣温の變化に堪へ、何れの風土氣候でもよい。越冬も甚だ巧みで蜜の消費少く、越冬長期に亘つても安全である。又繁殖早く主要植物開花の期の早い地方でもよく初期の收蜜を全うする事が出来る。野に花の多い時は勞働が盛んで收蜜量多く、其飛力は伊太利種に優つて居る。巢脾は白色で其蜜を巢房に貯

ふるに蜜の蓋に附着する事がないから甚だ美麗である。又樹脂を採取する事少く且つ花蜜多い時でも蜜を育児の巢脾に貯ふる事少く早く巣箱内に働から收蜜上頗る利益である。

コーカシアン種 は露國のカウカサスの原産で、働蜂はセイフリアン種より稍小さく、其色は暗褐色で腹輪が明白である。蜂王は濃い赤銅色で時に褐色に近いものを生ずる事もある。雄蜂は一般に黒色であるが中には暗褐色と黄色とある。此種の蜜蜂は性質温順で殆んど螫す事がないから取扱ひ容易である。又害敵を防ぐ事は巧みで巢門を守る事が嚴重である。それから此種の蜜蜂は寒暑其他の氣候の急變によく堪へ、春季早く勞働を始めて蜜の消費少ない事はカーニオラン種と同様である。又飛力強く、晩秋に至れば早くも越冬の準備を爲し、舌は甚だ長く能く勞働する故に集蜜力多く、蜂王は産卵力甚だ多く、忽ち繁殖し早く收蜜準備を爲さしめる事が

出来る。巢脾は白色美麗で貯蜜の蓋に附着する事なく、夏季花の減少した時又は秋季に於て灰黒色の樹脂を以て巢門を狭くにする事がある。

第二節 養蜂場

養蜂場の位置 之は少数の養蜂を爲す場合と多数の養蜂を爲す場合とによつて異なるが、農家の副業として少数の養蜂を飼養するには宅地内に以て養蜂場に充てるが却つて得策であるが、山間僻地にして天然の草花に富んだ所は養蜂場として最も良い所である。又平原の地よりは寧ろ山陵の相起伏した所がよい。又蜂の労働する範囲内に於て寒暖の差多い土地は同一の植物でも其花を開くに早晚があるから蜂は長く蜜を採取する事を得る便宜がある。養蜂は三四里若くは以上も遠方へ行つて労働するものである。最も利益ある労働範囲は其近傍二里以内がよいから其範圍で花其他の状況を調べて場所を撰ぶべきである。

蕎麥、莖草、果樹等の如きものは養蜂の原料として良いものであるから、是等の栽培が多い地方は其花期に於て收蜜量多く、一ヶ所に多数の養蜂を置いてもよいが、其花期を過ぎれば之を他の花のある土地に移さねばならない。之れに反し野草雜木の花は順次に花を開いて絶えず蜜の原料を供給するから山陵の起伏せる未開の土地は飼養すべき箱数を多くしてもよいのである。養蜂場の方向は第一は東方に向ふのがよい。第二は南方に向ふがよく、成る可く西北風を防ぎ夏は清涼で冬は温暖な場所がよい。そして土地は濕潤でなく乾燥して居る所がよい。

養蜂場の種類

養蜂場は屋外に設けると屋内に設けるのとある。屋外で飼養するのは巢箱を只露地に並置するものであるから巢箱の木材を厚くして寒暑を凌ぎ其蓋は雨水の浸入せぬ様にし、若し土地が濕潤して居る時は其巢箱を置く所の地下一尺ばかりを掘つて小石を填めるがよい。又巢箱の南側の燻

性の落葉樹を植ゑて夏季の炎暑を防ぐ様にせねばならぬ。積雪の多い地方とか大風を受ける地方とか炎熱の甚だしい地方とかでは屋内に飼養するのが安全である。屋内飼養を爲すには簡単な屋根を作つて雨露と陽光とを防ぎ、屋根は草葺が最もよい。そして其中に巢箱を適宜に並列して置くのである。それから寒氣の甚だしき地又は風の多い地では冬季は藁の様なもので屋外を周圍んで置くのがよい。

養蜂舎

は舎内に巢箱を入れて飼養するものであるが、之が構造は各自の任意でよい。養蜂舎で蜂を飼養する上に利益とすべき點は小面積の土地に多くの蜂群を置く事が出来る事と、風雨に際して蜂を取扱ふに便利な事と、寒暑を減する故に蜂を強壯にし、越冬を容易にする事と、貯蜜を多かきめる事等である。又不利益とすべき點もある。例へば蜂群に變があつた場合に其取扱が困難な事がある事と、巢箱の位置が接近して居る爲、盜蜂を生じ易い事と、

巢箱の位置を變更するに不便な事等である。

收蜜舎

之は蜜を採取して之を取扱ふ所で、二三十箱以上の養蜂を飼養するには一個の收蜜舎を設けて置く必要がある。其大きさは一間半に二間位で、窓は總て蜂が入る事の出来ぬ様に細かい金網で張り日當りのよくない所がよい。

第三節 養蜂の利益

養蜂の目的は蜜を採取する事と、蠟を採取する事等であるが、然らば如何程の利益を得るかと豫め知つて置く必要がある。

蜂蜜

は養蜂の植物の花から花蜜を採取し、之を蜜甕に入れて歸り醗酵素の媒介によつてインブエルト糖に變じたもので、又蔗糖色素、少量の遊離酸及び種々の花粉細胞を混合するものである。養蜂は新鮮なものならば透明な濃厚液で強い甘味を有して居る。色は種々あつて無色なもの、少し黄色を帯び

て居るもの、暗赤色を有して居るもの等があつて、純良なものは時日を経ると凝結して白色又は帯黄色の顆粒状となるものである。之を砂蜜といつて居る。之は華氏七十度以上の温度に逢ふと溶解して液体となるものである。蜜は如何に善良なものでも濁濁して居るもので純良なものならば夏季と雖も決して酸敗するものではない。蜂蜜の用途は從來咳嗽劑の外種々の薬品として用ゐられて来たが、將來は之を食用として用ゐる者益々多くなるであらう。現今蜜蜂を食用品の原料として用ゐて居るものも少くないが、殊にパン、ビスケット其他菓子類の精良なもの製するに蜂蜜を混用すると品質を良くするのみならず保存上にも利益がある。又上等の料理には砂糖を用ゐる代りに蜂蜜を用ゐる者が増加して来た。砂糖は人の胃の中に入つて葡萄糖に變形した後始めて同化するものであるから、之を過用すると消化器を害するが、蜂蜜は已に葡萄糖に變形して居るのであるから衛生上最も良いものである。殊に小兒の食料として最もよい。

あるから衛生上最も良いものである。殊に小兒の食料として最もよい。

蜜 蜂 之は養蜂の副産物ともいふべきもので、集脾の古くなつて用に適しないものとか、破壊したものとかが取つて之を溶融し滓を取つたものである。色は黄色で蠟と稱し、之を晒したものを白蠟といつて居る。用途は電気鍍金又は器具美術品の模型を取るに適し、晒したものは髪付油を製したり、薬用としたり、工業用として需用が頗る多い。

養蜂の利益 養蜂は其飼養の巧拙によつて其利益も亦多少あるが、米國の如きは一箱の蜂群より平均の收蜜少きは五六十升、多きは二百斤乃至三百斤を得て居る。日本種の蜜蜂でも一箱平均四五十斤を得る事は困難でない。此外分封によつて得る利益は又甚大なものである。今養蜂の收支及び其増殖の状況を示せば左の如くである。

第 一 年

蜂 巢 二 個 (種 蜂)

代金凡そ二十圓
調製費凡そ五圓
代金凡二十圓
代金凡七圓
金壹圓
金參圓
金五十六圓

▲支出合計 金五十六圓

以上の内分離器及び製蠟器、蜜刀其他の器具は第二年から第三年に至つて調製してもよいが、茲には養蜂の總資本となす爲に之を加へたものである。

▲收 入 無

第 二 年

蜂巢六個 (元巢二個、分封四個)
巢箱四個
調製費凡十圓
餌養費 金壹圓
蜜容器代其他 金四圓
▲支出合計 (本年度) 金十五圓

蜜 蜂 の 飼 養

▲支出累計

金七十一圓

▲收 入

金十二圓五十錢

▲收 入 目 代

之は分封を一箱より二個得んが爲收蜜を少くし、一個から二貫五百目宛收蜜する事とし、蜜は頗る低價に見積つて一貫目二圓五十錢としたものである。

▲差引 (本年度分)

二圓五十錢 (損)

▲差引累計

五十七圓五十錢 (損)

第 三 年

蜂巢十六個 (元巢六個、分封十個)
巢箱十個
調製費二十五圓
餌養費 金四圓
蜜容器代其他 金七圓
▲支出合計 (本年度) 金三十六圓
▲支出累計 金百七圓
蜜二十六貫目 金六十五圓
金一圓五十錢

蜜蜂の飼養

第五卷

▲ 収入合計 (本年度) 金六十六圓五十錢
 ▲ 差引 (本年度) 金三十圓五十錢 (利)
 ▲ 差引累計 金二十七圓 (損)

第四年

蜂巢三十二個 (元巢十六個分封十六個)
 巢箱十六個 調製費金四十圓
 古巢箱及器具修繕費 金八圓
 飼養費 金八圓
 蜜容器其代雜費 金十五圓
 ▲ 支出合計 (本年度) 金七十一圓
 ▲ 支出累計 金百七十八圓
 蜜七十二貫匁 金百八十圓
 收蜜元巢一箱四貫匁、分封秋蜜五百目宛、
 分封秋蜜五百目宛、
 金五圓
 ▲ 収入合計 (本年度) 金百八十五圓
 ▲ 差引 金百十四圓 (利)
 ▲ 差引累計 金八十七圓 (利)

第五年

蜂巢、三十二個 金十五圓
 古巢箱及器具修繕費 金十五圓
 飼養費 金三十圓
 蜜容器其他の雜費 金六十圓
 ▲ 支出合計 (本年度) 金二百三十八圓
 ▲ 支出累計 金四百圓
 蜜百六十貫匁 金四百圓
 收蜜一箱平均五貫宛とし、成る可く分封を防ぐ
 ものであるが、それでも十五個乃至二十個の分
 封を得る事となる。
 金八圓
 分封蜂群十五個賣却代 金百二十圓
 ▲ 収入合計 (本年度) 金五百二十八圓
 ▲ 差引 (本年度) 金四百六十八圓 (利)
 ▲ 差引累計 金五百五十五圓 (利)

第六年

蜜蜂の飼養

第五卷

蜂巢三十二個 金十圓
 古巢箱及器具修繕費 金十五圓
 飼養費 金二十圓
 蜜容器其他雜費 金四十五圓
 ▲ 支出合計 (本年度) 金二百八十三圓
 ▲ 支出累計 金四百七十二圓五十錢
 蜜百六十五貫匁 金八圓
 分封蜂群十五個賣却代 金百二十圓
 ▲ 収入合計 金五百四十圓五十錢
 ▲ 差引 (本年度) 金四百九十五圓五十錢 (利)
 ▲ 差引累計 金千五十圓五十錢 (利)

右の如く五六十圓の資金を支出して飼養した蜜蜂は
 六年後には千五十圓の利益となるのである。之は勿
 論努力を加へてないが、此位の養蜂なら努力として
 別に工夫を雇入れる必要なく副業としてなす事が出
 来るものである。之を一ヶ年に割り當てると約百五

十圓の利益となるのであるが、六年以後は管理及び
 飼養に熱達するから毎年五百圓位の利益を得る事は
 困難でない。

第四節 蜂群の組織

蜜蜂は數萬が集合して一家を組織し、互に相助け
 合ひて生活するもので、獨立して生活する事は出来
 ぬものである。そして其巢中の同族を失ふを欲せず、
 又他群の蜂が入つて来るのを許さぬものである。他
 群の蜂は見別けるのは鋭敏な嗅覺によるもので、他
 群の蜂が来て己の巢の中に入ると之を噛み殺すか、
 追ひ出して終ふものであるが、若し之を發見せずし
 て數時間を経過すると其嗅氣は同じくなつて見別け
 る事が出来ず、互に一致生活を營むに至るものであ
 る。又蜜が缺乏した場合の如きも全群巢を守つて同
 時に餓死するか、さもなれば一同熱議の上相率るて
 飛び去るもので、よく一致して運動をし相協力して

其事業に従事する性を有するものである。蜜蜂が其家を愛する念の強い事も亦甚だしいもので、若し己れの家に害を加へんとするものがある時に死を以て之を防ぎ、一家内の一蜂が餓ゆる時は他蜂は其蜜甕にある蜜を舌より舌に傳へて與へ、一蜂を殺すが如き事あれば忽ち多くの蜂の怒りを招くものである。清潔を好む事も亦蜜蜂の特性で、巣箱の内に死んだ蜂がある場合には直ちに之を撤去して遠くへ棄て塵埃等がある場合にも亦之を棄てるものである。それから蜜蜂として最もよく行はれて居るものは分業である。野外出で、労働に従事する者、巢内にあつて各事業を執る者等あつて而かも錯雑せず、實に整然たるものである。又巣箱を移轉した場合の如き、蜜蜂が初めて外出するには決して直に飛び去る様な事はない。先づ巢を出で、其位置をよく見定めて徐々に飛び上り後飛び去るから、歸つて來て巢の在所を失ふが如き事はない。次に蜂群には蜂王、働蜂、

雄蜂の三種がある。そして是等の蜂は各々特殊の任務と性質とを有して居る。

一、蜂王

蜂群には必ず一匹の王がある。之は全群中で最もよく發達した雌蜂で、其形大きく長さは七分内外で尾は太つて長く、翅は短くて腹の第四節の處までしかなく、鬚針は曲つて居て他物を整す事はないが、他の王と争ふ場合には之を用ゐるのである。蜂群中に此王がなくなると遂に其蜂群は絶滅するものがある。此蜂王を一名女王ともいつて居る。

王臺 といふのは蜂王を産出するに要する産卵所で、春季に入りて百花の開く頃となれば蜂王は盛んに産卵して蜂群繁盛し、分封の必要を生ずるので、働蜂は蜂王を生し出せんとして數個の王臺を建設し、蜂王は之に産卵するのである。王臺は一期五六個乃至十個位で、種類によつては數十個を建設する

事がある。王臺の卵は一定の時日を経て孵化し蜂王となつて出房するのである。孵化して出房した蜂王は暫時にして勢力を増し直ちに他の王臺を搜索して之を毀たんとする念が盛であるが、蜂群が多くて分封するに足るべき蜂数がある時は働蜂はよく王臺を守つて蜂王の近づくを追ひ、又蜂群が分封する意のない時、又は分封するに足る丈の蜂数がない時とか、外界の事情で分封する事が出来ずして數日を経過する時は蜂王は他の王臺を破壊して其中にある王兒を噛み殺し、又出房した蜂王がある時は互に争つて遂に一王は斃れるものである。

蜂王の交尾

蜂王の職務は常に巢の内にあつて産卵するのが本務である。然らば蜂王は如何にして交尾するかといふに、之は蜂王が王臺から生れて後六七日乃至十四五日の間で、蜂王は他に蜂王の出房すべき王臺のない時は早く交尾し、他に王臺があつて蜂王の生出する憂れひがある時は其憂ひなきに至

つて交尾するから自然に交尾が遅れるものである。交尾は天氣がよく晴れて他巢の雄蜂が外出盛んな時に蜂王も巢門を出で、徐々と飛上り空中で交尾するものである。巢外に出て歸つた時、蜂王の尾端に白い糸の如きものが着いて居るのは交尾した徴である。若し外出しても交尾する事が出来ぬ場合には毎日外出するものであるが、一度交尾して産卵を始めれば再び交尾する事をせぬ。そして交尾は自己の巢の雄蜂とするのではなく他群の雄蜂と交尾するのである。之は同族の交接の弊を避ける爲で自然の妙である。それから蜂王が交尾せずに産卵すると雄卵のみを産み、又蜂王が老いて精液が盡きると雄卵のみを産するものである。

蜂王の産卵

は其頭を空房の中に入れ、雄蜂なるか、働蜂なるかを確かめ、二三秒時を経て卵を放下するのであるが、巢脾の中央部に卵を産み、漸次圓形に産卵して進み行くものである。産卵數の多

少は、働蜂の花蜜採取の多少に伴ふもので、春は産卵最も多く、秋之に次ぎ夏は少なく、冬は停止するものである。産卵の最も多いものになると一日三千以上の卵を産むといふ事である。而して一巢房に必ず一個を産卵するものであるが、時には産卵力が盛んで一個の巢房に二三個を産む事もある。産卵力の最も盛んなのは出生してから第一年、第二年で、三年目になると衰へるものである。野に花の多い時は働蜂の必要あるを以て雌卵を産んで、働蜂を産出し、分封前になると新蜂王交尾の必要上雄卵を産むものである。

蜂王の老衰及び壽命 蜂王が老衰して産卵を停止する頃に至れば、働蜂は新たに蜂王を生ぜんと企てるもので、又働蜂が頻りに労働して花蜜を運んでも巢房内に産卵のないのは其蜂王が老衰したものである。蜂王の壽命は通常四年位であるが、其巢は容易に滅びずに順次新蜂王が相續するものである。

た場合には雄蜂を出生するものである。而し中には偶々働蜂でも産卵する事がある。之は前の如き場合と、それから蜂王があつても其蜂王が餘り久しく交尾しなかつたとか、産卵しない場合とか、老いた働蜂とかの場合である。

働蜂の職務 として花蜜の採取を初めとして蠟の分泌、巢脾の造營、幼兒の養育、害敵の防禦等、働蜂の老蜂は花蜜の採取、外害の防禦等に從事し、幼蜂は蠟の分泌、巢脾の造營、幼兒の養育、蜂王の侍衛等を主としてなすものであるらしい。働蜂の飛行力は頗る強く、花粉や花蜜を採取せんとして飛行する速力は平均四分二十秒で一里の遠きに達し、花粉を採取する爲に労働する時間は約三十分内外であると或る實驗者は云つて居る。

働蜂の壽命 働蜂の幼蜂は其色が灰黄色で老ゆるに従つて暗褐色となり、自然に光澤を生ずるものである。働蜂が巢から出たばかりの時は巢外

から管理さへ良ければ永久に持續するものである。蜂王が衰へると大抵自ら巢外に出て死亡するか又は巢内に斃れるか、働蜂に殺されるか、新蜂王と闘つて斃れるかするものである。

二、働 蜂

働蜂は群中最も多数を占めて居る蜂で、一萬乃至數萬を有する。其體軀は小さくして長さは凡そ五分位で、翅は長くして尾の後端に達して居る。其数は春季に多く繁殖し分封前には最も多数である。

働蜂の繁殖と産卵 働蜂の生出は花の多少に伴ふもので、野に花が多ければ働蜂は多くの蜜を採取するから従つて蜂王の産卵を促し、蜂王の産卵が多ければ働蜂が多く生れる事になる。蜂王は年内に數個の王兒の卵を産む外は多く働蜂を産むものである。働蜂は不完全の女性で、蜂王の完全な時は殆んど産卵する事がない。若し蜂王を亡失し

に出ず、大抵六七日後に至つて外出するものである。幼蜂が初めて外出するのは晴れた温い日で多くの幼蜂が一時に出て數十分間甚だ騒ぐものである。而して野外の労働に従事するのは生れてから十六七日の後で、それから以後は死ぬまで益々働くものである。壽命は四五十日以上を有し、労働の少い時は五六ヶ月の壽命を保つ事もある。巢脾を造營する爲に蠟の分泌が多い時は壽命が短く、採蜜のみに従事する時は比較的壽命が長いものである。死亡する場合には大抵巢外で死し、冬季巢内で餓死する時は相重つて巢内で斃れるか、其頭を巢房内に入れて斃れるものである。

三、雄 蜂

雄蜂は働蜂より少し大きく、翅は長く、頗る丈夫である。尾端は圓くて螫針なく、舉動は働蜂の如く敏捷でなく、常に大食して遊惰に日を送り、暖

かい頃を撰んで空に飛遊するものであるが、飛ぶ時の聲は高いから直に他の蜜蜂と區別する事が出来る。雄蜂は分封の頃に生れるもので、四五月の頃が最も多く、冬季は一つもなくなるのを普通として居る。即ち雄蜂は必要な時期にばかり生ずるもので其時期に至れば一群中に數百乃至數千の雄蜂が出来るものである。

雄蜂の職務

は即ち晴天の日に巢外に出で、空中に飛遊し、新蜂王と交尾する任務を有して居る。そして交尾すれば雄蜂の生殖器は脱出して直に死するものである。一疋の蜂王に交尾するのは一疋の雄蜂であるが、多數の雄蜂を生出すのは蜂王の交尾を遂げるに便宜ある様にしたものである。それから雄蜂は蜂兒に生育に温度を與へたり、分封を促進したりするものである。

雄蜂の壽命

雄蜂は新蜂王と交尾すれば直に死するものであるが、交尾する雄蜂は極めて少數で、

蛆を以てすれば蜂王となつて生れるものである。又蜂王が亡失した時は、働蜂は働蜂房を王臺に改造し、王の食餌を以て養ひ蜂王とする事もある。次に雄卵は雄蜂となつて生れるもので、之は食餌の關係はない。

蜂兒の變態

蜂の卵は長さ六厘六毛、厚さ一厘位で、化して蛆となれば働蜂によりて哺育せられ、稍長するに至れば蠟蓋を以て房口を覆ひ、蛆は糸を吐いて自ら體を繭で包むものである。此時蜂王の繭は半繭で後體は遊離して居る。次に繭の内で蛹に化し、小房内に水平となつて横はり、蜂王の蛆は垂直になつて蛹となるのである。而して其變態の日數を示せば

卵	蛆	休眠	蛹	計	
蜂王	三日	六日	二日	五日	十六日
働蜂	三日	六日	三日	九日	廿一日
雄蜂	三日	七日	三日	十一日	廿四日

其他の者は如何なるかといふに、生後二三月前後で衰弱し、遂に死するものと、働蜂の爲に噛み殺されて死すものである。偶々冬季に至つても雄蜂が巢内に残つて居る事があるのは、蜜が饑かで働蜂の採蜜に忙はしく、無用の雄蜂を驅殺する暇がない爲とか、蜂王が働蜂房に一二の雄卵を生んだとかに依るものであるが、春に入るや否や悉く殺されて了ふものである。

四、蜂 兒

雌卵と雄卵 蜜蜂の蜂王及び働蜂は同一の雌卵から生ずるもので、孵化後之を養ふ食物によつて蜂王ともなり、働蜂ともなるものである。而して自然の儘にして置くと雌卵で蜂王となるのは、一年間に數個乃至十數個で、他は悉く働蜂となるのである。若し蜂王が亡失した場合に人爲を以て王臺中にある幼蛆を取り去つて之に換ふるに、働蜂房内の最小幼

右の如くである。而し其巢内の境遇、氣候等の關係で多少の差異を見る事は免れない。

蜂兒の食物

は蜂王、働蜂は自ら異つて居る蜂王の蛆に與ふる食物は窒素質及び脂肪質に富む乳白色の多少酸味を有するもので、働蜂の頭部の唾腺から分泌するものである。働蜂の蛆及び雄蜂の蛆は孵化後三日間は蜂王蛆と同質の食物で養育せられるが、蜂王蛆に與へるものは濃厚にして其量多く、他の蛆に與へるものは淡くして量が少ない。即ち此三日内ならば、働蜂の蛆を王臺内に入れて蜂王とする事が出来る。三日後に至れば、働蜂蛆は前記の分泌物に花粉を加へて與へ、日を経るに従つて花粉の量を多くし、少量の蜜及び水を加へ、終には全く花粉と蜜と水の混合物となり、雄蜂蛆に與へるものは働蜂蛆に與へるものよりも花粉の割合を多くするものである。

第五節 分封と集脾

一、分封

分封といふのは一蜂王が一部の蜂群を率ゐて其巢を出で、他に新しい巢を設ける事である。最初の分封は母王が其巢を新王に譲つて出で、第二回の分封からは新王が母王に譲つて出るものである。分封する場合は蜂数は種類と境遇によつて一定しないが、大抵働蜂五千疋乃至一萬五千疋、雄蜂五千疋乃至三百疋を率ゐて分離するものである。分封する場合には被蓋せられた王蜂の幼蟲の蓋を敲き、若し中から應じない時は顎を以て蜂王房の蓋を開いて新蜂王を引き出し、之に續いて第二、第三に被蓋せられた蜂王は一種の響きを發するもので、自由な王蜂は其響音が清明爽快であるが、未だ幼弱で分離する力のない者に對しては母王は各王蜂房に至り其無

刺を咬み破り、蛆を鑿針で刺殺するのである。之に反し若し十分分封し得る場合には母王は之を保護して王蜂房に穿つた小さい孔から食物を給するのである。そして第一の分封が行はれた後六七日乃至八九日又更に一群を率ゐて分離するもので、此時は三千乃至一萬の働蜂と、二百乃至四百の雄蜂とを率ゐるのである。そして第三回は第二回目の二三日乃至四五日後に行はれるのが普通である。第一回の分封は蜂数多く、既に受精した王蜂を有して居るか直に産卵を初めるものである。蜂群の將に分封せんとする場合には舊巢の周圍を二三回周翔し、又樹枝等に群集して斥候蜂が適當なる居所を探し出すか又は養蜂者が蜂群を捕へて新巢に移すかする迄待つて居るもので、此時に若し王蜂が死ぬ様な事があれば皆飛散して舊巢に歸るものである。

分封の原因 蜂群中の一蜂王は産卵が職務で、若し産卵力が少くなれば全蜂群を御する事が出来な

くなつて働蜂は其蜂王に満足せず、更に蜂王を生ぜんとして王臺を建設するのである。働蜂は春期に至れば花粉及び花蜜を採取する事多く、蜂王は産卵を増加するもので、其産卵は常に働蜂房に産卵するを好み、働蜂も亦蜂王の意を迎ふる爲に、且つ蜂群の繁榮を圖る爲に働蜂房を造つて之に供するものである。然しながら野に花を盡さざる限りは働蜂の勞働は殆んど無限で、蜂王の産卵力には限りがある。それで働蜂は遂に働蜂房を造る必要なきに至り、茲に雄蜂房を造り、蜂王は之に雄蜂卵を産み、一方前に述べた如く王臺をも建設し、働蜂の繁殖益々盛んとなり、やがて王臺から蜂王が出房せんとする頃に至れば分封を起すのである。而して蜂王の産卵力と分封との關係は「一」蜂王の産卵力盛んな時は蜂群の多數なる割に晩く分封し、蜂王の産卵力が弱い時は早く分封するものである。「二」蜂王の産卵力が強ければ第一の分封の蜂群が大で、産

卵力が弱い時は小さいものである。「三」蜂王の産卵力が強ければ第一の分封と次の分封との間の日数が多く、産卵力が弱ければ其間の日数は割合に少ないものである。

分封の時期 は大抵四月中旬より六月中旬迄で、紀州九州の如き暖地では早く、信州地方の寒地では晩く分封する。春季分封した強盛な第一の分封から再び分封するのを孫分れといつて大抵七月頃分封するものである。分封の時刻は午前二時頃迄に起るを通例とし、今日分封すべきものが雨天其他の障害があつて延期したものは明日の午前八時頃から分封を初めるものである。又天候の都合で午後四時頃に分封する事もある。若し分封中俄かに天候悪しくなれば中止して巢箱内に引き込む事がある。

自動分封 といふのは分封した蜂群を外に盡くせしめずに直ちに新巢箱に自然に入らしむるもので、之を爲さしめるには隔王板で製した器具を以て

分封すべき巣箱の巢門と新巣箱の巢門とを聯絡せしめ、之を分封前に装置すると、分封するに當り働蜂は多く出で、飛遊するが、蜂王は出る事が出来ず、出口を捜して遂に新巣箱に移るものである。さうすれば飛遊して居た働蜂は前後の口から隔王板を越えて入るから毫も人の手を要しない。而し之は日本種の蜂には適しない場合もある。

強制分封 之は人為を以て強ひて自然の分封を爲さしめるもので、之を爲すには強盛な蜂群の未だ蜂の王臺を建設しないものを取つて蜂王を抜き去るのであるが、時期は自然に王臺を建設すべき時で其巢脾には貯蜜が多量で蜂兒蜂卵を有する事多く、且つ其巣箱若しくは其近傍の巣箱に於て雄蜂の生出すべき見込のある時でなければならぬ。斯くの如くにして蜂王を抜き去る時は働蜂は蜂王がないから直ちに王臺を設け蜂働卵を蜂王に變化するもので、同時に數個の王臺を造るものである。そして蜂王を取

り去つてから十四五日を経て自然に分封を起すのである。而しかうして生出せしめた蜂王は弱小な蜂王を生じ、且つ働蜂の繁殖を幾分減せしめる憂ひがある。

分封の合同 二個以上の巣箱から時を同じうして分封する場合には、相合同する事が多いものである。そして働蜂は相争闘して蜂王は無くなる事があるものである。之を救済するには如何にせばよいかといふに、分封屋根に蓋を始めた後、全く蓋をするに至らぬ内に之を取つて少しく隔つた場所に移し、他の分封屋根を持つて來て其所に移し、斯くの如くして二三回行ひ、蜂王を見付けて之を取れば、蜂群は蜂王のないのを知つて各々其元巢に歸るものである。又合同した分封を其儘巣箱に移すと蜂王は相争闘して他は斃れ一王の所有に歸するから非常に多數の蜂群となるものであるが、若し二王のある内に之を分離せんとせば、分封を入るべき様に装置し

た巣箱二個を東西に相對せしめ、日光を均一に巢門に當る様にし、其中央に蜂の蓋を振り落とすと蜂は東西に分れて入つたり、巣箱の上に攀ち上つたりするが、大抵蜂王は兩箱に分れて入るものである。此時は蜂群を兩方共同數位に入れる様に注意するを要する。又蓋中に二個の蜂王を捜索して捕へ、各々蜂王籠に入れて置いて、蜂群を各巣箱に平均に入れて後蜂王を放つと確實である。又一分封の起つた時、他の巣箱から又分封が起るとする時は、如露の如きもので水を其巣箱の近傍に撒布すると一時分封を中止し、外出した蜂は皆巢内に引き込むものである。一方前の分封を所置すれば、合同を避ける事が出来る。又一分封の蓋をした時、他の分封が之に接近する状況があつたら成る可く早く其蓋を所置するがよい。

人工分封 之は蜂が自然に分封する迄待つて居ないで人為を以て分封せしめる事で、前に述べた強

制分封とも異つたものである。人工分封は自然分封よりは養蜂上幾多の利益あるものであるが、之が技術はよく熟練せねば却つて不利益となるものである。人工分封上に就いて注意すべき點は【一】人工分封を行ふべきものは蜂群が盛んで蜂卵蜂兒を多く有し、貯蜜の多いものでなければならぬ。【二】野に未だ花があつて分封した蜂群の貯蜜を爲すに十分時日がある時行はねばならぬ。【三】分封すべきものは蜂王を與ふるを得るか、さもなければ直に蜂王を生出すべき境遇を與へねばならぬ。蜂王は交尾を遂げたものがよい。王臺は最も成熟したものがよい。【四】交尾前の蜂王か又は王臺のみを與へて分封せしむる場合には必ず其蜂群又は養蜂場内何れの蜂群でも雄蜂の生出あるを要する。若し雄蜂がない時は蜂王は交尾を遂げる事が出来ないで亡失するものである。【五】人工分封をしてから後に分封を欲しないものは例へ王臺があつても其不用なものは悉く取り

去らねばならぬ。さうしないと自然分封する事があ
る。【六】蜂群を分割して二日以上を経て互に敵意
を生じて相混入するを許さぬものである。【七】蜂群
を分割する時、蜂王のあるのは静かでないものは騒
ぎ、蜂王あるものを近くへ置く時は之に集合するも
のであるから、此場合には遠く離して有王蜂群を一
時幽閉し、後無王群を幽閉し之に蜂王を與へるがよ
い。【八】蜂群を分離して其一群を他に移すと老壯の
蜂は舊位置の巣箱に集まるものである。故に此場合
には成る可く十五町以上の地に移さねばならぬ。【方
法】としては種々あるが、先づ新しい巣箱に空巢
脾三四枚を入れ、若し空巢脾がないときは巢脾を裝
附した巣箱を入れてもよい。次に又之に貯蜜ある巢
脾一枚を入れ、其巢脾には必ず蜂兒蜂卵をない様に
する。之を巢框の一方に片寄せ、最後に分割板を入
れ、巢框の入つた方は假りに蓋をして空方を開き、
巢門を金網で塞ぎ、快晴の日の午前之を分封すべ

き元巢箱の傍らに持つて行き、元巢に箱を少し蒸煙
し、之を開いて巢脾框を引き出し、働蜂を新巢箱
の空所に振り落して巢脾は元巢に戻すのである。
さうすれば振り落された蜂は分割板を潜つて巢脾の
ある方に入るものである。かうして蜂群の二分の一
又は三分の一を新巢箱に移して蓋をするのである
が、此際蜂王を新巢箱に落さぬ様にせねばならぬ。
新巢箱は涼しい暗い室内に移し、夕刻に至つて蜂王
を入れるのである。之を入れるには巢箱の蓋を少し
開き蜂の飛び出ない様に速に入れて、翌朝之を十
五町以上の場所に移して巢門を開くか、又は其儘三
四日間幽閉して夕刻出し巢門を開くかするのであ
る。新巢箱に移すべき働蜂は成る可く巢箱中から
取るのがよい。之は繼箱の中から取るよりは幼蜂が
多く、幼蜂が多ければ蜂王を受け入れ易く、又新位
置に満足し易いからである。右の分封は蜂群を強大
ならしめて直に收蜜に適するものであるが、若し收

蜜の目的でなく、蜂群の増加を欲するならば、蜂群
の自然分封を爲さんとして盛熟した王臺あるものは
其王臺ある巢脾及び他の三四枚の巢脾と之に附着せ
る働蜂とを分割して新巢箱に移し、蜂王ある蜂群
ならば一巢箱は蜂王を残留するから王臺の必要はな
いが、若し蜂王がないものであるなら勿論共に完全
な王臺一個を有しなればならぬ。そして必要のな
い王臺は之を取去るがよい。又王臺のないものでも
之を分割して蜂王のない群には他の蜂王を與へれば
よい。かうして強大な一個の蜂群は之を分割して二
個乃至四個の蜂群とする事が出来る。如何に強盛な
蜂群でも四個以上に分割してはならぬ。
分封の豫防 蜂群を自然の分封に任せて置くと
蜂群が衰弱したり、採蜜量を減少したりするもので
あるから、蜜を多く得んとするには其分封を多くす
るよりは寧ろ蜂群の強盛を圖らねばならぬ。之れは
分封を或る程度に制限する必要がある。然らば如何

にせば之を豫防し得るかといふに、蜂が王臺を建設
した時は四五日毎に之を切り去るのも一方法である
が、之は至難の業で、甚だ時間と手数とを要するも
のである。巢箱内に蜂群が充滿すれば分封を促かす
ものであるから、蜂が分封の念を起さない以前に巢
箱内に多くの空所を生ぜしむる事は分封を豫防する
一方法である。又繼箱を重ねるのもよい。又王臺が
成熟して將に分封せんとするに至らば蜂王を取り去
つて一個の完全な王臺を残し、他は悉く摘去すると
分封を豫防する事が出来る。次に巢箱には成る可く
早く繼箱を載せ、蜂が分封の念を起すに際し、他の
新巢箱に空巢脾又は巢礎を裝附した巢框五六枚を入
れ、分封を豫防せんとする巢箱の傍らに持つて行き、
巢箱の胴を他に移し、新巢箱の胴を其跡に置き舊巢
箱内から蜂兒の少ない巢脾一二枚と蜂兒蜂卵のない
巢脾一二枚とを取つて蜂の附着した儘新巢箱に移し
同時に蜂王をも新巢箱に入れ、上に隔王板を載せ、

糞箱を置き、上に新聞紙其他の被物を被ひて其一方
 巢門のある方を被物を少くして二三分の隙を造り、
 其上に舊巢箱の胴を、働蜂及び巢脾の入つたまま重
 ねるのである。若し此際王臺があつたら取り去り、又
 其中に雄蜂房が多い時は其雄蜂が出房して外遊し得
 る様舊巢箱の胴を載せる時適宜の方法で二三分の隙
 を造つて置くがよい。かうして十日位を経て舊巢箱
 を検し、王臺があつたら之を破壊し、又糞箱内に巢
 脾が充滿したら更に新糞箱を重ねて置くのである。
 二十一日後になれば舊巢箱内の蜂兒は總て出房する
 から残蜂は皆下の巢箱に追込み、其巢脾は之を下の
 巢箱の末だ巢脾を造營せないものがあつたら之を取
 換へて入るか他の蜂群に與へるかすれば分封を防止
 すると共に貯蜜を多からしめるものである。次に一
 二回の分封が終つて以後分封を防止しようとするに
 は巢脾を検して残つて居る王臺を取るか、又は第一
 二分封を爲すに當つて其分封をした新蜂を元巢の位

置に置き、元巢を他の新位置に移し、糞箱のあるも
 のは之を元巢から取つて新蜂群に與へれば分封を
 する事は稀れである。それから本年分封した蜂群か
 ら更に分封せしめる事は絶対に之を防止せねばなら
 ぬ。之は種々の點に於て不利益となるものである。
 分封後 分封の際には蜂は皆十分に蜜を啣んで
 元巢を出でるから二三日中は食に差支ない。しかし
 直に労働に従事し、巢脾を造營しても若し数日の間
 雨天で蜂が外出する事が出来ぬ時は食餌を給さねば
 ならぬ。殊に人工分封を行ふ時は豫め其用意をし
 蜜貯ある巢脾一二枚を入れて置くがよい。それから
 數個の分封が終りを告げし時は其元巢を第一分封と
 の全巢脾を交換する事は甚だ利益である。此場合に
 は先づ甲箱から全巢脾の半數を引出して悉く蜂を掃
 ひ去り、之を乙箱に與へ、乙箱から又全巢脾の半數
 を取つて蜂を掃ひ去り、之を甲箱に與へるのである。
 かうして半日以上を経過して又前の如く半數を交換

するのがよい。此際は不用の雄蜂房等は切り取り巢
 脾を整へてやらねばならぬ。

二、巢脾

巢脾は正六角の房から成つて居て、頗る巧妙なも
 のである。そして之が造營は二三日中に皿大の巢脾
 數枚を造り、強盛な蜂群は一日に四千の巢房を造る
 事は珍らしくない。巢脾は上から縦に幾枚も下垂し
 て並列せらるゝものである。巢脾は兩面に房があつ
 て、其房底は前後兩房の共有となり、各房の底は三
 角錐形を爲し、前面の一房底は後面の三房底に接し、
 前房の中心は後面三房の柱となるものである。其房
 形は正六角であるから數多の巢房中一個と雖も空地
 を生じない様に出来て居る。巢脾の上部で常に蜜を
 貯へる所は幾分か上方に向つて居て、液體を容れる
 に便なる様に出来て居る。巢脾は一貫目の蜜を貯ふ
 るに僅か十四五乃至二十一二の蠟を以て造り得

るものである。巢脾の厚さは前後の房を合せて働
 蜂の巢房は七分五厘内外、雄蜂の巢房は九分内外で
 巢脾と巢脾との間は三分乃至四分内外で、此所を蜂
 が往復する路として置くのである。

蠟 之は巢脾を造る原料となるもので、蜂の温
 度を保持し巢房中に貯へた蜜の凝結を防ぐに最も適
 して居る。此の臘は蜜蜂が如何にして得るかといふ
 に、蜂の下腹部にある蠟盤から出るもので、蠟盤は
 下腹部の第二より第五に至る四個の關節左右にあつ
 て其數八個を有し、四んで居る透明な膜から成つて
 居る腹輪で被はれ、其下に蠟腺があつて之れから分
 泌せられ、蠟盤に出て固結し同時に八枚となるもの
 であるが、其大きさは大抵五厘位の薄い鱗状と爲し
 て居る。而して其鱗状になつた蠟を脚で抜き取り、
 之を口に含んで唾液を加へ巢内の温度によつて柔か
 にし巢脾を造るものである。此蠟は蜜から化成した
 もので蜜七斤乃至二十斤から蠟一斤を製し得るを常

として居る。又蜂は古い巢脾から得た蠟を以て巢を造ることがある。新しい蠟で造つた巢脾は白色又は微黄色であるが、古巢の蠟を用いた時は黄褐色を帯びて居るものである。而し巢脾は蜂が使用するに従つて漸次暗色を呈するに至るものである。

樹脂 は蜜蜂が巢を造るに必要なもので、種々の樹木から採取するのである。之は巢脾の堅固を要する部分に用ゐる、多くは巢の天井に附着する部分に用ゐるとか巢箱の孔を塞ぐに用ゐるとかするものである。

巢房 之は働蜂と雄蜂とは其大きさを異にし、働蜂の巢房は径一分六厘乃至一分八厘位で、雄蜂の巢房は径一分九厘乃至二分三厘位ある。雄蜂房は多く分封前に造るを常とし、若しさうでない場合には不完全なる蜂王を有する時か無王の場合に造るものである。貯蜜に要する巢房は多く、働蜂又は雄蜂の巢房の空虚なるものを以て之に充てるが常である。

で、花粉は窒素物を多量に含有して居るから蜂兒には最も必要なものである。而し成蜂も亦幾分之を食するものである。

水 は蜜の濃厚を適度ならしめたり、結晶した糖分を溶解したり、巢箱内の乾燥を防いだり、幼兒の食物を調和するに用ゐるたりするもので、蜂は此水の必要を生じた時は井邊又は河邊に至つて之を吸収して巢内に運ぶものであるが、之を貯藏して置く事はしない。

第七節 養蜂上の器具

巢箱 養蜂上には是非共なくてはならぬものは巢箱である。養蜂の成功する否とは此巢箱の善悪に關係する事が多いものであるから、養蜂者は十分之に意を注がねばならぬ。之には如何なる注意が必要かといふに第一は夏は涼しく冬は暖かく氣候の急變に感ずる事が少ない様にする事である。第二は巢箱の

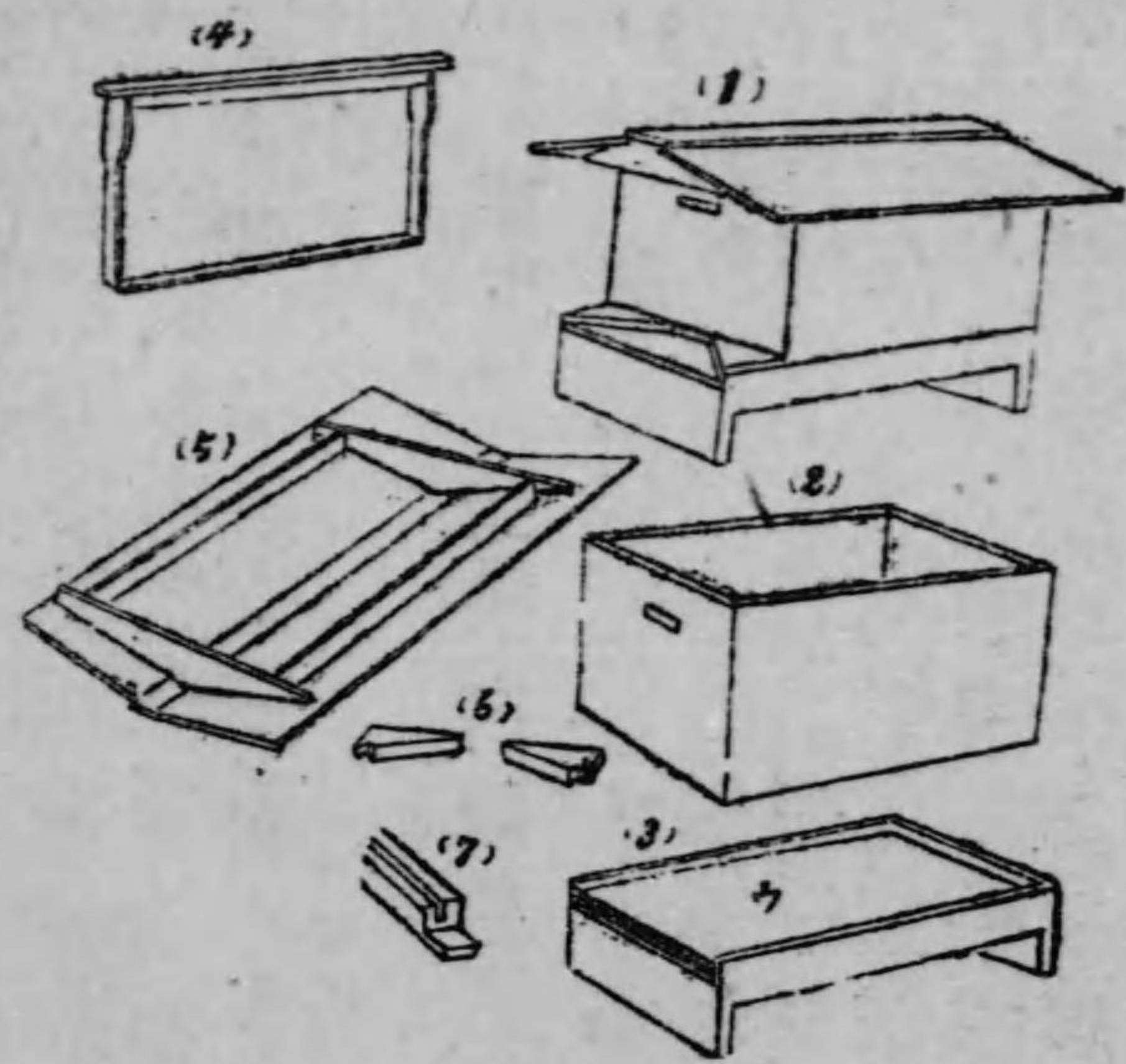
時には特に貯蜜房を造る事がある。王臺は他の巢房と全く異り、其口は下向きで形は初め壺形で漸次大きくなるに従つて乳房の如き形をなすものである。径は三四分位で長さは六七分位を普通として居る。王臺は日本種の蜜蜂は巢脾の下端に造り、サイブリアン種は巢脾の側面下方に造るを普通として居る。王臺は蜂王が出房すれば漸次破壊するものである。次に蜜蜂の巢脾は横向に出来て居るのは蜜を貯ふるに便利な爲である。

第六節 蜜蜂の食物

花蜜 は花の開いた節自然に分泌する甘い液で蜂は其液を吸収して腹内の蜜囊に入れ、化學的の變化を起して葡萄糖となし箱房中に吐き出すものである。此蜜は即ち蜂蜜の第一食料で、開花の時節に之を多量に採取して巢房内に貯へ置くものである。

花粉 は蜜蜂の幼兒を養育する爲に用ゐるもの

上方から日光が射入つたり、風が通つたりする事がない様にする事である。第三は巢箱内には濕氣がない様に常に乾燥してある様にする事である。第四は底板の掃除をする時や其他の取扱をする時蜂に振動を與へぬ様にし、且つ簡便迅速に爲し得る様な巢箱でなければならぬ。第五は巢門は下方にし、之を廣くしたり、狭くしたりする事が自由に出来る様にせねばならぬ。第六は製作方を正確にし、蜂が巢内の温度を保持し易い様にせねばならぬ。今左に巢箱の一例を掲げて見よう。圖に掲げた(1)は巢箱全體を装置したもので屋外の飼養に適するものである。木材は杉が最もよい。そして成るべく古材を用ゐるがよい。(2)は胴で蓋も底もないものである。内圍で一尺二寸位、長さ一尺五寸位、高さは八寸で、板の厚さは正六分がよい。そして前後の上邊内側の廣さ三分、深さ五分丈切下げて之に框受を附ける。框受はブリキ板を折り曲けて製し、胴の板を切り下けた内

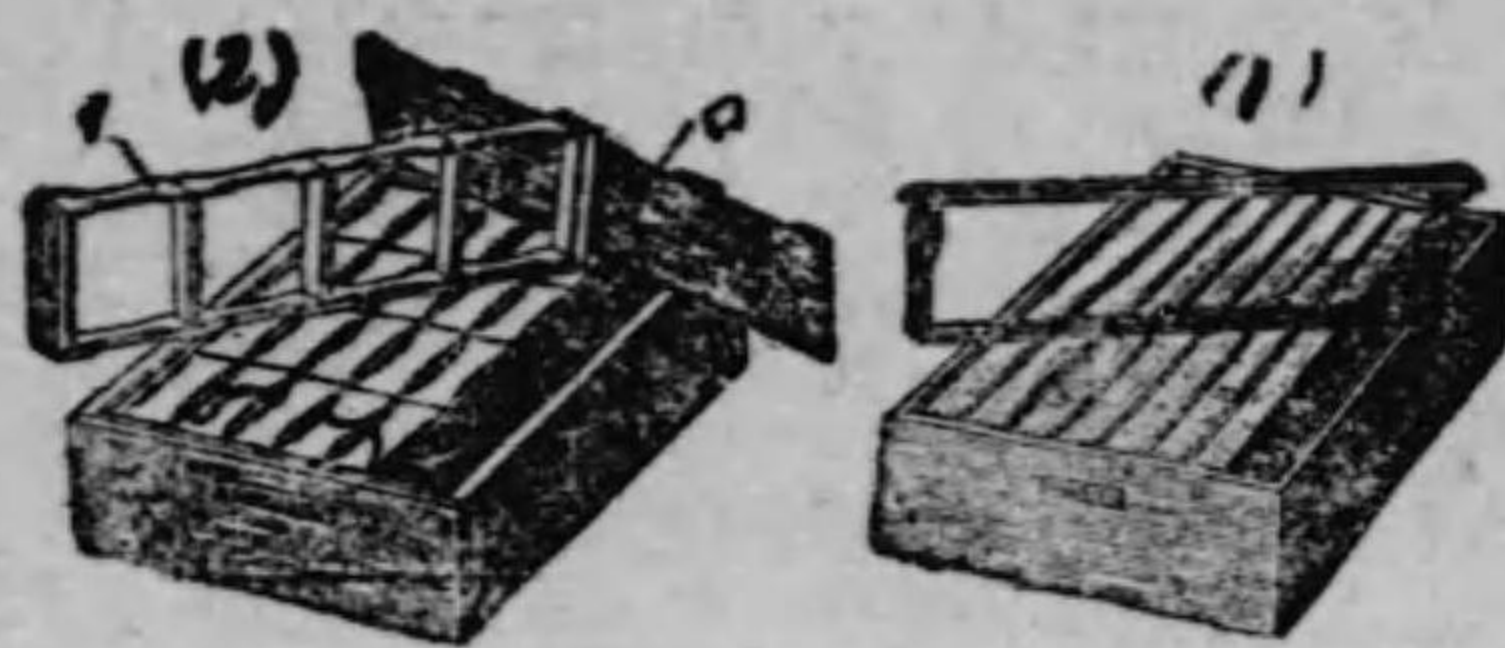


側で二分の凸起を爲して居る(3)は臺で高さ五寸、廣さは胴の外面と同じく、長さは胴よりも二寸五分位長くして前方に出る。之は蜂の出入する縁となるのである。そして三方の縁は三分づゝ高くして前方の

み開け、胴を載せて三分の間隙を作り蜂の出入口とするのである。尙(ウ)の底板は前方に引出し得る様に兩側に溝を作つて挿入するのであるが、之は臺を掃除するに便なるが爲である。臺も總て正六分板がよい。(4)は巢框で巢箱の中に入れて巢脾を造營せしめるものである。高さは七寸八分、長さ一尺四寸八分、上縁は長さ一尺五寸八分、厚さ七分、巾九分の角木で作る、其兩端を厚さ三分に切り之に兩側の縁を打ち付五分づゝ出して巢箱に入れて胴の上邊に掛ける様にする。尙上縁の下方には(7)の如く中央に巾一分深さ二分位の小さな溝を造り、之に巢礎の端を入れて固着する爲にするのである。兩側の縁は上部を二寸許りの間を廣くし巾一寸一分位とし、下部は八分二三厘位にする。下縁は巾六分とし、其兩側の縁と下縁とは正六分の板で造るのである。而して日本種の如き巢脾の弱いものは縦に二條、横に一條の細い針線を框の中心に張るのがよい。此框は一巢箱

に八枚位入れるのであるが巢箱が大きければ十枚乃至十二三枚を入れてもよい。(5)は蓋で全體の廣さ一尺六七寸、長さ二尺三四寸の屋根形とし、板の厚さは正四五分で内部は圖の如く四方に棧を打ちて胴に嵌る様にするのである。(6)は巢箱の前方、臺の上に兩側へ置いて巢門を作るもので、厚さは七分位、二寸五分、四寸四分、五寸一分の不等邊三角形で一角の所を圖の如く切り取つて臺の縁に掛る様にする。巢門の廣さは普通二寸六分位がよい。次に此巢箱を地上に置くには煉瓦か石の様なものを据ゑ、其上に臺を置き胴を載せ、其中に巢框を入れ其上に新聞紙か紗か綿布を被ひて蓋をし、前方の兩側に三角板を置けばそれで巢箱は整ふ事になる。此外に分割板を用ふると便利である。之は巢框と同形で其面は平板で張り、蜂群の未だ多くならぬ時に巢框の最終に此板を入れて置くと巢脾と巢框の全面に造營する事が出来るのみならず蜂群を新しい巢箱に振り落す時

便利なものである。右は屋外飼養の場合に用ふべき巢箱であるが、屋内の飼養に用ふる巢箱は胴及び巢箱は前者と同様で、臺は脚なく底板は前方のみならず後方にも引き抜ける様にし、又表裏何れも使はれる様にする。蓋は平面の板に兩側に棧を付し胴に嵌める様にすればよい。
繼箱 は即ち巢箱の上に重ねて置く箱で、之には分離用の繼箱と巢蜜用の繼箱とある。何れも普通巢箱の胴の高さの半分丈の高さで、之に用ふる巢框も巢箱に用ふるもの、半分の高さである。此所に掲げた(1)は分離用の繼箱で、(2)は巢蜜用の繼箱である。巢蜜用繼箱の胴は其大きさは巢蜜用のものと同様であるが、上部には巢框を掛ける切り下げがなく内側下部前後兩側に二分角の棧を打ち付けて巢蜜框を載せる様にするのである。巢蜜框は(イ)の如くで之に一斤入の巢蜜箱四個を並列して入れる事が出来る様にし、巾一寸三分長さ一尺五寸二分、厚さ二分の



板の両端に高さ三寸六分巾一寸六分、厚さ四分の木片を打ち付けたものである。此框は巢框八枚入の巢箱に載せる織箱の六個を入れるもので、其框の間には一々(口)の如き薄い隔離板を入れるのである。隔離板は木製で大きさは巢框と同じくし、下方は一分五厘程切り込んで圖の如くし、蜂の通路とするのである。而して最後に入れる一枚は厚いものを用ゐ、其兩側をパネで押付けて動かぬ様にするのである。

分離器 は蜜を分離採取するに要する器具で錫引鐵板で刷を作り、下部に蜜の流出する排出口を附し、胴の中には軽く強い金屬製の籠二個を入れ、此籠は左右に自由に回轉し得るもので、金網で兩面

を張り、之に巢脾を入れて蜜を分離するに際し、巢脾の損傷を防ぐ爲に更に之を支ふべき金屬製の框がある。巢框は同時に左右の籠の中に入れ、上部の齒輪によつて籠を急速に回轉すると蜜は分離せられる。胴の中央は突起して笠形をなして居る様にしてあるから蜜はそれから流れて排出口に出るのである。

蜜刀 は蜜を採取せんとする時蜜房を切るもので、之を使ふ時は熱湯に浸して用ふるも巢脾を損ぜず、又蜜が刀に附着するのを防ぐものである。

製蠟器 は銅か又は亞鉛引の鐵板で製した桶で其底は笠形を爲して中央に圓筒を立て、又別に胴を細い目の金網で造つたもので前者と同形で少し小さいものがあつて、前者へ巢脾の破片を入れ、更に之れを後者に入れて蓋をし、之を湯を沸かした釜の上に乗せると釜中の蒸氣は圓筒を通じて巢脾を溶かし其下部に付けてある流出口から蠟が流れ出るから之を適宜の受器に入れるのである。

薰煙器 は蜂が激怒して人を螫さんとした時、薰煙して蜂を恐怖せしめる器である。此器は錫引鐵板で製した圓筒で、口部は取離しが出来る様にし、中に圓い鐵板に孔が多く穿つて居る脚のあるものを入れ、之に乾燥した木片に石油を少し浸して載せ火を點じ、其上に燃料を詰め、口部を堅く嵌めて、一方傍に備へてある竈で空気を送り、口部から發煙せしめて蜂を薰煙するのである。

覆面帽 之は蜂を取扱ふに當つて蜂に螫されぬ様に顔を保護する爲め用ゐるもので、普通帽子のつばの廣い硬いものを粗い目の蚊帳を被ひ、其端を二尺位にして頭部に被り、端は肩の周圍に結ぶか、襟の中に入れるのである。

捕蜂器 は蜂が分封する時、樹枝などに集まつて居るのを捕ふるもので、全部金網で製したものである。上部は八九寸四方あつて開閉自在の蓋を附し、下部に至る程狭く、下端は廣さ三分、巾二分位の口

を付け、之にも開閉せられる蓋を付け、更に回轉の自由な柄を付け、蜂の集つて居る下から此器を入れて蜂群を其中に落とし直ちに蓋をするのである。暫くして下方の蓋を開いて見て、若し残りの蜂群が此器の外に集るか又は下方の口から中に入れば此器の中に蜂王が居るもので、又若し器中の蜂が悉く下方の口から飛び出して元の位置に集まれば器の中に蜂王が居らないからである。其場合には再び前の如くにして捕へ蜂王を得る様にせねばならぬ。之を巢箱に入れるには蜂群を巢箱内に振り動かすか、下方の口を開いて巢内に接し軽く叩いて巢箱の中に追ひ入れるのである。

蜂毒 は蜂を巢脾面から掃ひ去る時とか、蜂を追ふ時とかに用ゐるもので、鳥の翼を以て作つても、蜂毒の穂で造つてもよい。

分封屋根 は分封期節に至つて各所の樹枝などに掛けて置くと分封した蜂群は此所に集るものである。

る。之は杉板を以て屋根形に造つたもので廣さ九寸五分位で、内には杉皮を打ち付け、蜂が止るのに容易なる様に作るものである。之を掛ける場合には日光の直射しない所であればならぬ。此分封屋根を用ゐると蜂群を巣箱に移す時頗る便利である。

掬板 は蜂が分封する時とか又は蜂群を他の巣箱に移す時に掬つて入れるもので、杉板で造り廣さ四五寸、幅三四寸位とし一邊を厚くし一邊は薄くするものである。

通過する事が出来ないものである。故に孔の大きさは最も正確にしなければならぬ。

蜂王籠 は蜂王を他の蜂群に與へんとする場合に蜂王を入れるに用ゐるか、又は王臺を入れ置き、其中で出房せしめる等に用ゐる。其種類は種々あるが、最も簡單なものは幅一寸六七分、長さ三寸三分位の金網で圓筒状に作り、上部を六分位宛を隔て、深さ六分位切り込み、之を折り曲けて上部を閉ぢ、温めた蠟を塗る。そして其下方五六分を金網の縦線を残し、横線を去つたものである。之に蜂王を入れ、巢脾面に其足を深く押込んで、働蜂が多く之に附着しても落ちない様にして蜂群に與へるのである。

雄蜂驅殺器 之を高さ三寸七八分巾二寸三分位、長さ一尺二三寸位で、巢箱の巢内に應じて其長さを増減するのである。そして底板なく中央に一段を設け、下段の後方には隔王孔を有する亞鉛板を張り、其上段には中に巾二寸位の有孔亞鉛板の戸を上

方に抜き得る様に附し、其兩側に器内に突出する金網製の鼠を附し、其前面上段全面に有孔亞鉛板の閉閉すべきものを附けるのである。此器を巢内に宛て置くと働蜂は出入するが雄蜂は其鼠から入つて外出する事が出来ず、巢内に歸る事が出来ないものである。又分封の際巢内に此器を置くと蜂王を其中に收容するから自動分封を行ふ場合に用ゐられ、蜂の逃走せんとする際之を巢門に置くと蜂王は逃走する事が出来ないで蜂群は悉く歸つて来るものである。蜂王を巢内に歸らせるには其後方の戸を引上げて置けばよい。

餌養器 は即ち蜂に食餌を與ふる時に用ふるもので、いろ／＼あるが、高さ一寸二分、廣さ一寸五分、長さは巢箱よりも一寸位長くし、木製で、巢箱の廣さに適當した所で板で内部を區分し、其板は下方に底板より離れ蜂が出る事が出来ぬ程度にして蜜が流れ入れる様にするのである。而して中は木を

組んで格子を入れ、蜂が漏れるのを防ぎ、箱外に出る部分には引き抜き事が出来る硝子の蓋を附し、巢箱の胴を餌養器の廣さに適する程後方に引下げ、其下に接着して置くもので二個の三角板を臺の後方の脚に打ち付け、之で支へる様にするのである。

巢框入 之は長方形の箱で錫引鐵板で造り、内部の上方兩側で巢框の上棧を掛ける様にし、之に開閉する蓋を附け、兩側から取手を附けるのである。箱の大きさは巢框の大きさに準じ巢框五枚位を入れ得る様にするのである。此器は蜜を採取する際、巢脾框を入れて持ち運ぶ用にしなり、巢箱から巢脾を引き抜く時一々之に入れて蓋をすれば便利である。

巢礎 之は薄い蠟板に蜂の巢房底の如き凹凸を壓印し、巢框に付けて蜂に與へるもので、蜂は之に従つて巢脾を造營するものである。之を用ゐるとも蜂はよく巢脾を造營するものであるが、動もすれば不正の巢脾を造る事がある。之に反し巢礎を用ふる

時は正しい巢脾を造るものである。巢礎は六角形のものを通とし、巢框に用ゐるものは蠟一斤に付凡そ二尺五寸四方位とし、巢蜜箱に用ゐるものは蠟一斤に付凡三尺五寸四方位の割合に製するのである。巢礎を製造するには溶蠟器、厚板（厚い木板で其大きさは巢框に準じて一寸以上長くし溶蠟に入れる際指頭で之を持ち得る餘地を有らせるので、厚さは一寸位で、木質は緻密で堅いものがよい）冷水槽（普通の鹽の大きなものでもよい）巢礎壓印器等の器具を要する。先づ溶蠟器の外器には湯を入れ、内器には蠟を入れ之に火氣を與へて蠟を溶解し、厚板の上部から一寸位下まで浸し得る位に蠟を入れて置き、厚板は一枚以上を用意し、使用前手桶へ二杯位の水に一握りの鹽を混じたものに三四時間浸して置き、冷水槽には十分水を入れて蠟の附着した厚板を冷す用に供するのである。斯くの如くして厚板を取り其端を持つて之を容蠟中に挿入れ、直ちに引き上げ暫く

く垂直に保つて溶蠟の點滴が凝結したのを待つて之を冷水槽に入れ、厚板の両面に附着した蠟板を剥き取ると、同時に二枚の蠟板が出来る、溶蠟の温度は華氏百六七十度位が適當である。それから厚板に蠟の附着する氣味がある時は灰汁に浸した布片で其面を拭くのがよい。蠟板が出来たら先づ華氏百十度位の湯を冷水槽に入れ、之に一握の鹽を混じたものの中に浸し置き、後巢礎壓印器を据付け、圓棒を石鹼水で潤し、手で擦つて滑かにし、少し温めて置き、蠟板を巢礎壓印器の圓筒内に通過せしめるのである。さうすれば巢礎は出来るのであるが、之を造るには十分の熟練を要するものである。製造した巢礎は水分を去つた後之を紙に包んで箱に藏め、蓋を爲し置いて随時使用するのである。次に巢礎を巢框に裝附するには最も堅固にするを要する。巢礎は蜂が之に巢脾を造營すると幾分延びるものであるから巢框の下棧と巢礎の下端とは約一寸許りの隙を存する

様にし、巢框の上棧の下方に設けてある小溝に入れ、溶蠟を其所に流し込んで裝付するのである。次に巢礎を巢蜜箱に裝付する場合には巢礎を適宜の大きさに切り、其巢蜜箱全面に裝附する場合には箱の底と巢礎とは四五分の隙を存せしめるのであるが、巢礎と切るには正確にし曲らぬ様にせねばならぬ。

第八節 管理と取扱

巢箱の位置 巢箱を並列する場合には各箱の距離を成る可く遠くするがよい。屋外飼養には出來得る事なら二間以上の距離があるのがよい。屋内飼養の場合には一間位隔て、並列するのがよい。巢箱を地上に置く時は地上から數寸の所に置き、一、二尺も高い所へ置くのはよくない。置場所は夏は涼しく冬は温かい所を選び、日光の甚だしく直射せぬ様にし、陰濕の地は避けねばならぬ。巢箱の方向は其巢門を東向とするのが最もよい。若し春季に東風の甚だし

い所とか、其他止むを得ざる場合には南向とし、西向、北向等はよくない。

轉地飼養 之は花が小さい場合に花の多い地に巢箱を移して飼養する事で、蜜を多量に得る上に於てよい。之に用ふる巢箱は運搬し易い様小形に作り、繼箱内の貯蜜は移轉の都度採取するがよい。蜂は夜間に至れば全部巢に歸るものであるから夜間になつたら巢門を蓋して置けば蜂を減する事はない。成る可く夜間に運搬し日中は其地で勞働せしむる様にするのがよい。然し轉地飼養をする爲めに多くの費用と手数を要する様な事があつては却つて不經濟であるから、此點を考へて後すべきである。

管理法 採蜜の多少は蜜蜂の管理の良否によつて分るゝものであるから、養蜂者は此管理には十分の意を注がねばならぬ。多數の蜂を飼養する場合には其巢箱に一々番號を附し、帳簿を備へて置いて元の巢の番號、分封の月日、蜂王の生年月等を記入し、

春に至つて労働を始めた時は巢内を検査して其強弱を詳記し、分封收蜜の月日分量等を記入して置くのがよい。そして朝夕巢箱を見廻つて蜜蜂の舉動に注意し、蜂王の在否、蜂群の盛衰等を知り、巢箱の底板を掃除する時はよく周到の注意を以て巢内の状況を知らぬ様に力めるがよい。例へば底板に蠟の鱗が落ちて居る事が多い時は新しい巢脾を造營する時で、蜂卵が多く落ちて居る時は蜂王の産卵が盛んな時で、巢蟲の糞が落ちて居るのは巢蟲が居る時である。

春の管理 春の内でも早春は最も注意を要する時である。晴天の日を擇んで巢箱の底板を掃除し、同時に巢内を検査して適當の處置を施し、若し巢蟲の幼蟲が伏在して居る場合には驅除し、冬季に巢門を小さくして置いたものは廣くして新鮮な空氣を入れ、又蜂が早春に労働を始める様になれば、蜂王も産卵を始め蜜を多量に要するものであるから、

若し貯蜜が少ない様であつたら、之に餌を與へなければならぬ。蜂王が産卵する場合に蜂群の集合して居る中央からするものであるが、蜂兒の面積が多くなるに従つて一方に偏するものである。此場合には蜂兒のある兩側に順次空巢脾を置くことと蜂兒の面積を早く大ならしめ蜂の繁殖を多からしめるものである。此場合には貯蜜の消費量を増すものであるから食餌を與へるがよい。次に蜂が益々労働して巢脾を擴大する時になつたら漸次巢礎を裝附した巢框を挿入するがよい。それには巢脾の前方又は後方に入れるのである。蜂の労働が益々活潑となれば分封の用意と採蜜の準備とを忘れてはならぬ。

夏の管理 春より初夏にかけて分封は尙盛んな時で、分封が既に終り、新蜂王が交尾を遂げし後、野に花蜜が減少して來れば働蜂は自ら雄蜂を殺すものであるが、其以前に人為を以て雄蜂を殺す様にすれば經濟的である。之を殺すには雄蜂驅殺器を用

る、三日引續いて之を巢門に置くことと注意せしめるものである。尙分封前後に於て蜂群の未だ発生しない蜂箱を切り去つて無用の蜂群を生じせしめないのは一層有益な手段である。殊に收蜜を目的とするものは此蜂群驅殺を十分行はねばならぬ。雄蜂房を造るのを防ぐには全面働蜂房巢礎を付けた巢框を與ふるが、全面働蜂房を以て充された巢脾框を多く與へるのもよい。梅雨の候に入つて連日陰雨の時分は蜂は十分の働きを爲す事が出来なから、野には尙花があるから晴天の時には労働を持續するものである。盛夏に入れば花蜜缺乏し、蜂王は産卵を減少したり停止したりするもので、殊に晩く分封したものとか弱小なものとかは貯蜜が少ないから十分注意を要する。又此氣節に至れば巢蟲の繁殖する事が多いから之が驅除にも心掛けねばならぬ。日本種の蜂は暑氣を感じる事殊に甚だしいものであるから、巢脾面に閉止する事が出来ずに巢箱内全部に蟻が居る

ものである。そして日中は巢門を閉鎖し、夜間は巢門を大きくし、夏場の熱は巢内に入る可く巢門を大きくして、巢内を少しく引出し、巢箱内に空氣が入る様にせねばならぬ。

秋の管理 秋季に入り花が閉く様になれば蜂は活動を開始し、蜂王の産卵盛んとなり、蜜を採取する事も多いから巢箱内に貯蜜せしめれば之を採取する事が出来る。若し巢箱の巢脾から蜜を採取せんとする時は蜂が越冬の貯蜜に餘日ある時にせねばならぬ。暑氣が減少するに従つて巢門を漸次小さくするのであるが巢箱内に濕氣が多い時は巢門を廣げ置かねばならぬ。又此氣節には蜂兒を生育する事が少ないから巢内に水分の必要を感じる事も少なく、蜜の水分量が多く、外氣が寒冷であるから其蒸發水分は巢箱内に凝結したり、點滴となつて底板の上に落ちて流れる事があるので、巢箱内を冷湿ならしめ、蜂の発生に不利となるものである。故に斯る場合には

春に至つて労働を始めた時は巢内を検査して其強弱を詳記し、分封收蜜の月日分量等を記入して置くのがよい。そして朝夕巢箱を見廻つて蜜蜂の舉動に注意し、蜂王の在否、蜂群の盛衰等を知り、巢箱の底板を掃除する時はよく周到の注意を以て巢内の状況を知らる様に力めるがよい。例へば底板に蠟の鱗が落ちて居る事が多い時は新しい巢脾を造營する時で、蜂卵が多く落ちて居る時は蜂王の産卵が盛んな時で、巢蟲の糞が落ちて居るのは巢蟲が居る時である。

春の管理 春の内でも早春は最も注意を要する時である。晴天の日を擇んで巢箱の底板を掃除し、同時に巢内を検査して適當の處置を施し、若し巢蟲の幼蟲が伏在して居る場合には驅除し、冬季に巢門を小さくして置いたものは廣くして新鮮な空氣を入れ、又蜂が早春に労働を始める様になれば、蜂王も産卵を始め蜜を多量に要するものであるから、

若し貯蜜が少ない様であつたら、之に餌を與へなければならぬ。蜂王が産卵する場合には蜂群の集合して居る中央からするものであるが、蜂兒の面積が多くなるに従つて一方に偏するものである。此場合には蜂兒のある兩側に順次空巢脾を置くと蜂兒の面積を早く大ならしめ蜂の繁殖を多からしめるものである。此場合には貯蜜の消費量を増すものであるから食餌を與へるがよい。次に蜂が益々労働して巢脾を擴大する時になつたら漸次巢礎を裝附した巢框を挿入するがよい。それには巢脾の前方又は後方に入れるのである。蜂の労働が益々活潑となれば分封の用意と採蜜の準備とを忘れてはならぬ。

夏の管理 春より初夏にかけて分封は尙盛んな時で、分封が既に終り、新蜂王が交尾を遂げし後、野に花蜜が減少して來れば働蜂は自ら雄蜂を殺すものであるが、其以前に人為を以て雄蜂を殺す様にすれば經濟的である。之を殺すには雄蜂驅殺器を用

る、二三日引續いて之を巢門に置くと大抵驅殺し得るものである。尙分封前後に於て雄蜂の未だ出生しない蜂房を切り去つて無用の雄蜂を生せしめないのは一層有益な手段である。殊に收蜜を目的とするものは此雄蜂驅殺を十分行はねばならぬ。雄蜂房を造くるを防ぐには全面働蜂房巢礎を付けた巢框を與ふるが、全面働蜂房を以て充された巢脾框を多く與へるのもよい。梅雨の候に入つて連日陰雨の時は蜂は十分の働きを爲す事が出ないが、野には尙花があるから晴天の時には労働を持續するものである。盛夏に入れば花蜜缺乏し、蜂王は産卵を減少したり停止したりするもので、殊に晩く分封したものと弱小なものとかは貯蜜が少ないから十分注意を要する。又此氣節に至れば巢蟲の繁殖する事が多いから之が驅除にも心掛けねばならぬ。日本種の蜂は暑氣を感じる事殊に甚だしいものであるから、巢脾面に靜止する事が出來ずに巢箱内全部に擴がり居る

ものである。そして日中は多く巢門で風を受けるものであるから、盛夏の候は成る可く巢門を大きくして底板を少しく引出し、巢箱内に空氣が入る様にせねばならぬ。

秋の管理 秋季に入り花が開く様になれば蜂は活動を開始し、蜂王の産卵盛んとなり、蜜を採取する事も多いから巢箱内に貯蜜せしめれば之を採取する事が出来る若し巢箱の巢脾から蜜を採取せんとする時は蜂が越冬の貯蜜に餘日ある時にせねばならぬ。暑氣が減るに従つて巢門を漸次小さくするのであるが巢箱内に濕氣が多い時は巢門を廣げ置かねばならぬ。又此氣候には蜂兒を生育する事が少ないから巢内に水分の必要を感じる事も少なく、蜜の水蒸發が多く、外氣が寒冷であるから其蒸發水分は巢箱内に凝結したり、點滴となつて底板の上に落ちて流れる事があるので、巢箱内を冷濕ならしめ、蜂の衛生に不利となるものである。故に斯る場合には

巣箱内を乾燥ならしめる様にせねばならぬ。次に秋季には成る可く強て蜂兒を生育せしめたり、新しい巢脾を造營せしめたりする境遇を蜂に與へぬ様にするがよい。若し之を爲さしめれば蜂の壽命を短くし冬季に至つて斃れる蜂が多く出来るものである。

冬の管理 冬季に入れば蜂は蟄居の準備を爲すもので、弱少な蜂群は越冬に甚だ困難であるから、此際他群と合同せしむるを得策とする。越冬の準備が終れば止むを得ざる場合の外は巢箱を開いてはならぬ。蜂が温度を保つて無事に越冬するのは蜜の力に依るもので巢箱を開いて温度を散ずると蜂は之を恢復する爲に多量の蜜を消費するものである。それから蜂の強弱、貯蜜の多少を知るには巢箱の外圍を叩いて蜂の發する響を聞けば判る。即ち其響が大きくして鋭い時は最も安全なもので、響が小さくて鈍い時は貯蜜が少く蜂群の小さい場合である。次に寒氣が厳しい時は餌を與へて蜜の缺乏を補はねばならぬ。

らぬ。

取扱上の心得 蜜蜂を取扱ふには蜜蜂自然の性質をよく知つて之に従ふ様にせねばならぬ。例へば蜂は上方に集まる性質を有して居るから下方に導くのは困難なもので、又暗いのを好むものであるから明い所へ誘ふのは困難なものである。次に蜂に螫されるのを恐れてはならぬ。之を恐れる爲に蜂を追つたり、仕事を中止したり、中途逃げたりするのはよくない。蜂の自然に委せる時はさう螫すものではない。次は蜂を愛する事で一蜂と雖も忽にしてはならぬ。そして蜂を苦しませぬ様にせねばならぬ。次は取扱を爲すに當つては先づ順序方法を熟考して後手を下し、迅速にせねばならぬ。次は蜂の労働する秩序を亂さない事である。

蜂王と蜂群 蜂王は蜂群に必要缺くべからざるものであるから、蜂群を自由に進退せしめんとするには蜂王を進退すればよい。又蜂群は蜂王を離れて

獨立に生活する事は出来ぬもので、又多數集合せねばならぬものであるから、養蜂者は常に之を心得て置く必要がある。

蜂卵と蜂兒 蜂は其卵と兒とを頗る愛すもので蜂卵と蜂兒を多く有する巢脾を蜂に與へる時は働蜂は其労働を盛んにするものである。

蜜 は蜂の食餌で之を愛する事甚だしいものである。殊に成熟して蓋をしたものは甚だ愛する。若し蜂が怒つた時薄い蜜を蜂に吹き掛ける時は一時蜂の怒りを止め得るものである。

蜜蜂の恐れるもの 之は煙、光、雷聲、風、水氣等で、蜂を畏服せしめるには薰煙法を施したり巢箱の外側を叩いて響を蜂に與へたり、光を應用したり、風を送つたり、水を吹き掛けたりするのである。けれども是等は度を過したり濫用したりしてはならぬ。其運用は實地の經驗を積んで知らねばならぬ。

取扱の時刻 は何時がよいかといふに、日中の温暖な時が最も良い。風雨の日は成る可く取扱はぬがよい。而し盜蜂の現はれる時期にあつては夕刻がよい。それも餘り暗くならぬ内であればならぬ。蜂は人よりも早く其視力を失ふものであるから、餘り暗くなると飛び立つた蜂は巢箱に歸るに困難となるものである。又朝は最も多く蜂が飛遊する時であるから此時刻には取扱はぬがよい。次に交尾前の蜂王を有する巢箱の近傍の蜂群は正午から午後三時頃迄は蜂を騒がせてはならぬ。他から持つて来た蜂群で未だ巢門の位置をよく定め得ないものは夜間に手入するのがよい。

巢箱の移轉 巢箱を移轉せんとする場合には、先づ之を十五町以上を隔てた所に運んで置き、七八日乃至十数日を経て之を運び戻して新位置に置くのである。けれども蜂はよく舊位置を記憶するものであるから成る可く移轉せぬ様にせねばならぬ。氣候

の温暖な時は蜂の運動が自由の爲め其位置を移動すれば二三日の後は新位置を知るものであるが、氣候の寒冷な時は外出する事も少なく、且つ外出した蜂は舊位置に來て捜して居る内に寒氣の爲凍死する事があるものである。蜂をして舊位置を忘れしめんには巢箱や巢門に金網を張り、一時蜂を幽閉して日光の入らぬ室に入れ、二三日を経て夕刻之を出し、新位置に据る置いて巢門を開き、適宜の板を立て掛けて蜂の目標とすればよい。而し日本種の蜂はよく舊位置を記憶して居るから此方法は効が少くない。

蜂に蝥された場合 蜜蜂の蝥針には先端に倒鉤があつて一度蝥す時は之を抜く事能はずして蝥針を遺留し、其蝥針は深く人體に入つて毒を傳へるものであるから蝥され場合には成るべく早く爪先で蝥針を抜き去り、決して其局部を摩つてはならぬ。そしてアモンニア水かハブ草の葉を揉んで汁を附けるか又は手拭を冷水に浸し局部を冷すかすればよい。蜂

に蝥される事度々あれば其毒を感ずる事少なくなり痛みも甚だ軽いものである。

蜜蜂の馴致 蜜蜂は框入巢箱に入れて久しく飼養すると常に人の取扱ひに馴れて溫柔な性質となるものである。而し空洞の巢箱から框入の巢箱に移した當時は猥りに怒るものであるから、此場合には前に述べた如く蜜を吹き掛けるか、薰煙法を行ふのがよい。朝夕巢箱を開いて十數日行ふと漸次其性質を矯正し得るものである。

第九節 蜜蜂の餌養

蜜蜂の食料は前にも述べた如く花粉や花蜜で、之を自ら採取して貯蔵するものであるが、場合によりては人爲を以て之を給與せねばならぬ事がある。之を給與する目的は獎勵の場合と、救助の場合とある。獎勵的に給與するのは蜂を獎勵してよく勞働せしめる爲に食餌を與ふるもので、救助的食餌は時

は乾いた燕麥粉又は甘藷粉を適宜の容器に入れて乾燥した場所に置くのである。

蜜の缺乏した時とか、又は缺乏せんとせる見込ある時に與へるものである。餌を給與する法が宜しきを得れば蜂群を強盛ならしめ、且つ蜜を多く得る事が出来る。又若し宜しきを得ないと初秋の候に蜂群が逃去したり、冬季に凍死したりするものである。

食餌の調製 蜜蜂に與へる餌は純良な蜂蜜を薄くして作るか、良好な砂糖で作るかするものである。砂糖を以て作る場合には氷砂糖一斤に熱湯三合を加へてとろ火に掛けよく攪拌して沸騰せしめ、全く溶解するに至れば之に酒石酸若しくは食鹽を少量混じよく攪拌して冷ました後用ゐるのである。又精製白糖一斤に熱湯三合を加へ攪拌して溶解した後蜂蜜一合を加へて用ゐてもよい。右は春及び夏に用ゐるものであるが、晩秋に用ゐるものは右のものよりも濃厚にせねばならぬ。それには水分を減すると共に蜂蜜二三割を混入するのである。次に花粉は蜂兒の養育に必要なものであるが、若し之が不足した場合に

給與の方法

巢箱が多數ある時は食餌は巢箱内の巢脾の後方か又は空繼箱を載せて巢框の上に入れて置くがよい。若し盜蜂の憂ひある時は夕刻蜂が勞働を休止せんとする時に與へるがよい。蜂に餌を與へるに度々餌養を始め、又中止するのは蜂に害あるものである。尙各群に共同して餌を與へる場合には共同餌養器で與へなければならぬ。此器は適宜の板に木目に並行して廣さ一二分深さ一分位の溝を造り其端は一寸位を残し、溝と溝とは一二分宛を隔て、數條を穿ち、之を平な臺の上に載せ、其上に一二升を容るべき大きな壺に食餌を一杯に入れて倒にし、食餌の流れぬ様亞鉛板を以て蓋をし、之を轉倒して溝を有する板の上に置き、亞鉛板を引き抜く時は蜜は流れて溝の中に入り、蜂が來て之を吸収するに従つて漸次流出するものである。

餌養の時期 は何時がよいかといふに、蜂が怠慢して労働しない場合とか、食餌が不足した時とかは勿論であるが、早春に給與するのは其利益あるものである。貯蜜の多い蜂群を餌養するは奨励する爲で、蜂の出遊を促がし蜂王の産卵を促がす爲である。故に此場合には日々少量宛を與へるがよい。而し十分天然の花から採蜜する様になれば餌養を廢するのである。梅雨の候に入つたとか、七八月の野に花が缺乏したときとかの場合には之を餌養せねばならぬ。夏期に貯蜜を多くして蜂の英氣を盛にして置けば蜂群は秋期に入つてから労働が盛んで越冬も安全となるものである。蜂は貯蜜が缺乏すると却つて倦怠して蜜の採取に勉めない事がある。斯る場合には之を餌養する要がある。蜂が越冬するに貯蜜の十分である場合には食餌を成る可く多量に與へ、一週間の餌養で全く冬季を越すに十分な量を貯藏せしめ一週間以上に亘つてはよくない。そして十分貯蜜し

たらそれから三四日間少量宛の蜜を與へるのである。さうすれば蜂は早く蜜を蓋するものである。蜂に餘り長く餌を給與するのはよくない。何となれば之が爲に蜂王の産卵を促し、従つて育児せねばならぬ事となり、多くの蜜を消費し、且つ寒冷な時に育児するのは蜂群に大なる不利益となるものである。

第十節 蜜蜂の越冬

蜂群の越冬如何は蜜蜂飼養の成敗の分れる所で、養蜂者の最も意を注がねばならぬ事である。越冬といふのは即ち字の如く冬季を越す事で、之が準備を爲すのは通例十月の下旬から十一月の上旬である。蜂群中の温度は外氣が如何に寒冷でも華氏七十度以上の温度を保持するもので、さうでなければ蜂は巢内に於て斃死するのである。此温度を保持するのは集合の力と蜜の力に依るもので、養蜂者が越冬の準備を爲すの要は蜂群の多少と貯蜜量の如何を検する

にあるものである。然らば如何にして之を検するかといふに、巢箱を開き巢框の上から見て蜂が群居る所が直径六寸以上あれば越冬し得らるゝ資格がありそれより小なければ越冬は覺束ない。又蜂が群居する面積に十分の貯蜜があつて其半ば以上が蓋されて居れば越冬の資格ある貯蜜量である。而し蜂群の多いものは比較的少量の蜜で足り、蜂群の小さいものは寒氣を感じる事が多いから比較的少量の蜜がなければ越冬する事が出来ぬものである。故に若し貯蜜の十分でない場合には餌を與へて之を補つて貯蜜を爲さしめ、後巢門を縮小にし、巢箱の蓋の下には新聞紙數枚が毛布等を被ふて温度を保持し易からしめ巢箱が大きくして蜂群が之に満たない時には蜂のな

い空巢脾は取出して分割板で巢箱内を仕切り置くのである。かうして越冬の準備が終つたら後は決して巢箱を開いてはならぬ。

舎外の越冬 屋外にある巢箱は冬季と雖其所

に置いてよいが、若し陰濕で寒冷な所ならば暖い所へ移し、其外圍を藁か藁の様なものに包み置くがよい、巢門は縮少して小さい板を立て掛けて風が直接に吹き入らぬ様にする。而し巢門は決して閉ぢて置いてはならぬ。若し雪で巢門が塞ぐ事があつたら直ちに除去せねばならぬ。それから日光の直射する場所をよくない。

舎内の越冬 常に舎内に飼養してある巢箱ならば越冬の準備は前に述べた様な點に注意すればそれで十分であるが、寒冷な地で積雪の多い所では屋外飼養の蜂群を倉庫内か又は窖の中に移して越冬せしめるのが安全である。此所へ移したら成る可く光線を少くして靜かにし華氏四十度乃至四十五度位に

持續せしめ、若し五十度以上の温度に達した時は巢箱を元の位置に出して蜂を外遊せしめ、日暮に蜂が悉く巢箱内に歸るを待つて運び入れるがよい、貯藏所から早春に巢箱を出す場合には全部同時に出す

すに、五個か十個位宛數回に出るのがよい。さうしないと蜂が混同する憂ひがある。

凍死の救助

冬季中に十分の越冬準備を爲さぬとか、又は氣候の寒冷が甚だしいとかで凍死する事が往々ある。巣箱の外側を叩いて見て蜂が音を發しないのは凍死したのか又は凍死に瀕したものである。若し凍死した場合には長時間を経ないものなら之を救助する事が出来る。それには巣箱を室内に運び入れて巣箱を開き、蜂を巢脾から落さぬ様にして巢箱を開き、蜂に蜜を吹き掛けて元の如く蓋をして巢門を閉ち室内の温度を華氏の七十度以上にして置けば數時間の内に蘇生するものである。蘇生したら之に食餌を與へ、活氣を呈した後漸次に温度を降らせ、尙一晝夜室内に止め置いて元の位置に復し、尙暖い日には十分餌を與へて春まで耐へ得る様貯蜜させるのである。又外出して寒氣に打たれて凍死して地上に落ちたものは拾つて温度を與へれば蘇

生するものである。

第十一節 採蜜と製蠟

一 採蜜

採蜜の時期 は最も善良にして多量を採收し得るは三四月頃で、此外框入巢箱ならば隨時採蜜する事が出来るものである。越冬を終つて普通の蜂群は主要植物開花の六週間前に労働を開始せしめ、若し自然の天候で蜂が労働を開始しなければ餌を與へて之を奨励すべきである。人工分封を施したものは其期節に於て直に巣箱を重ねて採蜜する事が出来る。秋季も蜜を採る事が出来るが、冬季の食料に不足を訴ふる恐れがない様に採蜜するを要する。收蜜の時期は其土地の氣候と花の如何によつて一定する事は出来ぬが、若し降雨が長く續く時は收蜜期も遅れ、又全く收蜜する能はざる事がある。春季の收蜜期に

採收した蜜は其色澤香氣風味等善良なものであるが、時期の進むに従つて劣つて来るものである。秋季の蜜は春季に次いでよいものである。

繼箱と採蜜の關係

繼箱を巢箱に使用すると蜂群に害を與へずに安全に採蜜する事が出来る。繼箱を重ねるには早春から蜂群を強盛ならしめ、巢脾の巢箱に充滿しないものには空巢脾又は巢礎を裝附した巢框を漸次に加へて巢脾の巢箱に滿つるを待つて繼箱を重ねるがよい。餘り時期の早い時繼箱を重ねて置くのはよくない。繼箱に蜂王が産卵するのは不利益であるから、若し蜂王の入る恐れがある時は繼箱と巢箱との間に隔王板を挿入して置くがよい。若し繼箱内に蜂王が入つた疑ひがある時は繼箱内をよく検査して蜂王の不在を確かめ、而して後隔王板を挿入するがよい。次に繼箱内の蜜を採取する爲に繼箱から蜂を去らしめんとするには隔王板と同形な平板に適當な孔を穿ち一個若しくは二個の脱蜂器を

添付したものを二三日前に繼箱と巢箱との間に挿入して置くがよい。次に繼箱を與へても永く働き始めない蜂群は幾分貯蜜のある巢脾一二枚を取つて之に與へるか、若しくは其巢框二三枚を一時巢箱内に入れ置き、之に巢脾を造營せしめ、多少の貯蜜を爲さしめた後繼箱内に移す時は蜂を誘導して繼箱内に働かしむる事が得る。而し蜂兒や蜂卵があるものを繼箱内に入れるのはよくない。蜂は之に依りて王臺を造る事があるものである。

分離蜜

繼箱から採收した分離蜜は最も清潔な巢房中に貯へられ、且つ其蜜は十分成熟せしめる事が出来るから甚だ善良な蜜を採取し得るものである。殊に分離蜜用巢框へ巢脾を造らせたものは最も貴重すべきもので、一度之を造營せしめると年々之を用ゐる事が出来る。繼箱を蜂に與ふる時、完全なる空巢脾を有する巢框を入れたものは直ちに蜜を貯藏するを得て其收蜜量も甚だ多いものであるから繼

箱には空巢脾を大切に保存して常に之を入れてやるがよい。若し空巢脾の欠乏した時は框の全面に巢礎を装附したものを與ふるがよい。繼箱を蜂に與へて七八分蜜を満たしたら之を上げて巢箱と繼箱との間に更に新繼箱を入れるのである。繼箱の上に重ねるよりは有効である。而して又新繼箱に七八分貯蜜して尙收蜜期の永續する見込があつたら更に新繼箱を與へるがよい。上層の繼箱は數日で蜜を充すから隨時之を取つて蜜を分離採取し、其巢脾は之を蜂に與へて蜜を貯へしめるのである。蜜を分離するには先づ分離器を清淨にして蜜の容器、蜜刀、蜜蓋等を用意し、巢箱から巢脾框を引き出して蜂を掃ひ去り、巢框入に入れて採蜜所に運び、巢脾框を蜜蓋入の上に乗せ、熱湯に浸して置いた蜜刀で其兩面の蜜蓋を切り開き、之を分離器内の籠の中に入れ、其柄を回転する時は蜜を分離する事が出来る。一面の蜜を分離したら巢脾を轉換して更に他の一面の蜜を分離す

るのである。分離せられた蜜は下部に附いて居る流出口から流出し、其口に麻袋、木綿袋を附けて置けば汚物を濾して蜜を流下し容器に受けるのである。收蜜期中に於て採蜜した場合には空巢脾は直に蜂に返し、採蜜期でない時でも氣候の溫暖な間は巢脾を蜂に預け置いて保存せしめるが安全である。氣候が寒冷になつたら巢脾は乾燥した場所に貯蔵するのであるが、收蜜室内に棚を設け、巢脾と巢脾と相觸れない様にして掛けて置くのがよい。蜜蓋の切り落したものは蜜蓋入によつて蜜を滴下し、尙残つて居たら蜂に蜜を吸収せしめ、後製蠟器に入れて製蠟するのである。

巢蜜 は小箱に巢脾を造らしめ、之に蜜を充しめるものであるが、巢蜜に用ゐる小箱は成る可く木質の柔かな材を用ひ外観を美しくせねばならぬ。之を造るには厚さ一分、幅一寸六分、長さ一尺四寸五分の板を折箱の縁の如く折つて組み合せ、三寸六

分四方の空洞とし、更に各縁の兩側を約一分五厘位宛切り込んで蜂の通路とするのである。之は一斤入の巢蜜箱で、之を巢蜜框に入れ、更に繼箱内に入れて其間には一々隔離板を挿入する。次に巢蜜箱を蜂に與へたら成る可く短時日の間に蜜を充實せしめる様にせねばならぬ。餘り長くかゝると蜂が巢脾を汚したり、巢蜜箱の外面を汚したり、樹脂を塗られたりして巢蜜の價値を損するからである。巢蜜箱を入れる時期は植物の花が多く蜜の採取が盛んな時で、巢箱を開いて見て其巢脾の上部に白色の蠟を添加して巢房の厚さを増した時が最もよい。次に巢蜜箱の大半に巢脾を充實し、貯蜜に蓋せられる様になつたら之を取去つて更に新蜜箱を與へるかさもなくば充實した巢蜜箱のみを取り去つて充實しないものを中央に入れ、更に新巢蜜箱を重ねてもよい。巢蜜は箱中に充實して巢脾を四面に附着せしめるのがよいのであるが、中には其巢脾を底板に接着せしめない場

合があるから、此時は之を倒にして蜂に與へればよい。

二、製 蠟

製蠟を爲すには破れた巢脾、蜜蓋、雄蜂巢房の切り取つたもの等から取るもので、之が製法は種々ある。最も簡單なのは前記の巢脾其他を壓し潰して麻袋に入れ、別に釜に湯を沸かして麻袋のまま、投入し、暫く煮て蠟の溶けるのを待ち麻袋を堅く搾り、其湯を冷却する時は蠟は水面に凝結するから、之を取上げて見て裏面の汚物を小刀の如きもので削り更に之を溶解せしめて其裏面の汚物を削れば終には純良な蠟を製出する事が出来る。次は製蠟器を用ゐる製蠟する事であるが、之には蒸氣壓搾製蠟器を用ゐるのがよい。此器は鐵板製の罐で下方に流出口があつて底部には熱湯を入れる事が出来る様になつて居て其中には別に孔が多くある鐵板製の罐があつて麻袋

に巢脾を堅く詰めたものを入れ、蒸気で溶解して上方の柄を回轉すると螺旋によつて鐵製の壓板を下ろし、堅く壓搾するから蠟分は悉く流出するのである。而して之を精製するには再び適宜の器に入れて水を加へ、とろ火にかけて溶解し之を冷却すると裏面に汚物が附着するから、之を小刀で削り去り、尙一層精良にするには硫酸か又は醋酸を混入した熱湯中で煮るのであるが、此際は金屬製のもので煮てはいけない。土器を用ふるのがよい。硫酸は凡そ水の百分の一位の割合に入れ、ばよい。そして之を火の上で徐々と沸騰せしめると蠟と水と酸の混合液となる。煮沸する事凡そ三十分で火を去り、之を毛布等で被ひて急に冷却するのを防ぎ、凡そ半日位経ると酸は下層に沈み、水は其上に沈み、蠟液は其上に浮くから、上部から徐々に汲み取り他の容器に移して冷却すれば美しい蠟を得るものである。

第十二節 外敵と疾病

巢蟲 蜜蜂の外敵として最も恐るべきものは巢蟲である。巢蟲は卵から蛆となり、蛹となり、後蛾となるもので、最も害をなすのは白色の蛆である。蛆は卵から孵化すると直に巢脾に蝕ひ入りて巢兒の房中に隠れ、稍長じて巢脾の中心に細小の絲を吐いて通路を作り、或は巢脾から連續して椗及び箱の木質を穿つて其中に隠れるものである。そして巢脾の中心を自由に進退して花粉や蜜を食したり、巢脾を害したりするものである。巢蟲には大小の二種あつて大種の成長したものは長さ八九分乃至一寸位あつて繭は相重り合つて一塊となり、小種は長さ五六分で少しく黒色を帯び全身に毛を生じて居て繭は巢箱の底板か片隅に作るものである。蛾は晝間は樹又は巢箱の陰等に靜止して居て日暮か夜間に至れば蜜蜂の巢門に居ないのを窺ひ、巢箱内に入り、巢脾の上

方に行つて産卵するのである。巢蟲のある巢箱は其底板の上に暗褐色又は黒色の火藥位の糞を落してあるから、注意して之を見るがよい。次に巢蟲の害を防ぐには蜂群を強盛ならしめるのが最もよい。又蛾の發生する頃は日暮に巢箱の近傍を見廻つて直ちに捕殺するがよい。若し巢脾中に巢蟲が多いのを知つたら之を製蠟用に供し、さもなれば巢脾を暫時太陽に曝すと巢蟲は地上に落ちるものである。巢蟲の害を被むるものは外國種よりも日本種の蜜蜂が甚だしから、日本種を飼養するものは殊に巢蟲の豫防に留意せねばならぬ。

黃 蜂

にも大小あるが、小黃蜂は蜜蜂を咬へ去つて之を食し、大黃蜂は蜜蜂を噛み殺すものならず巢箱内に侵入して巢脾を破壊し、幼蛆や貯蜜を食するものである。故に若し數個の大黃蜂が來襲すると全群を滅ぼされる事が珍らしくない。之を豫防するには雄蜂幽閉器を巢門に置くか、大なる目の網を巢

門より少し離して巢箱の臺から斜めに張つて置くかすればよい。黃蜂は秋の中頃最も多く來るものであるから注意を要する。

蜂 虱

は其色が赤銅色で縦二厘横三厘位の小蟲で、此蟲は出房した計りの蜂に寄生したりそれ以前に寄生したりするもので、之が寄生すると蜂群を甚だしく衰弱せしめるものである。之が豫防法は蜂群を強盛ならしめる事と、雄蜂を除く多く生ぜしめな

蟻

は巢内を清潔にする事等である。
蟻 は大した害を與へないものであるが、餘り多く巢門や巢箱内に集まると幾分の害となるものである。之を防ぐには巢箱の臺に脚を附し、之に水を盛つた器中に置くと入る事が出來ないものである。

蜘蛛

は巢箱の近くに巣を張つて蜜蜂を捕ふるものであるから、常に之を取去る様にせねばならぬ。

小鳥類

は蜂を捕へて食ふものであるから、是

等の近付かぬ様に工夫するを要する。

油蟲 は蜜を食する事があるから常に驅除するに力めるがよい。

其他 蜻蛉、蛇、鼠、蛾、ひきがへる等も蜜蜂に幾分に害を與へるものであるから注意を要する。

下痢 蜂の下痢症は冬期又は早春に發し、之が爲に蜂群を衰弱し、甚だしきは死滅する事もある。

原因は氣候の寒冷に遭ふとか、不良な食を與へるとか、濕氣が多いとか、久しく幽閉して置くとか、連日陰雨で空氣が濕つて居るか、寒氣の甚だしい時巢箱を開くとかで起るものである。此病氣に罹ると蜜は飛びながら水分の多い糞を排出し、好んで白色の物に止つて脱糞し、遂には巢門の近傍又は巢箱の底板を糞で汚して泥土の如くし、病勢が進むと地上を爬行して腹部が膨れ、遂に斃れるものである。之が豫防法として、越冬の準備を爲す際に不良な食物があつたら除き去り、晩秋及び冬季には稀薄な食餌

を與へぬ様にし、巢箱を乾いて居る所に置き、久しく幽閉せぬ様にするのである。而して若し此病氣に罹つたら、巢箱を乾燥して温暖ならしめ、蜂を騷がせぬ様にし、天氣の温い日には巢門を擴げて汚腐の臭氣を發散せしめ、夜間又は曇雨の日には巢門を縮小して寒氣の入るのを防ぎ、暖い日には成る可く蜂を外遊せしめる様にすれば大抵救助し得るものである。

腐敗病 は養蜂上實に恐るべきもので、若し此病氣が蔓延する時は蜂群を全滅する事がある。此病氣の原因は一種の細菌で繁殖の速かである。蜂兒が凍えるとか又は巢箱内が汚れて居たり、空氣が不良だつたり、濕氣が多かつたりすると、此病氣の誘因となるものである。此病氣に罹ると巢房内の蜂兒は褐色を呈し、後黒變して全身が腐爛し甚だしき悪臭を放つものである。そして此病氣で斃れる蜂兒は全身が鉛の如くなり、巢房内の斃屍を細い棒を入

れて徐々と引出す時は其粘液は二三寸位長く延びるものである。此病氣は主に蜂兒が罹るものであるが、生長した蜂も亦侵される事がある。豫防法としては若し一蜂群が此病氣に罹つたら他群に傳染しない様に夜間之を焼き盡し、之に關係した器具は之を二三百倍の昇永水か石炭酸で消毒し、其病群から採つた蜜は沸騰點に達する迄煮沸して冷ましたものでなければ他群に與へてはならぬ。次に一旦此病氣に罹れば其群の救済は殆んど不可能といつてもよい。しかし早い内に救助せば全治する事もある。それには先づ病蜂を一疋でも他の巢に入る事が出来ぬ様にする爲養蜂場から約半里許り離れた所に移し、巢箱の蓋を靜かに取つて純良な蜜を蜂群に吹き掛け、急に蜂群を他の空巢箱に振り落して舊巢脾を悉く取去り、後其蜂群を幽閉して約三四日間斷食せしめて巢礎を装置した巢框を與へ、之に石炭酸を五百倍の蜜液に混じたものを與へて餌とし、取去つた巢脾は直に燒

却するか製蠟用に供するかするのである。

黒死病 は蜂兒が生れて二三日以後に罹るもので、病蛆は初め帶黄白色となり、次に灰白、色となり、褐色に變じ、黒色に變するのである。此病は蜜の中に入らぬものであるから、之を他の蜂に與へても差支ない。此病氣の救治法としては蜂群中から蜂王を取り去り、十数日の後他の健全な蜂王を入れ、ば大抵助かるものである。

軟化病 に罹ると蜂兒の死體は膨大して多くは仰向になり、兩端を上部に尖らして横はるもので、病蛆は初め白色を呈し、後黄色に變じ、更に褐色に變じ、数日の後に黒色となり液體となるものである。此病氣は腐敗病と異り、死屍に粘り氣なく又悪臭を發しない。之を治するには病群の巢脾を悉く去り、巢礎を張つた新しい巢框を與へれば大抵助かるものである。

癩癩病 は働蜂の腹部が膨れて巢門から地上

に出で其翅を振はして斃れるものである。之を治するには蜂王を除いて健全な蜂王を與へ、巢框の間から時々硫黄粉を蜂群に振り掛ければよい。

第十三節 種 蜂

種蜂の購入 は早春がよい。早春に購入すると盛に勞働し、速に繁殖して分封するものである。次は分封後に購入するのがよい。分封後は價格も低廉で、繁殖もよいものである。空胴の巢箱に飼養してある蜂群を購入する時は之を框入の巢箱に移すのがよい。さうしないと翌年の分封まで空胴巢箱のままで飼養せねばならぬから甚だ不便である。次に分封した蜂群を購入して直に運搬するのはよくない。何となれば未だ巢脾を造営しない前に動かされる爲め逃走する恐れがあるからである。それから購入する場合には蜂王が交尾を遂げたものを購入し、産卵を初めてから運ぶのがよい。種蜂は成る可く強盛なもの

を撰ぶべきであるが、之を知るには框入巢箱ならば蓋を開いて見て其群の大小を見、貯蜜の如何、蜂兒生育の様態を見れば大抵判るものであるが、空胴巢箱の場合には其内部を検する事が出来ぬ事があるから、其場合には外に出る多少を見るがよい。それには巢門を出入する蜂が出る時は腹部が膨れて居て脚に花粉を付けて居る蜂が多いのは勞働の爲に出入する蜂が盛んな證で、従つて強盛な蜂群と見て差支ない。それから必ず蜂王を有して居るものでなければならぬ事、下痢症に罹つた事が無いもの、巢脾の害が少いもの、巢脾の成る可く正しくして貯蜜の多いもの等を撰ぶがよい。

種蜂の運搬 種蜂を運搬するには周到の注意をする必要がある。空胴の巢箱にある蜂ならば靜かに徐々と歩行して運搬せねばならぬ。そして巢脾の方向を見て巢脾の面した方の箱の外から錐で孔を數個穿ち、之に細い割竹を差込み、全巢脾を貫通して置

くと四五日を経れば蜂は蠟を以て巢脾を割竹に固着せしめる。入口は金網を張り、巢脾の墜落を防ぐが爲め、巢箱を上下轉倒して運搬するのがよい。運搬してから後二三日の間は其儘靜かに据る置き、蜂の損所を修復した後轉倒して舊に復し徐々と割竹を取るのである。次に框入の巢箱を運搬するには先づ框の上棧兩端の挺出した所を胴に釘付し、上に數枚の新聞紙を被ひて蓋と蓋とを固着せしめ、巢門には金網を張りそして後運搬するのである。若し暑い時運搬する時は框の上の新聞紙の代りに金網を以てするのである。框入巢箱ならば汽車汽船等でも差支ないが、之を積下しする時は十分注意するを要する。

蜂群到着の注意

他から運搬して來た蜂群を取扱ふには之を安置せんとする場所に据ゑ付け、框入巢箱の蓋及び蓋を釘付としたものは之を抜き取り、夜間巢門を開いて翌朝から蜂の出入を自由にし、又金網を巢框の上に張つたものは之を去つて新聞紙

等に取換へるがよい。運搬箱に入れて來たものは二三日を経たから之を巢箱に移すのである。小包郵便で送つて來た蜂を取扱ふには若し夜間に到着したものであれば一二時間靜かに安置し蜂の靜まるのを待つて巢門の金網を去り、上蓋を取り、框の釘を靜かに抜き去り、巢脾が墜ちて居たら之を框に付け、兩側から細い割竹を當て針金で兩端を結び、巢脾の落ちない様にして蜂に與へ、框の上には新聞紙を被ひ蓋をして置いて蜂の靜まるを待つて底板を取り、箱内の死蜂等を掃除して適宜の場所に据付けるのである。若し最初箱内の音が小さくて蜂が蓋を開いても飛立つ事が出来ぬ様に弱つて居たら箱内の蜂に蜜を吹き掛けて蓋をして置くがよい。蜂を巢箱に移すには先づ巢脾框を出し蜂を掃ひ去つて其上棧を去り、二枚を並列して普通巢箱に入れ、巢箱に入れて蜂を追ひ込むのである。運搬箱に巢脾が充滿して居ない場合には其儘運搬箱に入れて置いてよい、途中

巢牌を大破したり蜂が蒸れたりした場合には早く新巢箱に入れ換ゆるがよい。それから初は巢門に雄蜂幽閉器を置き、蜂が安全に労働する見込がついてから之を取り去るがよい。又蜜がなかつたら数日間十分之を與へねばならぬ。

第十四節 養蜂と植物

土地と養蜂數 養蜂は花蜜及び花粉を採取して生存するものであるが、之を得るに便利なのと不便なのとは養蜂上に大なる關係があるものである。故に養蜂場を設けんとするには第一に其土地の自然に生ずる植物の種類をよく調査し、第二に其近傍にて栽培せられる植物の種類を調査しなければならぬ。今大體の標準とすべき養蜂の飼養數を示せば

都會地の中央は	四五箱以内
市街地は	十箱以内
水田の多い地は	二十箱以内

一七八
畑地の多い地は 三十箱以内
山林に接近した地は 五十箱以内
山間の村落は 百箱内外
の如くであるが、之も花奔の多少、植物の種類等によつて一定する事は出来ぬから只大體の標準とすべきである。

花の良否 養蜂を飼養するに適する花は如何なるものがよいかといふに、大形の花よりも小形にして簇生して居る花がよい。農作物では蕎麥及び莖藎がよい。莖藎は春早く花を開き蜂群を肥大ならしめるによく、蕎麥は其蜜色は黒色を帯び品質はよくないが多量の蜜を供するから、利益である。次は菜の類、大根、蕪菁、胡瓜、越瓜、茄子、豆類等もよい。殊に辛菜、大豆、胡瓜等はよい。此外胡麻、罌子粟、玉蜀黍等の花も多く花粉を蜂に與ふるものである。果樹類で最も良好なのは蜜柑類で、蜜は一種の香氣があつて上品である。寒地にあつては柿と林

檜で、柿は甘味の多い蜜を生じ、林檎は上等の蜜を生ずる。李、牡丹、桃、梨、まるめろ等もよく蜂の働くものである。蜜は蜂の最も好むもので、根根もよく多くの蜜を生じ、葡萄もよく蜂の働くもので殊に山葡萄の中には多量の蜜を有して居る。栗の蜜は暗色にして苦味を有する劣等のものであるが、蜂が夏季を越すに益する所が多い。枇杷も温地にして多く栽培する所では多くの蜜を得る事が出来る。特用植物では蜜は最も多くの蜜を有し、蜂のよく集まるものである。茶は多量の蜜を有して居るが、開花は晩秋なる爲め蜂は十分之を探る事は出来ない。薄荷、紫蘇等も蜂の喜ぶものである。山林の樹木では杉、川柳等は早春に多くの花粉を作り、櫻の蜜は淡色にして香氣よく最も上品で蜂はよく之を探るものである。松、樅、檜等もよく蜜を生じ、椎は甚だ多くの蜜を生じ、一種の臭氣あるも味は悪くない。ニセアカシヤは良蜜を多く産し、柿、梧桐も亦蜜の喜

ぶものである。牧草類では第一が紫雲英で此花の蜜は少し色を有して居るが上品で、蜜量多く蜂の頗る喜ぶものである。殊に開花の期節は蜂の採蜜に適當な時であるから採蜜花としては實によいものである。白クローバーは紫雲英にも優るべきもので、其花蜜は上等で多量を生じ、蜂の頗る喜ぶものである。雑草木類では野茨は淡色の良蜜を生じ、香氣が佳良である。此外マブメシ、スマレ、タンボ、等も採蜜によい。石楠花、躑躅の類も多量の蜜を生じ、イワツ、ジ、グミ、ウツギ、シキミ等も蜂の喜ぶものである。此外一々枚舉するに遑がない程ある。

有要植物 養蜂上に必要な植物の種類と其開花期とを示せば左の如くである。

二月——三月
三月
らめ。かはやなぎ。
すき。たんぼし。あんず。はんのみ。はしばみ。はなすわ

う。くろもじ。まめふち。

三月——四月

あふらな。すみれ。さくら。もつこりばら。

三月——五月

なノ類。たいこん類。かふらな。

四月

すもし。ぼたんきやう。もし。やまもし。ひさかき。あくしほ。ゆすらうめ。からたち。ふな。どろのき。いぬざくら。めざ。

四月——五月

なし。びんげ。まるめろ。りんこ。かへて。にれ。してぎくら。しやくなげ。すみ。おほすみ。ほげ。すぐり。ふさすぐり。くさほげ。つた。にせあかしや。

四月——六月

のいばら。うまてやし。ちしほり。つしじ。

四月——九月

まめ類。

五月

ふどう。みかん。くわりん。ぐみ。つるいちご。ふち。くぬぎ。かしは。かし。系んじゆ。くす。まじり。いす。あふ

ら産り。しほち。えこのき。みづき。かねめち。やぶつばき。かざぐるま。やまがらし。れんりさう。せんだいはき。ひめはき。けし。

五月——六月

いちご。かき。まめがき。やまぶどう。すいかづら。くこ。うつき。しきみ。たけうつき。せにあふひ。たちあふひ。くさふち。すいめのえんどう。からすのえんどう。かすまぐさ。やはすえんどう。はまえんどう。

五月——七月

しながははき。ポーレージ。クロバー。きんせんくわ。

六月

くるみ。なつめ。くり。とちのき。しひ。あをきり。さかき。きさしげ。もくれん。にくけい。いぬつげ。なんでん。さんごじゆ。はこねうつき。いぬふち。てつせん。やなぎらん。

六月——七月

はせ。うるし。もみ。つが。にしきづた。うり類。きぼろし。はつか。やぐるまきく。たうもろこし。

六月——八月

まつばばたん。みぐのねつと。

六月——十月

あざみ。そば。すばいたいぶらんと。

七月

せんだん。ひのき。むくろじ。あわふき。やまひば。けんぼなし。そよこ。もちのき。ねずみもち。いぼた。くちなし。ごま。なつふち。

七月——八月

しなのき。なつはき。たにわたし。はす。ぼたいじゆ。おぼたいじゆ。あをやきさう。とちぼにんじん。しそ。うど。ひるがほ。せきこく。ちやふまんぼに——ぶらんと。

八月

ぬり。たて。ふしのき。

八月——九月

さるすべり。ひまはり。わた。くす。のうせんかづら。ひあふき。やはづさう。くされだま。ひごたい。ひなのらすつぼ。くるまばな。

九月

はごろもさう。たうごき。しせん。

九月——十一月

きづた。こまつなき。こすもす。はき。みぞはき。のきく

十月——十一月

きんくわ。ちや。ひは。

第五卷終

大正七年六月廿八日印刷
大正七年六月三十日發行

『國民の顧問』第五卷

編輯兼發行者

日本國民協會

東京市小石川區大塚仲町三十番地

代表者

鈴木光昭

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷者

萩原勝次郎

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

博文館印刷所

不許
複製

發行所

東京市小石川區大塚仲町三十番地

日本國民協會出版部

振替口座東京七六九〇番